

Vol. 35, No. 3

昆 蟲 (KONTYŪ)

Supplement  
10. IX. 1967

明治以降 物故昆虫学関係者経歴資料集

—日本の昆虫学を育てた人々—

長 谷 川 仁

農業技術研究所

Materials on the lives and contributions of the deceased  
Japanese entomologists since the Meiji Era

By Hitoshi Hasegawa

National Institute of Agricultural Sciences, Tokyo

は じ め に

50周年記念事業の一つとして「昆虫」記念号の発行が決つてから、その内容についてはたびたび委員会がもたれ、また委員を通じて各支部からの希望や意見が提出されたが、その中に昆虫学史やそれに関連した資料の集録も入れたらという声がかかなりあつた。殊に創立以来の「物故会員」の経歴や事蹟の紹介などはこの記念号にふさわしいという意見も出て、大体その線で話が進められた。しかし会員に限定したのでは集録範囲も狭くなり、昆虫学史の資料としては偏つたものとなると考えて、私は明治以降の昆虫学研究家・昆虫愛好者などの中から、経歴の判つた方をできるだけ多く集録して、将来発刊されるべき「日本昆虫学史」や「応用昆虫学発達史」の資料として遺したらという提案をしたが、結局はやぶ蛇となつてその係を嘱される結果となつて了つた。

今までこのような資料の必要を人一倍感じていただけに、日頃から多少のメモの用意があつたものの、いざ整理をはじめて見るとたちまち多くの障害にぶつかり、この難事業を突破する勇気がくじけ勝ちであつたが、幸い全国の多数の方々の御声援を得て、ここに不完全ながら193人の略歴と業績の一端を集録することができたことは全く御支援御協力の賜と感謝にたえない。この仕事は今まではばばらになつていた資料の一部を一堂に集め得たということで、初期の目的は達せられたと御考えいただければ幸である。

他人の経歴などは親友の間でも兄弟の間でもごく大ざつばな点しか判らないのが普通であり、経歴そのものにはプライバシーの面がかかなりあつて、これを公にすることは必ずしも歓迎されない場合もあり得るので、聞取調査には文献渉猟以上の困難が伴い、また事蹟の集録も別の意味で大変な手数を要した。

本稿はあくまで経歴と事蹟を主とした人に関する「昆虫学史」の素材であり、伝記ではないので記述は努めて客観的に扱い、なるべく主観的句の挿入をさけた。またやや不完全な資料でも歿年の明確な場合は集録した関係もあり、多少記載に粗密の差を生じ、また

記載に統一を欠く点も出来たことを御諒承頂きたい。なお本稿に関する誤謬や記載もれの事項等御気付の点は是非御指摘いただき、今後増訂の資として行きたいので御教示、御叱正を御願ひする次第である。

本稿集録にあたり資料提供その他で御支援を賜った多数の方々はその項でその御芳名を明記したが、改めて厚く御礼を申し上げる。また全般的な事項につき種々御助言と資料蒐集上の要点につき御教示を得た、本会名誉会員春川忠吉、岡崎常太郎、素木得一、矢野宗幹、故八木誠政の諸氏ならびに朝比奈正二郎、井上寛、一色周知、磐瀬太郎、野村健一、渋谷正健、安松京三、渡辺千尚の各評議員、日本応用動物昆虫学会名誉会員の岸田久吉、桑山覚、田中義麿の3氏、および多くの資料の提供にあずかり、また御鞭撻を賜った日野巖、小西正泰、中根猛彦、南川仁博、三輪勇四郎、森八郎、二宮栄一、奥谷禎一、笹本馨、田中正、上野益三の諸博士に深謝申し上げたい。なお元大阪植物防疫支所長の平野伊一氏からは特に本集録のために日本関係昆虫文献目録の「歴史・伝記・行政」に関する貴重なる未刊原稿と「昆虫論文執筆者索引」原稿の貸与にあずかった。末筆ながらその御厚情に対し、特に明記して感謝の意を表する次第である。

#### 凡 例

1. 本稿には明治以降に活躍された方で既に亡くなられた昆虫学者、応用昆虫学者、昆虫学啓蒙普及家、昆虫愛好者その他昆虫学に何等か関係のある日本人を五十音順に集録した。

2. 人名の読み方の難解な場合、本人使用の例が判つたものは振り仮名を付した。振り仮名のないものは読み易いものと読み方不明の場合とである。旧姓および旧名のあるものは人名の後にカッコ内に付記した。

3. 人名の後のカッコ内の洋数字は西暦の生年と歿年であるが、明治5年12月23日以前の方の生年月日は旧暦（大陰暦）なので、西暦（太陽暦）に換算した年月日をカッコに入れて併記した。その場合、月日は勿論年号まで変ることがあり得るので御注意頂きたい（例1参照）。ただし生年または生年月だけで誕生日の不明な場合には西暦の月を正確に書くとは長くなるのでそのままとした（例2参照）。

（例1）安政5年12月29日生、安政5年は西暦1858年に当るが全体を西暦に換算すると1859年2月1日生となり、年号の西暦年代と一致しない。

（例2）嘉永3年6月生という風に誕生日の不明な場合、西暦に換算すると正しくは1866年7月9日～8月7日生と書くべきであるが、煩雑となるので西暦を付記することを割愛した。また、旧暦の閏の場合は1ヶ年が13ヶ月となり、ある月が2回続くことになるのでその月の干支の不明な場合は正確な西暦年月日を算出し得ないので双方の場合を付記した（鳴門義民氏・田中房太郎氏の項参照）。

4. 人名の下の①は学歴、職歴等の経歴、②は主な報文・著書その他の事績、③は追悼関係・文献資料その他の備考の順に記載してある。

①の経歴は従来余り紹介がなく今回新たに判明したものは成る可く詳細に入れた。また父兄その他に知名人のある場合は便宜上多少の説明を付記した。明治5年以前に生まれた

方は歿年不明でも集録した例がある。享年は原則的に満年齢で数え、何年何ヶ月とはしなかつたので普通の伝記資料より年齢が少なくなっている。

② の主な事績ははじめ主要報文を例記したいと考えたが、時間的に選択が不能となつたので発表年代を示すことと、研究分野を知る手がかりを与えることに主眼をおいた。

③ の追悼関係資料その他備考欄には執筆者、文献名、表題等を記録し、肖像写真図示例を付記して、より詳細な資料を得たい人の便に供した。また昆虫名等に献名されているものは判るだけ例記し、また資料、出典や提供者に関する付記を行なつた。

## ア

青木 <sup>アキラ</sup> 朗 (1917~1951)

① 大正6年3月28日東京都浅草松葉町に道晃長男として生る(父道晃は目黒滝泉寺(目黒不動)の大僧正)。昭和10年3月駒込中学校卒、同18年3月第七高等学校造士館卒、同4月台北帝国大学理学部生物学科入学、同17年1月世田ヶ谷第12部隊に入隊、同6月除隊、同18年9月台北帝国大学理学部卒、同10月同校助手、同19年5月臨時召集、同20年11月中華民国国立台湾大学農学院勤務、同22年1月東京に帰還、同22年9月、立教女学院高等学校講師、同23年4月同教諭、同26年3月病気のため退職。

昭和26年7月22日歿 享年34才。

② 宮崎県榎峯付近の蝶, *Zephyrus* 5 (2/3) : 146~147 (1934), 日本昆虫図鑑のミズアブ科, シギアブ科, ツルギアブ科, コガシラアブ科, ムシヒキアブ科, オドリバエ科, アシナガバエ科を分担執筆(北隆館, 1950), *Undescribed alpine Asilidae from Formosa and Japan, with descriptions of new species* (後掲追悼集: 2~4 (1954)).

③ 青木朗氏の訃, 新昆虫 4 (11) : 24 (1951), 「あぶ」青木朗の追憶(秋田康一他3氏編, 1954) 内容は 1. 遺稿新種記載(英文), 2. 弔辞, 3. 大学時代の思い出(素木得一: 青木朗君の事ども(13~16), 青木文一郎(16), 中條道夫: 故青木朗君と鉄甲亀(17~19), 正宗巖敬: オオゴマダラとホウライカガミ(19~21), 他10篇(22~26)), 4. 桜島の思い出(後藤弘毅外12氏の追悼文(37~70)), 5. 朗さん(黄田多喜夫外9氏の追悼文), 6. 立教女学院の思い出(大谷てる外12氏追悼文(71~81)), 7. 家族の思い出(御両親令妹の追悼文(82~103)).

明石 弘 (1881~1946)

① 明治14年7月退蔵長男として東京に生る。明治38年7月東京帝国大学農科大学農学科卒、蚕業講習所技師、農商務省技師兼東京高等蚕糸学校教授、大正6年臨時産業調査局技師となり中国へ出張、同9年農商務技師に再任し、同10年欧米に出張、同14年農林技師兼蚕業試験場技師、昭和2年新設の農林省蚕糸局産業課長を兼務す。

昭和21年1月31日歿 享年64才。

② 桑ヲ害スル燈蛾科昆虫調査, 東京蚕業講習所蚕事報告 30 : 35~55 (1907), 蠶蛆ニ関スル研究, 蚕事報告 33 : 1~63 (1908), 蚕桑害虫篇(明文堂, 1909), 桑樹災害篇(明文堂, 1914), 近代蚕糸業発達史(明文堂, 1939)のほか多数の蚕業関係の報文がある。

③ 経歴資料は帝国大学出身者名鑑：アの p. 43 (1927) その他による。歿年は蚕糸試験場菊池実技官の教示による。

#### 秋山 元 (1853~?)

① 嘉永6年1月1日(1853年2月8日)下総国香取郡南玉造村生, 旧名一太郎。明治12年以前に内務省勸農局に就職, はじめ内藤新宿農事試験場において, 害虫に関する質疑応答に従い明治12年9月より害虫飼育調査を行なう。同16年7月駒場農学校雇となり, 同年8~9月練木喜三(別項)と共に北海道蝗害調査に出張, 同14年9月より佐々木忠次郎(別項)の下で害虫研究に従事蠶蛆の生態調査飼育等を行なう(同17年8月蠶蛆原因を探究して予防法格別勸励候付慰労金下賜(5円), 同日付同理由により佐々木も亦慰労金の下賜(30円)を受けている)。同19年3月退職, 同8月秋田県勸業課雇, 任秋田県属, 勸業課勤務, 同22年3月農商課勤務, 同23年同内務部商工課勤務, 同26年2月病氣(脳溢血)のため退職, 歿年不明。

② 瓢虫ニ有益有害ノ二種アルノ説, 農事月報 18(1883), 蠅螂解説, 農芸志林 14(1883), 同文転載, 大日本農会報告 53: 12~13(1885), 苹果を害するワタジラミ駆除法, 大日本農会報告 46: 30~31(1885), 蠅改良説付蚕に稲の飼料を与ふる試験, 大日本農会報告 53: 51~58(1885) (本報告はクワゴと家蚕を交配せし試験の本邦最初のもの), 葡萄蛾駆除質問回答, 大日本農会報告 137: 37(1893) その他の報文のほか, 明治12年9月よりの害虫飼育記録「虫類経験書(1~3)」(稿本), 皇国蝶譜(本邦産蝶類解説書)(稿本)その他多数の稿本が農業技術研究所図書課その他に遺されている。

③ 本経歴資料は秋田県農事試験場渡辺忻悦技師, 同県果樹試験場成田弘技師の提供による。練木喜三: 青森函館両県下出張復命書, 農務顛末 5: 176~178(1957), 矢野宗幹: 応用昆虫学史(全国農業学校長協会編: 日本農学発達史: 335~363(1943)(本文352頁の秋元元は誤植)。

#### 足立 元太郎 (1859~1912)

① 安政6年3月26日(1859年4月28日)江戸本郷で栄蔵長男として生る。明治14年7月札幌農学校卒(第2期), その後開拓使御用掛, 北海道庁技手, 札幌農学校助教授兼務, 同28年12月生糸検査所(横浜)技師, 同37年7月生糸検査所調査部長, 同年4月万国博覧会へ生糸出品のため米国へ出張, 同12月帰国。

大正元年8月1日歿 享年53才。

② 害虫駆除の説(講演)北海道勸業協会(1883), 専門は養蚕学であるが松村松年(別項)の昆虫学の師の1人で英人 G. Lewis の北海道採集に随行し採集を行ない, Lewis 同定の昆虫多数を所蔵せしため松村の昆虫学研究に便宜を与えしという。

③ 参考: 昆虫学に関係ある大家の略歴松村松年氏, 昆虫世界 14(156): 430~432(1910), 松村松年: 松村松年自伝(造形美術協会, 1960), 略歴は桑山覚博士の提供による。なお, 長男安立仁氏は元台湾帝国大学教授, 現玉川学園大学農学部長, 農博である。

#### 荒川 保雄 (旧姓 手代木) (1893~1933)

① 明治26年1月1日福島県会津の手代木善次2男として生る。明治41年同県耶摩郡荒川

保洲の養子となる。大正6年3月東京農業大学農学部卒，同7年より11年まで南満洲製糖株式会社勤務，同11年秋渡米ユタ州立大学およびコーネル大学に学び昆虫学を専攻，同14年ユタ州立大学卒，バチェラーオブサイエンスの学位を受く，同14年秋アイダホ州セント・アンソニー・ジョン・アーレン種子会社勤務，同15年帰国，南満洲鉄道株式会社農事試験場勤務。

昭和8年8月12日福島県に帰省中，平町に歿 享年40才。

② 南満洲産の鳳蝶類, *Zephyrus* 2(2): 91(1930), 蕪のハムシの生活史(1~2), 昆虫世界 34(391): 74~79, (392): 110~114(1930), 南満洲の蝶類 *Zephyrus* 3(1): 29~(1931), ウスバシロテフおよびエゾシロテフの翅脈異常について, 同上 3(3/4): 183~(1931), 南満洲における梨花潜象虫の研究, 満鉄農試研究時報 5: 13~(1931), 衣虱の發育に及ぼす温度の影響, 応用動物学雑誌 4(1): 8~(1932), 毛虱に関する研究(1~3), 昆虫世界 37(430): 183~189, (431): 220~228, (432): 256~264(1933), ベニカミキリ属天牛の内部生殖器の差異について, 昆虫 7(4): 178~179(1933), 衣虱の研究(遺稿集, 1936)。

③ 荒川保雄氏の逝去を悼む, 昆虫部部報(東京農大) 3(2): 42(1935)(写真および略歴付), 衣虱の研究(1936, 写真略歴付)。

荒木 <sup>ヘルツ</sup>東次(1914~1945)

① 大正3年1月12日三雄2男として東京市港区芝明舟町に生る。韮絵小学校，東京中学校を経て法政大学法学部予科卒，昭和9年北朝鮮各地に採集，多くの未記録昆虫を採集す。昭和12年頃よりオオキノコムシの分類に専念す。昭和18年沖電気株式会社入社，昭和19年頃より著しく健康を害し神奈川県片瀬海岸に転居。

昭和20年5月28日心臓マヒのため歿 享年31才。

② Description of a new genus of Erotylidae from Japan proper, *Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa* 31(216): 364~366(1941), Description of a new species of Erotylidae from Formosa 同上 31(216): 367~368(1941), Description of two species of Erotylidae from Formosa (英文) 関西昆虫学会報 XI(1): 55~58(1941), 大蔵虫覚書(1), 昆虫界 9(89): 440~446(1941), 偽瓢虫科覚書(1), 昆虫世界 48(565): 171(1944), 金子富雄氏の採集せるマライ産偽瓢虫科について, 同上(567): 130~132(1944)。

③ 経歴資料は令弟荒木三郎氏の提供。

## イ

飯塚 <sup>アキラ</sup>啓(1868~1938)(写真 Pl. 2)

① 明治元年6月群馬県群馬郡小野上村に孝七長男として生る。第二高等学校卒，明治30年7月東京帝国大学理科大学動物学科卒，同33年8月第六高等学校教授，同34年9月東京帝国大学理科大学助教授，同43年理学博士の学位を受け学習院教授となる。大正4年7~8月台湾および澎湖島へ採集旅行，昭和5年退職，昭和6年9月科学博物館動物学部長。

昭和13年12月10日歿 享年69才。

② クサカゲロフの生活歴史, 動物学雑誌 8(91): 157~160(1896), 鞘翅類の翅の起原お

よび発育, 同上 15 (181) : 415~(1903), 尺蠖の保護的擬態の一新例, 同上 16 (185) : 111~(1904), 満洲の螢, 同上 24 (287) : 538~(1912), はさみむし類に就て, 理学界 12 (7) : 487~491(1914), 台湾産アケボノアゲハ, 同上 27(326) : 640~(1915), ヒリッピンの飛蝗, 自然科学と博物館 62 : 6~8 (1935), 比律賓産蝶類標本に就て, 動物学雑誌 48 (8/10) : 653~664 (1936).

③ 自然科学と博物館 10 (110) : 3~19 (1939), 水野常吉, 秋保安治, 入江整三, 大島広, 吉田貞雄, 百瀬文雄, 内田一の諸氏による追悼記および略歴.

イ クマ ヨ  
生 熊 与 一 郎 (?~1916)

① 静岡県浜名郡平貴村の人(生年不明). 明治 33 年浜松蚕業学校卒, 同 35 年鹿児島県鹿屋農学校教諭, 同勤務中第 13 師団衛生隊付として樺太に渡り, 余暇に昆虫調査を行なう. 明治 39 年鹿児島第七高等学校勤務, 鹿児島農学校教諭, 志布志中学校教諭を歴任, 同 41 年長崎県立農学校兼長崎県蚕業講習所講師, 大正 2 年京城高等普通学校教諭.

大正 5 年 4 月 1 日歿.

② 応用昆虫学教科書(江馬定治郎と共著, 有隣堂, 1904), 昆虫実験談(一)~(八), 昆虫世界 3~4 卷(1899~1900), 黄楊の葉捲虫に就て, 同上 6 (62) : 409~411, 6 (63) : 437~441 (1902), 大島産の浮塵子に就て, 同上 7 (69) : 183~190, 7 (70) : 227~235 (1903), 樺太の昆虫に就て, 同上 10 (103) : 99~103 (1906).

③ 訃報 昆虫世界 20 (225) : 220 (1916), 氏に献名された昆虫が数種ある.

池 田 作次郎(旧姓宮沢)(1860\*~1938) (写真 Pl. 2)

① 万延元年\* 新潟県古志郡山崎村の庄屋作兵衛 2 男として生る. 麻布学農社に学ぶ. 明治 16 年駒場農学校を経て東京帝国大学理科大学動物学科選科修業, 同 22 年農科大学授業囑託, 同 26 年退職, 同 28~29 年頃都文館中学博物科教諭(当時の学生に三宅恒方(別項)あり), 同 34 年 9 月鹿児島第七高等学校造士館教授(当時の学生に江崎悌三(別項)あり), 大正 8 年退職, 郷里長岡に帰る, 同 9 年 9 月新潟高等学校動物学講師, 同 14 年 3 月退職の後, 上京す(淀橋羽根木に在住).

昭和 18 年 1 月 27 日歿 享年 84 才.

② 害虫雑録(1~11), 動物学雑誌 1(10) : 339~343, (11) : 371~374, (12) : 411~416, (13) : 464~468, (14) : 505~509, 2 (15) : 27~35, (17) : 106~111, (18) : 149~151, (19) : 193~197, (21) : 278~285, (22) : 333~336 (1889~1890), 本邦産撚翅類ニ就テ(1~2), 同上 8 (94) : 281~290, (96) : 374~377 (1896), アブと蝶の波渡, 同上 13 (152) : 213~214 (1901), その他 1889~1901 にかけて害虫報文あり.

③ 訃報: 動物学雑誌 56 (1, 2, 3) 巻頭肖像写真付, 江崎悌三: 鹿児島の思い出, 第七高等学校造士館生物研究会々誌 2 : 1~4 (1936), 平坂恭介: 恩師の思い出, 池田先生のこと, 越佐昆虫同好会 5 (1) : 25~26 (1951), なお令弟岩治(1872~1922)も動物学者, 理学博士で京都帝国大学教授であり, 養嗣子嘉平も動物学者として名高い. \*生年は年令による推定.

池 田 米 男 (1905~1946)

① 明治 38 年 2 月 21 日長崎県北高来郡本野村に生る。大正 15 年 3 月長崎県立農学校卒，昭和 4 年 3 月鹿児島高等農林学校農学科得業，同 5 年 2 月幹部候補生として歩兵第 46 聯隊入隊，同年 11 月現役満期退官，同年 12 月科学研究補助員として鹿児島高等農林学校動物学教室勤務，昭和 6 年 5 月鹿児島県農林技手，同 12 年歩兵第 46 聯隊へ召集入隊。

昭和 21 年 8 月 22 日急性肺炎にて歿 享年 41 才。

② 温泉蒸気によるナスのネマトーダ防除試験（昭和 6～8 年度，鹿児島県農事試験場業務功程），アカマルカイガラムシの発生生態と防除に関する研究（昭和 8～9 年度）（鹿児島県農業試験場業務功程）。

③ 鹿児島県農試原敬一技師提供資料による。

石井重美（旧姓秋山）（1883\*～1933）

① 明治 16 年静岡県田方郡内浦村の秋山六右衛門の 2 男として生る。沼津小学校卒，明治 35 年 3 月東京郁文館卒（葦山中学より転校），同 42 年 7 月東京帝国大学理科大学動物学科卒，同 43 年北海道水産試験場技師，同 45 年東京水産講習所教授，大正 10 年退職，その後曹洞宗大学，東洋大学，立教大学，東京商科大学，慈恵会医科大学等の自然科学，生物学講師を歴任す。

昭和 8 年 7 月 31 日歿 享年 50 才。

② 蟻の社会生活（大阪毎日新聞社，1924），キオビベッカウバチに就ての二，三の観察，昆虫 2 (3) : 183～188 (1927)，水産学者で魚類およびその寄生虫に関する論文のほか一高時代秋美生の名で発表した「変動物学」（1906）をはじめ「自然と科学」（1922），「生物界の驚異」（1924），「生物科学総論」（1929）等多数の著書がある。

③ 中沢毅一：石井重美氏，動物学雑誌 45 (541) : 483 (1933)。\* 生年は年令による推定。

石井 梯（1894～1959）

① 明治 27 年 8 月 6 日神奈川県中郡秦野市下大槻に銀次郎 2 男として生る。大正 2 年 3 月県立第二中学校（後の小田原中学校）卒，同 7 年 7 月東京帝国大学農科大学実科卒，引続き同大学嘱託として勤務，同 11 月同雇，同 9 年 5 月退職し，同 6 月植物検査官補，植物検査所長崎支所長，同 13 年 12 月長崎税関植物検査課長，昭和 2 年 6 月農林省農事試験場技手，昆虫部勤務，同 3 年 5 月フィリッピン，マレー，インドに出張，同 4 年 6 月一旦帰国し更に 8 月フィリッピンに出張，同年 12 月帰国，同 5 年 7 月中国，仏印，タイ，マレー，フィリッピンへ出張，同 6 年 3 月帰国，同 10 年 9 月東京高等農林学校教授，同 22 年・23 年度本会々長，同 24 年東京農工大学教授，同年 6 月農学部長，兼東京農林専門学校長同教授，同 26 年 3 月兼職解除，同 27 年 5 月農学部長解除，33 年 3 月退職，同 33 年 4 月社団法人植物防疫協会研究所長，同年 5 月東京農工大学名誉教授。

昭和 34 年 11 月 19 日歿 享年 65 才。

② 温室のスリップスについて，昆虫世界 24 (277) : 301～305 (1920)，独活の 2 害虫，病虫害雑誌 7 (12) : 686～687 (1920)，ヒラタアブの寄生蜂について，昆虫世界 25 (287) : 221～225 (1921)，Observations on the Hymenopterous parasites of *Ceroplastes rubens*，植物検査所欧文報告 3 : 69～114 (1923)，*Enargopelte ovivora*, a new chalcid-fly from Japan,

Kontyû 2 (4) : 206~208 (1928), The Encyrtinae of Japan (1~2), 農事試験場欧文報告 3(2)(1928), 農事試験場報告 3(1)(1932), Some Philippine Eucharids, with notes on their oviposition habits, 同上 3 (3) : 203~212 (1932), Notes on some chalcidoids from the Micronesian Islands with descriptions of two new eucharids, Annot. Zool. Jap. 20 (2) : 106~108 (1941), New chalcid-parasites of Cecidomids-flies injurious to the soy bean, 応用昆虫 4 (3) : 141~143 (1950), Description of a new parasitic wasp of *Ceroplastes rubens* Maskell (安松京三と共著), Mushi 27(10) : 69~74(1954). このほか 1958 年にかけて多数の報文があるほか, 害虫防除の実際(養賢堂, 1936), 農業昆虫学(養賢堂, 1949)の著書, 日本昆虫図鑑(1932, 1950)の分担執筆および武蔵野昆虫誌(三省堂, 1940), 南方昆虫記(大和書房, 1942)などの著書がある.

③ 桑名伊之吉: 石井君の新嘉坡よりの通信, 昆虫世界 32 (376) : 22~24 (1928), 木下周太: 石井悌略歴, 農薬と病虫 4 (1/2) : 54 (1950), 石井悌: 研究の思い出, 植物防疫 10 (2) : 84 (1956), 同: わが 10 代を語る, 新昆虫 10 (10) : 36~38 (1957), 同: わが 10 代を語る後日譚, 同上 11(11) : 17(1958), 同: 私の長崎時代の思い出, 大阪植物防疫 4 (44) : 274~285(1955), 石井悌博士経歴, 同上 7(3/4) : 110~112 (1959), 土生昶申: 石井悌先生, 昆虫 27 (4) : 287~289 (1959) 河田党: 石井博士をいたむ, 日本応用動物昆虫学会誌 3 (4) : 294~295 (肖像写真略歴付) (1959). なお, 女婿石井象二郎博士が京都大学教授として活躍しておられる.

#### 石川 千代松 (1860~1935) (写真 Pl. 2)

① 万延元年 1 月 8 日 (1860 年 1 月 30 日) (戸籍上は文久元年 4 月 6 日 (1861 年 5 月 16 日)) 周二 (後潮叟と改名) の 2 男として江戸に生る. 明治 5 年 3 月進文学舎で英語を学ぶ, 同 7 年 3 月外国語学校英語科第 4 級に入学, 同 8 年 9 月開成学校予科第 3 級に入学, 同 15 年東京大学理学部生物学科卒, 同年東京大学御用掛準教授, 同 16 年 11 月同助教授, 同 18 年 12 月ドイツへ私費留学, 同 22 年 10 月帰国, 理科大学助教授, 同 11 月帝国博物館学芸委員兼務 (同 33 年 8 月まで), 同天産部勤務, 同 23 年 8 月農科大学教授, 同 24 年 8 月理学博士, 同 33 年 8 月東京帝国博物館々長兼務, 同 39 年 2 月濠州へ出張, 同 41 年 5 月欧米各国へ出張, 同 44 年 4 月帝国学士院会員, 大正 13 年 2 月退官, 同 7 月帝国大学名誉教授, 北米に旅行, 同 15 年~昭和 2 年米国各地を巡歴, 同 9 年台北で開催の日本学術協会大会に出席中入院,

昭和 10 年 1 月 17 日肺壞疽のため台北で歿 享年 75 才.

② Case of mimicry among Japanese Lepidoptera, Tokyo Times (1878), Notes on variation in some Japanese Lepidoptera, Pappilio 2 : 35~37(1882), Zoological collection, Catalogue of Lepidoptera classified to M. A. Fenton, Science Museum, Department of Science, University of Tokyo (1882), オーストラリア洲のハムブルビ一, 動物学雑誌 2 (16) : 94 (1890), 日本産蝶類, 同上 3 (27) : 1~6, (28) : 54~57, (29) : 95~98 (1891), 昆虫の話 (1~15), 同上 4 (43) : 181~187—10 (112) : 51~55 (1892~1898), 日本産蝶類の気候上の変形に就て, 同上 6 (65) : 98~100 (1894), 白蟻の話, 同上



24 (285) : 429, (287) : 548 (1912), その他動物学, 進化論等に関するきわめて多くの報文がある。

③ 石川千代松全集 1~10 (1936), 石川千代松 : 私が蝶々を集めた頃, 蟲 2 (4) : 242~245 (1930), 同 : 五十年前の日本の動物学, 動物学雑誌 41 (490~491) : 349~358 (1929), 昆虫学に関係ある大家の略歴 (10) 石川千代松氏, 昆虫世界 15 (163) : 111~115 (1911), 江崎悌三 : 日本昆虫学史話 (1), 昆虫 23 (4) : 182~188 (1955), 上野益三 : 石川千代松博士, 科学知識 26 (12) : 24~28 (1946), 町田次郎 : 石川博士の業績, 昆虫 9 (1) : 1~6 (1935), 故石川千代松博士記念号, 動物学雑誌 47 (562, 563) : 445~487 (1935) (口絵写真, 谷津直秀 : 略伝 (445~446) 年譜, 佐々木忠次郎 : 嗚呼石川博士 (456~458), 宮嶋幹之助 : 石川千代松先生を想ふ (459~462) 他), 田中館愛橋 : 石川千代松先生の思い出, 科学 5 (4) : 166~167 (1935).

石田 <sup>マサト</sup>昌人 (1877~1940) (写真 Pl. 3)

① 明治 10 年 10 月 21 日生. 明治 30 年 3 月札幌農学校農芸科卒, 同年札幌農学校助手, 同 38 年 4 月熊本県立熊本農学校教諭, 同 40 年 6 月退職, その後台湾に渡られ殖産局, 糖業試験場等を経て大正 2 年 10 月台湾総督府技手, 同年 5 月総督府農事試験場技師を兼任, 同 10 年 5 月総督府技師. 昭和 3 年 6 月退官, 同 10 月北海道大学農学部嘱託昆虫学教室勤務, 同 13 年 9 月嘱託を解かる.

昭和 15 年 8 月 18 日北海道で歿 享年 63 才.

② 夜盗虫と糖蜜誘殺法 (1~2), 昆虫世界 2 (6) : 45~47, 2 (7) : 81~86 (1898), 稲の害虫イネノツトカ (新称) (I~VII), 北海道農会報 1 (7)~1 (12) : 7~14 (1901), 稲の害虫ネクヒザウムシ (新称) *Notaris oryzae* Ishida 北海道農会報 2 (13) : 90 (1902), 棉の害虫益虫報告, 台湾殖産局出版 12 (1913), 甘蔗螟虫調査報告 I~II, 台湾殖産局出版 87, 88 (1915), Fauna of Thysanoptera in Japan (I~VII), Ins. Mats. V : 149~153, XI : 67~74 (1936), 昆虫採集日記 (1903), 昆虫学術語辞典 (1933), 著書の他多数の報文がある.

③ 略歴資料は桑山覚博士の提供による.

*Ishidaella, ishidai, masatonis* など多くの昆虫名に献名されている.

石 <sup>イシ</sup>谷 <sup>タニ</sup>福 <sup>フク</sup>信 <sup>ノブ</sup> (1915~1946)

① 大正 4 年 11 月 10 日大阪府堺市錦之町に生る. 昭和 2 年 3 月堺市立錦西小学校卒, 同 8 年 3 月大阪府立堺中学校卒, 同 11 年 3 月岐阜高等農林学校卒, 同年 4 月農林省農事試験場雇, 同 12 年 8 月応召, 同 13 年 3 月除隊, 農林省農事試験場へ復帰, 同年 9 月 28 日退職, 同 14 年華北交通株式会社農事試験場に入所, 同 19 年 4 月応召.

昭和 21 年 3 月 7 日華南の桂林で戦病死 享年 30 才.

② 大阪府におけるタマムシ科の分布, 関西昆虫雑誌 1 (1) : 18 (1933), 棉蚜虫の防除効果に就て, 華北農業 2 : 98 (1942), 棉蚜虫防除に関する基礎研究, 華北農業 3 (1942), 水稻に傷葉を生ぜしめる稗蠅の一新種, *Hydrellia sasakii* Yuasa et Isitani イネクロカラバエ (イネクキミギワバエ) (湯浅啓温と共著), 動物学雑誌 51 (7) : 447~450 (1943), 華北にお

けるアワノメイガに関する研究 (1), 応用昆虫 5 (1) : 17~20 (1949).

③ 経歴資料は農業技術研究所職歴ならびに長崎市の近藤登美子氏による。なお同氏の採集品の一部は農業技術研究所および九州大学農学部 (山西省五台地区の採集品) に保存されている (安松京三: 山西の昆虫 p. 66, 山西学術探検記 (朝日新聞社, 1943))。

石村 清 (旧名 明矩) (1910~1956)

① 明治 43 年 2 月青森県に生る。昭和 2 年 3 月青森県立商業学校卒 (第 18 回生) 同 3 月青森市浦町尋常高等小学校訓導, 同 5 年 3 月浪打尋常高等小学校に転任, 同 21 年 3 月東郡石江小学校に転任, 同 23 年 3 月青森市脇野中学校に転ぜられ, 更に同 28 年 4 月浪打中学校にかわられた。その間みちのく学生生物同好会顧問, 青森県生物学会理事を勤む。

昭和 31 年 10 月 21 日歿 享年 46 才。

② 青森県の蝶類について, 青森県博物研究会会報 2 : 1~18 (1935), A new form of *Sympetrum kunckeli* Selys from northern Honshu, 青森県博物研究会会報 4 : 1~4 (1937), オオルリシジミの生活史, Zephyrus 7 (2/3) : 175~183 (1937), A list of Odonata from Aomori Prefecture, 青森県博物研究会会報 6 : 4~22 (1938), *Lestes japonicus* Selys 成虫について (奥村定一と共著), 昆虫 12 (3) : 84~92 (1938), *Lesta sponsa* Hanse-mann の形態とその習性 (奥村定一と共著), 同上 15 (1) : 27~36 (1941), 日本産ゴマシジミの生活史, 生態昆虫 4 (10) : 27~34 (1952), トワダオオカの幼生期について, 衛生動物 3 (1/2) : 12~19 (1952), 十和田・八甲田における蚊族幼虫の棲息環境, 生態学研究 13 (4) : 249~256 (1954).

③ 齊藤和夫: 青森県昆虫研究者の足跡 [I], 石村清氏 (1)~(2) (肖像写真, 略歴, 著作目録とその解説付) 進化 10 (3/4) : 56~58 (1958), 同 11 (1) : 35~37 (1960), 磐瀬太郎: 石村清氏の死を悼みて, 生態昆虫 5 (13) : 185~(1956).

石森 <sup>ナオト</sup>直人 (1890~1961)

① 明治 23 年 5 月 11 日長野県上田市で治部之助長男として生る。県立上田中学校, 第二高等学校を経て, 大正 3 年 7 月東京帝国大学農科大学農学科卒, 同助手, 同 10 年欧米留学, 同 13 年帰朝, 盛岡高等農林学校教授, 同 14 年農学博士 (鱗翅類幼虫の直腸壁内のマルピギー氏管に関する研究), 昭和 3 年東京帝国大学農学部講師, 東京農業教員養成所助教授を経て東京農業教育専門学校教授。

昭和 36 年 5 月 31 日歿 享年 71 才。

② Les tubes de Malpighi à la paroi du rectum du ver à soie, Rapport préliminaire, Bull. l'Assoc. Sér. Japon 19 : 3~(1916), Distribution of the Malpighian Vessels in the wall of the rectum of Lepidopterous larvae, Ann. Entom. Soc. America 17 (1) : 75~84 (1924), 蚕兒 2~3 鱗翅目幼虫ノ血球ニ関スル研究, 蚕業新報 33(390) : 1312~1320 (1925), 蚕兒ノ濃病ニ於テ胃壁表皮及ビ其他ノ細胞ノ侵サルル場合, 植物及動物 3 (1) : 10~14 (1935), 蚕体解剖図譜 (丸山舎, 1921), 蚕 (岩波書店, 1948), 蚕・虫・農業 (1943) その他 1916 年より 58 年にかけて多数の報文がある。

- ③ 石森直人：研究の動機，新昆虫 11(6)：12~14(1958)，八木誠政：石森直人博士を偲ぶ，昆虫 29(4)：279~280(1961) (肖像写真付)。

イシワタ シゲタネ  
石渡 繁胤 (1868~1941)

- ① 明治元年10月2日(1868年11月15日)神奈川県三浦郡田越村に正敏(佐々木長淳の項参照)長男として生る。明治25年東京大学農科大学農学科卒，群馬県中学校教諭を経て蚕業講習所入所，同32年京都蚕業講習所技師，試験部長，同36年農商務省蚕糸課技師，歐洲に留学，同43年京都蚕業講習所長，同44年原蚕製造所技師長，大正元年農学博士(蚕児の雌雄鑑別に関する研究)，同10年農林省農務局技師，後東京農業大学教授となり，昭和6年~同11年まで同校専門部長，蚕業試験場嘱託兼務。

昭和16年8月18日脳軟化症にて歿 享年72才。

- ② 栗虫ノ繭，日本農業新誌 5：839~840(1896)，蚕蛹ノ外形ニ於ケル雌雄ノ特徴，農学会報 45：2~3(1900)，蛆蠅産卵日記，蚕業新報 9(94)：72~74(1901)，野蚕糸論，同上 10(107)：140~142(1902)，蚕児雌雄判別法，大日本蚕糸会報 13(145)：17~18(1904)，*Sur les marques exterieus des sexes du ver à sore Rpt. Seric. Assoc. Jap.*, 146：1~2(1904)，栽桑と養蚕(1908)，蚕卵の雌雄，大日本蚕糸会報 22(256)：11~12，(258)：14~15，(259)：10~12(1913)，歐羅巴蚕種ノ飼育，蚕業新報 21(242)：53(1913)，嚙蛆ノ蚕児神経球ニ寄生スル位置，佐久良会誌 16：18~19(1924)，蚕の雌雄鑑別の理論と實際(1925)，嚙蛆ノ寄生状態ニ就テ(永盛新三郎と共著)大日本蚕糸会報 35(415)：1004~1010(1926)，*Sexual differences in the larvae of silkworms and some other moths, Proc. III Pan. Pacific Sci. Cong. 2：2171~2172(1928)*。

- ③ 人名辞典類より資料を得た。

伊勢 秀夫 (1911~1938)

- ① 明治44年3月7日生。昭和4年3月大阪府立生野中学校卒，昭和8年3月岐阜高等農林学校農学科卒，同4月財団法人名和昆虫研究所技手，同7月同所退職，同7月岐阜高等農林学校研究科入学，昭和9年8月同上退学，農林省農事試験場見習生として入場，昭和10年7月見習生を解かれ練習生となり同11年5月練習生を解かれ，栃木県農林技手に任ぜられ県立農事試験場勤務，同11年7月病虫害防除委員，同13年3月願により退職，後郷里徳島県那賀郡中野島村へ転居。

昭和13年6月8日歿 享年27才。

- ② 岐阜地方に産するピロウドコガネ属の昆虫に就て，昆虫世界 37(426)：51~54(1933)，麦瘦蠅成虫採集框に就て，農業及園芸 13(2)：577~580(1938)。
- ③ 訃報，昆虫世界 42(491)：237(1938)，略歴資料は栃木県農試高橋三郎部長による。

磯村 純一 (1890~1932)

- ① 明治23年7月大阪府三島郡大冠村生，六酔と号す。明治42年(頃)三島郡磐手小学校訓導，同年8月第22回全国害虫駆除講習会修業，同45年同村に蜻螢学舎を創立，蜻螢学舎要報を発行，大正7年三島郡磐手村に転居，蜻螢学舎昆虫研究所と改称，後に東京に出

インセクト社を経営標本商となる。大正9年陸軍被服本廠に奉職，衣服害虫研究に従事。

昭和7年7月14日歿 享年42才。

② クサギの花に來集する天蛾目録，博物之友 9 (59) : 28~29 (1909)，珍奇の天牛ウシヅラカミキリに就て，蜻蛉学舎要報 5 (1914)，松の新害虫アミヒゲナガカミキリに就て，昆虫世界 21 (236) : 161~162 (1917)，雀の巢と毛織物害虫，昆虫世界 34 (392) : 137~139 (1930)，このほか 1909年より 1931年にかけて多数の発表があり，六酔の名で書いたものも多い。

③ 計報，昆虫世界 36 (421) : 324 (1932)，磯村純一：私望，昆虫世界 27 (273) : 186~188 (1920)，江崎悌三：日本の現代昆虫学略史，昆虫 25 (4) : 180 (1957)。

伊 藤 篤太郎 (1865~1941)

① 慶応元年11月29日 (1865年12月24日) 延吉長男として生る (父延吉 (旧姓中野) は名古屋の医師，母小春は伊藤圭介 (1803~1901) 理学博士，男爵，植物学者の5女)。明治7年愛知英語学校入学，同10年病により退学，同10年東京大学医学部予科入学後病により退学，爾後祖父圭介に従つて博物学を修む。同17年3月北米を経て英国に渡り同5月ケンブリッジ大学入学，同20年9月まで植物学を学ぶ。同20年11月帰国，同23年11月愛知尋常中学校教諭嘱託，同28年11月教諭，同29年同校文部省直轄廃止に伴い退職，同31年東京成城学校講師，同33年6月理学博士，同42年5月台湾総督府植物調査嘱託，大正10年新設の東北帝国大学理学部講師，後に教授となる。

昭和16年3月21日歿 享年76才。

② トビトビムシ説，錦窠翁叢誌誌品物之部 24 丁表 (図) 裏 (解説) (1882)，*Lühdorfia puziloi* Ersch. について，附吉田平九郎翁略伝，動物学雑誌 1 (11) : 377~379，蜜柑と蟻との関係，植物学雑誌 160 (1900)，蟻の菌畑，昆虫世界 8 (86) : 418~422 (1904)，ナワコンボソアリ，*Crematogaster aubesti* Em. var. *nawai* nov. (新称)，同上 18 (200) : 135~138 (1914)，Formicidarium Japonicorum species novae vel minus cognitae, Ann. Soc. Ent. Beleg. 58 : 44~45 (1914)，ナワオオアリ *Camponotus fallax* Nyl. var. *nawai* Ito, 昆虫世界 25 (281) : 3 (1921)。

③ 矢野宗幹：伊藤篤太郎博士伝，桜 (1941)，内田一：日本跳虫研究史と日本産跳虫総目録，自然科学と博物館 9 (106) : 1~9 (1938)，杉本勲：伊藤圭介 (1960)。

糸 賀 <sup>アキラ</sup> 璋 (1894~1941)

① 明治27年6月10日茨城県稲敷郡金江沢村生。茨城県立竜ヶ崎中学校卒，中央大学中退，千葉県東葛飾郡我孫子町で酒造業を営む。昭和3年横浜市中区赤門町に昆虫標本採集用具店を営む。

昭和16年12月16日病歿 享年47才。

② コフキトンボとオビトンボの形態比較，アゲハ 2 (2) : 9~10 (1933)，キアゲハの3新型，アゲハ 2 (1) : 1~3 (1933)，ヒメウラナミジャノメにおける翅紋の変化，アゲハ 2 (3) : 1~6 (1933)，ナガサキアゲハ雌雄型，アゲハ 3 (2) : 1~2 (1937)，ホリシャルリマダラの雌

雄型, アゲハ 3 (3) : 1~ (1937). 昭和 7 年横浜昆虫同好会を神田重夫 (別項) と共に発会, 同県昆虫学啓蒙につくす.

③ 平山修次郎: 計報, 虫の世界 4 (7/8) : 137 (1942).

稲村 <sup>ソウゾウ</sup> 宗三 (1890~1945)

① 明治 23 年 5 月 3 日生. 明治 41 年 3 月埼玉県立熊谷農学校卒, 大正 3 年 3 月台湾総督府技手, 農事試験場昆虫部勤務, 同 10 年 10 月官制改正台湾総督府中央研究所勤務, 同 13 年 8 月基隆植物検査所長, 同 15 年殖産局農務課勤務, 昭和 17 年 10 月陸軍技師に任ぜられ第 14 軍軍政監部付.

昭和 20 年 6 月 10 日フィリッピン, ルソン島フェムスクイルにて戦病死 享年 55 才.

② イナムラテナウ (*Novius inamurae* Mats.) に就て, 台湾農事報 4 (39) : 16~17 (1910), 七星山昆虫目録 (楚南仁博と共著), 台湾博物学会報 2 : 10~13 (1912), 台北付近における一点大螟蛾卵寄生蜂に就て, 台湾農事報 6 (63) : 17~23 (1912), 蜜蜂の飼養によりて得らるる利益, 同上 7 (76) : 272~275 (1913), 桃園魚池水生昆虫類 (1~2), 台湾博物学会報 3 : 236~237, 4 : 230~231 (1914), 台湾における養蜂業, 台湾農事報 8 (88) : 225~246 (1914), 泥負虫の寄生蜂, 同上 9 (99) : 163~165 (1915), 移出植物検査品並にこれに寄着する病害虫に就き, 同上 15 (172) : 109~114 (1921), 移住飛蝗の調査並に駆除顛末 (素木・楚南と共著), 殖産局出版 635 : 1~59 (1933).

③ 経歴資料は南川仁博博士を通じ子息稲村宏氏の提供による.

猪 <sup>イノマダ</sup> 股 修二郎 (1893~1958)

① 明治 26 年 7 月 25 日秋田県由利郡石沢村館 (現本荘市館) に生る. 明治 36 年 3 月秋田県由利郡石沢尋常高等小学校尋常科卒, 同 40 年 3 月同校高等科卒, 同 45 年 3 月秋田県立秋田中学校卒, 大正 4 年 7 月第二高等学校第二部乙類卒, 同 7 年 7 月東京帝国大学農科大学農学科卒, 同 7 年 12 月 1 年志願兵として弘前輜重兵第八大隊に入隊, 同 8 年 11 月除隊, 同年農商務省蚕糸業改良に関する事務取扱を嘱託, 同 10 年 3 月前嘱託解任, 鳥取高等農林学校講師, 同 6 月同校教授, 昭和 2 年 2 月応用昆虫学研究のため 3 年間亜米利加合衆国, 独逸国および伊太利国に留学, 同年 5 月 1928 年 8 月 12 日より 18 日まで亜米利加合衆国紐育州イサカ市に開催せられた第 4 回国際昆虫学会に日本代表として出席, 同 4 年 7 月帰朝, 同年 9 月鳥取県実業補習学校教員養成所講師を嘱託, 同 6 年 7 月中華民国へ出張, 同 13 年 8 月朝鮮総督府技師, 農林局農産課勤務, 同年 10 月朝鮮総督府専売局技師を兼任, 同 14 年 1 月朝鮮農会技師を嘱託, 同 18 年 12 月朝鮮総督府専売局技師を免職, 同 20 年 6 月免本官, 同年 11 月博多に引揚, 同 21 年 3 月秋田県由利郡石沢村農会会長に就任, 同 22 年 4 月同解任, 同年 11 月秋田県立本荘中学校外国語 (英語), 理科 (生物) 教諭を嘱託, 同 23 年同校退職, 同年 10 月秋田軍政部顧問, 同 24 年同所退職, 同年 8 月秋田県立本荘高等学校定時制課程講師, 同 26 年 3 月同校退職, 同年 4 月兵庫県農業短期大学教授, 同年 8 月同大学学生課長, 同 27 年同校学生課長を解任, 同 31 年 3 月兵庫農科大学短期大学部教授, 同 32 年 4 月兵庫農科大学講師, 兵庫農科大学附属加古川農場勤務.

昭和 33 年 1 月 11 日歿 享年 64 才。

② 鳥取県東郷湖におけるイトメ群游期に就て, 動物学雑誌 39 (461) : 153 (1927).

③ 経歴資料は兵庫農科大学奥谷禎一博士の提供による。

今村重元 (1904~1936)

① 明治 37 年 2 月 11 日東京にて重教 4 男として生る。本郷駒込小学校, 府立第一中学, 第一高等学校卒, 昭和 5 年東京帝国大学農学科卒, 動物学教室で研究, 昭和 5~7 年応用動物学会編集幹事, 昭和 7 年蚕業試験場に入場, 蚕桑病虫害防除の研究, 線虫の研究などに従事。

昭和 11 年 5 月 26 日歿 享年 32 才。

② 蠶蛆ノ逸出能力ニ就テ, 日本蚕糸学雑誌 5 (2) : 173, 174 (1934), ヒメマルカツオブシムシの嗅覚並視覚反応について, 蚕糸試験場報告 9 (1) : 1~21 (1935), 蠶蛆蠅の飛翔距離, 動物学雑誌 XLVII 562/563 : 501~502 (1935), 他線虫関係論文多数あり。

③ 吉川徹雄: 今村重元君を追憶す, 応用動物 8 (4) : 235~236 (1936)。

岩川友太郎 (1855~1933) (写真 Pl. 1)

① 安政元年 12 月 8 日 (1855 年 1 月 25 日) 青森県弘前で豊吉長男として生る。はじめ藩校稽古館に学び後東奥義塾で米人ウォルフに語学その他を学ぶ, 同 7 年ウォルフ東京に出でたため通訳として共に上京, 暫く同氏の宅で語学を学ぶ, 同年 4 月外国語学校入学, 同 8 年大学予備門入学, 同 11 年南校に入学, 同 14 年東京大学理科大学生物学科卒, 同年高等師範学校教授, 同 23 年 4 月東京女子師範学校教授および帝室博物館学芸委員を兼務, 同 31 年 4 月東京女子高等師範学校専任教授, 大正 14 年 3 月退官, 同校名誉教授。

昭和 8 年 5 月 2 日歿 享年 78 才。

② 明治 12~13 年頃当時来朝中の G. Lewis に昆虫学の指導を受け, 蝶, 甲虫に興味を持ち, 後 E. S. Morse に動物学を学び貝類に興味をいただく。

日本産鞘翅類 (1~3), 動物学雑誌 1 (10) : 320~325, (11) : 361~364, (14) : 496~ (1889), 帝国博物館天産部動物標本目録 (1891), チャタテムシに就て, 動物学雑誌 4 (47) : 341~345 (1892), 日本産天牛科 (1~4), 同上 12 (141) : 243~246, (143) : 322~324, (144) : 358~368, 21 (145) : 405~407 (1900), その他貝類学等の多数の論著がある。

③ 高橋堅: 岩川友太郎先生追懐録, 動物学雑誌 45 (539) : 398~408 (1933), ——: 昆虫学に関係ある大家の略歴岩川友太郎氏, 昆虫世界 14 (150) : 71~75 (1910), イワカワシジミは氏に献名された台湾・琉球産のシジミチョウである。

岩崎卓爾 (1869~1937)

① 明治 2 年 10 月 17 日 (1869 年 11 月 17 日) 宮城県仙台市小田原町に生る。明治 21 年 3 月宮城県尋常中学校卒, 同 4 月第二高等学校入学, 同 24 年 10 月退学, 同 25 年 10 月札幌測候所入所, 同 30 年 2 月中央気象台へ転任, 同 31 年 9 月 (27 日) 石垣島測候所勤務となり同 10 月 16 日赴任, 同 32 年 4 月大島測候所に転任するも同 10 月再び石垣島測候所長とし帰島し, 昭和 7 年 2 月退官されるまで 35 ケ年間勤務せらる。

1967

KONTYŪ

15

昭和12年5月18日歿 享年67才。

② ヒメクサゼミの鳴声と採集法, 昆虫世界 11(118): 253 (1907), 石垣島における白蟻雑報, 同上 15 (161): 29~31 (1911), コノハテフの羽化の観察, *Zephyrus* 2 (2): 62~63 (1930), 石垣島蝶相, 旅と伝説 7 (82): 41~45 (1934), ヒカゲテフの観察, 昆虫界 2 (10): 440~442 (1934).

③ 故岩崎卓爾追悼: 正木任 (69~71), 大島広 (71~73), 江崎悌三 (73~74), 楚南仁博 (74~76), 梅野明 (77~78), 野村健一 (78~79) の諸氏の追悼記, *Zephyrus* 8(1/2): 69~79 (1938), *Iwasakia iwasakii* Matsumura 他岩崎の名を冠せる昆虫名が多い。

## ウ

ウエ      テン      ジ  
上      恭      治 (1892~1965)

① 明治25年1月17日大分県速見郡八坂村に生る。明治34年八坂尋常小学校卒, 同38年杵築尋常小学校高等科卒, 農業を営みつつ昆虫・鳥類の研究に没頭多くの論文を発表す。昭和25年過労のため半身不随となる。

昭和40年3月7日歿 享年73才。

② 蟬の観察, 大分県博物学会誌 2 (1923), 日本産野虫の新種, 昆虫世界 27 (1): 3~5 (1923), *Vesiculaphis carcis* Fullaway の形態並びに生活史 (1~2), 同上 29 (335): 218~223, 29 (336): 254~260 (1925), アリノタカラ, 同上 32 (367): 77~79 (1928), 鳴く虫雑談, 昆虫界 1 (4): 392~395 (1933), 鳴くカメムシ II, 同上 1 (4): 375~376 (1933), 苦蕒の種子に寄生するキクビマメゾウに就きて, 同上 2 (11): (1934), カシワタムシ *Thorachaphis kashifolia* Uye に就きて, 同上 3 (3): 167~171 (1939), 九州産木蝨の研究 (I~IV), 同上 4(23): 8~14, (34): 849~852, 5 (35): 33~38, 5 (43): 605~608 (1936~1937), ナシアブラムシの研究, 同上 5 (41): 452~460 (1937), An entomological survey of the Yasaka river, 関西昆虫学会報 8: (1939), 豊国昆虫記 (単行書, 1944), 昆虫今昔物語, 八坂川の水棲昆虫他 (1~5), 新昆虫 10 (11): 32~33, 10 (12): 14 (1957), 11 (1): 28 (1958), 11 (2): 41~42 (1958).

③ 大分県農林技術センター植物防疫部中島三夫技師提供資料による。

上原 孫市 (1854~1907)

① 安政元年5月13日 (1854年6月8日) 栃木県都賀郡野木村に生る。明治23年頃より蝶の採集家として主に外国人の依頼に応じ全国を採集に歩く。

明治40年9月20日歿 享年53才。

② 明治23~24年は米国人銀行家 J・サムソンの依頼により横浜・相模大山附近の蝶を採集, 明治25年頃より晩年まで Wileman, A. E. (1860~1929) の専属採集家となり彼の研究を助け信任厚かりしという, 神戸に住す。歿後遺品は名和昆虫研究所に寄贈された。

③ 昆虫採集家の訃とその遺品寄贈, 昆虫世界 11 (123): 525 (1907)。

内山 <sup>シゲ</sup> 繁太郎 (1885~1967)

① 明治 18 年 11 月 18 日札幌に生る。明治 37 年 3 月札幌農学校農芸科卒，同年 7 月北海道農事試験場病理昆虫部に勤務，助手，事業手，後に技手となる。同 40 年 10 月山形県立荘内農学校教諭心得，同 43 年 1 月北海道庁農業技手（病害虫の指導に従事），大正 8 年 4 月退職，大正 8 年 4 月北海道空知外三郡農会技師，庁立空知農業学校教師嘱託を兼務（病害虫の講義を担当），同 11 年 5 月南洋庁産業試験場技手（病害虫に関する試験事務担当），庶務部主任を兼任，後ポナペ分場長，サイパン支庁兼務，昭和 11 年 5 月南洋庁産業試験場技師，同年 6 月南洋拓殖興業株式会社技師，栽培部長（ポナペ島でデリスの栽培を担当），同 19 年 1 月退職，同 20 年 11 月南洋ポナペ島より帰国，同 21 年 6 月より同 23 年 6 月まで北海道立農業講習所講師。

昭和 42 年 2 月 25 日脳内出血にて歿 享年 81 才。

② 北海道農事試験場初代の昆虫試験研究者，リンゴハバチ *Hylotoma mali* の生態，北海道農業試験場報告 2 (1906) その他の報文がある。

③ 南洋の蝶・甲虫に氏の名 (*uchiyamai*) を負うものが数種ある。本資料は桑山覚博士の提供による。

梅村 <sup>ジン</sup> 甚太郎 (1862~1946)

① 文久 2 年 11 月 3 日 (1862 年 12 月 23 日) 志摩国鳥羽で甚太夫長男として生る。明治 3 年鳥羽藩校尚志館に学び，同 14 年三重県尋常師範学校卒，同年 9 月四日市小学校に奉職，同 16 年退職，同 17~18 年伊勢松坂で私塾を開く，同 22~23 年頃福島中学校教諭，同 24 年中等学校植物科検定試験合格，後動物科も合格，同 34 年愛知県第一師範学校教諭，同志と共に名古屋博物学会を創設幹事長となる，その後岡崎中学校，松山中学校，静岡師範学校に勤務後，名古屋にもどり愛知師範学校，尾張中学校，淑徳女学校，愛知国学院教諭，講師を歴任す。任他楼と号す。

昭和 21 年 3 月 21 日歿 享年 83 才。

② はじめ伊勢の西村広休 (1816~1889) に後丹波修治 (1828~1908) に本草を学ぶ。那須原の甲翅類，動物学雑誌 (12) : 61 (1888)，昆虫植物採集指南 (進振堂，1889)，明治 22 年 3 月ヨリ同 8 月ニ至ル迄福島ニテ採集セン蝶類，動物学雑誌 1(12) : 430~432 (1889)，明治 23 年 3 月 福島地方ニ於テ採集セン蝶類，同上 2(18) : 182~183 (1890)，アサケトンボ，同上 3(35) : 378 (1891)，伊勢のギフテフ，同上 3(28) : 84~85 (1891)，ヒオドシテフの蛹，同上 5(60) : 398 (1893)，志摩のキマダラアゲハ，同上 5(60) : 398~399 (1893)，ジャノメモドキ及びキマダラテフ，同上 5(60) : 399 (1893)，時局本草 (1942)，昆虫本草 (正文館書店，1943)，その他植物誌，薬用動植物に関する多くの論著があり，晩年任他楼誌を自刊す。

③ 牧野富太郎：我等が敬愛せる梅村甚太郎先生の事ども，植物研究雑誌 5(3) : (1928)，土井久作：本草家梅村甚太郎先生と昆虫学，昆虫研究 4(1/2) : 23~24 (1940)，土井久作：梅村甚太郎先生逝く，採集と飼育 8(12) : 223~224 (1946)，吉川芳秋：梅村甚太郎翁と仏法僧鳥，紙魚のむかし語り 181~184 (1958)。



ウメ ヤ ヨシチロウ  
梅 谷 与七郎 (1890~1962)

① 明治23年6月25日周吉長男として福井県坂井郡三国町に生る。県立福井中学校卒，第四高等学校卒，大正5年7月東京帝国大学農科大学農学科卒，同9月蚕業試験場嘱託，同6年5月同上技手，同7年6月同場松本支場勤務，同10年8月技師，同12年11月朝鮮総督府京畿道蚕業取締所長，同13年7月兼水原高等農林学校教授，同14年6月農学博士，昭和4年「家蚕に於ける卵巣移植の実験に依る研究論文」によつて農学賞受賞，同12年7月農林省蚕糸試験場嘱託，同18年2月理学博士，同24年6月蚕糸試験場技官，同33年退職，日本応用動物昆虫学会名誉会員。

昭和37年4月22日歿 享年72才。

② 家蚕ノ内分泌ニ就キテ，朝鮮博物学会講演集 2: 1~14 (1924)，家蚕に於ける卵巣移植及び血液移注実験特に化性の変化に就きて，遺伝学雑誌 3(4): 155~182 (1925)，Studies on the silk glands of the silkworm, Bull. Seric. Exp. Station Chosen, 1: 27~48 (1926)，On the degeneration of the male-copulatory organs of the silkworm, Journ. Coll. Agr. Imp. Univ. Tokyo 9(1): 57~84 (1926) (農博学位論文)，蚕の越年卵より見たる昆虫の卵態越冬現象，蚕糸試験場報告 12(4): 393~480 (1946) (理博学位論文)，無脊椎動物ホルモン論 (裳華房, 1953) このほか1929年より1960年にかけてきわめて多数の論著がある。退官を記念して1959年日本の昆虫生理学者がこぞつて「実験形態学新説」を上梓し博士に捧げた。

③ 深谷昌次：梅谷与七郎博士のことども (付略歴肖像写真)，日本応用動物昆虫学会誌 6(2): 177 (1962)，竹脇潔・針塚正樹・深谷昌次編：実験形態学新説 (養賢堂, 1959) (梅谷博士科学論文目録付)。なお，博士の2男献二博士が昆虫学者としての遺徳をつがれている。

## 工

エ サキ  
江 崎 悌 三 (1899~1957)

① 明治32年7月15日政忠3男として東京に生る (父政忠 (1865~1951) は長野県出身，皇室林野局技師，退官後実業界に入り各種会社監査役，藤田財団および鴻池家の理事を歴任)。明治45年3月東京愛日小学校卒，東京府立第四中学校を経て，大正6年3月大阪府立北野中学校卒，同9年7月第七高等学校造士館卒，同10年8~10月台湾旅行，同11年7~8月樺太旅行，同12年5月東京帝国大学理学部動物学科卒，同年5月九州帝国大学助教授，農学部勤務，同12年12月昆虫学研究のため英・独・米へ留学，同13年仏・伊国を在留国に追加，同15年2月より私費滞在許可を受け，昭和3年9月帰国，同4年蝶類同好会創立に参画“Zephyrus”発行，同5年4月教授，同11月理学博士，同7年7~9月第2回台湾旅行，同8年7月奄美大島旅行，同11年1月南洋群島へ出張，同11年10月九大附属彦山生物学研究所設立に参画，所長となる。同12年10月南洋群島へ出張，同13年~14年中華民国へ出張，同15年8月満洲国へ出張，同16年12月仏領印度支那へ3ヶ月滞留調査，同23年6月 (25年6月まで) 九州大学農学部長，同26年 (29年まで) 日本学術会議会員，

同年(歿年まで)本会会長,同28年6月欧州各国へ出張,同11月帰国,同29年(歿年まで)日本鱗翅学会長,同30年3月九大教養部長,同31年国際昆虫学会議常任委員.

昭和32年12月14日肺臓癌のため歿 享年58才.

② ユリノハナスヒに就いて,昆虫世界 14(151):131~132(1910), Two new species of Pentatomidae from Japan, 昆虫学雑誌(京都) 2(3):125~128(1916), Notes on some species of *Acanthosoma*, Ann. Mus. Nat. Hung. 22:201(1925), The water-striders of the subfamily Halobatinae in the Hungarian Nat. Museum, 同上 23:117~164(1926), A new family of aquatic Heteroptera (China, W. E. と共著), Trans. Ent. Soc. London 1927:279~295(1927), A monograph of the Helotrephidae subfamily Helotrephinae (China, W. E. と共著), Eos 4(2):129~172(1928), Aquatic and semi-aquatic Heteroptera, Insects of Samoa 2(2):67~80(1928), Unrecorded Hemiptera from Japan and Formosa, Annot. Zool. Jap. 13(3):259~269(1931), A new species of Scutellerinae from Japan, Mushi 8(2):105~107(1935), Die Gerroidea Mikroneisiens, Tenthredo 1(3):351~362(1937), 日本の現代昆虫学略史, 昆虫 25(4):151~196(1957), その他極めて多くの報文があり生物学史, 昆虫学史関係の論文も多い. 歿後江崎悌三随筆集(北隆館, 1958)が出版された.

③ 江崎悌三:研究の思い出,植物防疫 11(10):39(1957),同:我が10代を語る,新昆虫 10(3):22~23(1957),同:私の青春時代,遺伝 11(11):47~49(1957),江崎悌三博士記念号,昆虫 27(1):1~95(1959)(Dr. Teiso Esaki 英文略歴と写真付,他は記念論文),上遠章:江崎悌三博士の逝去をいたむ,日本応用動物昆虫学会誌 2(1):64(1958),吉井甫:江崎悌三教授を偲ぶ,九州病虫害研究会報 4:2(1958),大島広:江崎悌三博士を悼む,採集と飼育 20(3):83~85(1958),吉川芳秋:昆虫学の江崎悌三博士,しみの昔語り:60~62(1958),江崎博士追悼号,新昆虫 11(2)(1958)(ありし日の博士(口絵グラフ写真集)安松京三:江崎博士伝(2~4),高島春雄:先生の名を負う動物(4),朝比奈正二郎:江崎先生と日本昆虫学会(5),内田清之助:江崎悌三君を偲んで(5~6),素木得一:江崎博士のある思い出(6~7),内田亨:江崎悌三博士をしのびて(7~8),戸沢信義:江崎君の仇名(8~9),上野益三:江崎博士を悼む(9),野村健一:江崎先生と新昆虫(9~10),福田元次郎:江崎先生の追憶(10~11),平嶋義宏:江崎先生の御葬儀(11),江崎会長追悼号:蝶と蛾 9(1):1~16(1958)(中原和郎:江崎君と私(3~4),竹内吉蔵:江崎さんを偲ぶ(4~5),戸沢信義:江崎氏の青春(6~8),磐瀬太郎:ぐろりあ・ふれしでんてい(8~10),一色周知:江崎教授を偲んで(11),白水隆:江崎悌三先生を偲ぶ(12),緒方正美:会長江崎悌三先生(13~14),林久男:思い出写真集(15~16)),内田亨:動物学者江崎悌三博士を偲ぶ,遺伝 12(2):57(1958),山坂転太(高島春雄):江崎先生と虫聖会,陸水通信 1:5~6(1958),動物分類学会報 17:1~5(大島広他3氏の追悼文,1958),平嶋義宏:江崎悌三博士蒐集展を観て,新昆虫 12(7/8):44~45(1959),高島春雄:江崎先生の御墓,新昆虫 11(6):6(1959),China, W. E.:Obituary Teiso Esaki, Ent. Month. Mag. 94:132(1958),Gressitt, J. L.:Teiso Esaki, 1899~1957, Ann. Ent. Soc. Amer. 51:410~

411 (1958), 内田亨: 昆虫思出の記—江崎梯三君をめぐって—(1~8)' 昆虫と自然 1(6): 9, (7): 22, (8): 9, (9): 20 (1966), 2(1): 29, (2): 2, (3): 19, (4): 8 (1967), 九州大学農学部: 彦山生物学研究所要覧(第3報)(経歴, 肖像, 写真付)(1961). なお同研究所刊行誌に“Esakia”がある.

江 間 定治郎(旧名定次郎, 定二郎)(1867~?)

- ① 慶応3年9月20日(1867年10月17日) 静岡県磐田郡中泉町に生る. 明治25年7月東京帝国大学農科大学農学科第一部卒, 同26年5月東京農学校講師, 同28年4月静岡県韮山尋常中学校教諭, 同30年5月岐阜県農事講習所長兼同所教諭, 同31年5月鹿児島県技師, 兼鹿児島県農学校教諭, 同33年4月鹿児島県農学校長, 同37年5月島根県技師, 同島根県農事試験場技師, 後場長, 同43年5月場長を退職爾後の経歴不明.
- ② 夜盗虫の習性及び予防駆除法, 昆虫雑誌 4: 5~12 (1896), 昆虫世界の発行に就て, 昆虫世界 1(1): 6 (1897), 農作物害虫警報, 同上 4(33): 184~185 (1900), 応用昆虫学教科書(生熊与一郎(別項)と共著)(1904).
- ③ 経歴資料は島根県立農業試験場藤村俊彦技師の提供による.

## オ

大 国 督 ( ~1957)

- ① 北海道に生る(生年月日不明). 明治40年3月東北帝国大学農科大学農芸科卒, 引続き昆虫学教室に助手として勤務, 大正7年10月台湾総督府農事試験場技師, 後台湾総督府技師, 中央研究所及植物検査所兼務, 同15年退職, 台北市静修高等女学校教諭, 教頭となる. 終戦により宮崎市に帰国, 日向学院講師.  
昭和32年8月29日(頃)宮崎市で歿.
- ② 日本産はさみむし目録, 札幌博物学会報 4: 182~189(1911), 台湾産天牛に就て, 台湾博物学会報 9(43): 120~124 (1919), 罌粟の害虫(1~2), 台湾農試出版 139, 142 (1920~21), カララビー(紅頭嶼の蟬の種類), 台湾博物学会報 10(48): 153 (1920), シャム産蝶類に就て, 同上 9(45): 153~156 (1920), 紅頭嶼産蝶類(楚南仁博と共著), 同上 10(50): 185~209 (1920), 罌粟の害虫(3), 中央研究所農業部彙報 19(1924), 貯蔵穀物害虫に関する調査(1~2), 中央研究所農業部報告 9: 1~166 (1924), 同報 34: 1~121 (1928).
- ③ 経歴資料は南川仁博博士の提供による.

大 島 <sup>マサ</sup>正 <sup>ミツ</sup>満 (1884~1965) (写真 Pl. 4)

- ① 明治17年6月21日正健長男として札幌に生る(父正健(1859~1938)は札幌農学校・同志社の教授を経て奈良中学, 甲府中学の校長を勤む). 北海道師範附属小学校尋常科卒, 京都の小学校高等科および奈良中学を経て明治35年3月神奈川県立第一中学校卒, 同38年3月第一高等学校卒, 同41年7月東京帝国大学理科大学動物学科卒, 同年台湾総督府技師, 大正9年5月台湾産淡水魚に関する論文により理学博士の学位を受く. 同13年退職, 東京女子大学講師, 東京大学理学部三崎臨海実験所嘱託, 昭和5年3月東京府立高等学校教授, 同15年パラオ熱帯生物研究所兼務, 同17年府立高校退職, 陸軍および海軍医学校嘱託, 戦

後 GHQ 天然資源局技術顧問，同 33 年淡水性鱒類に関する研究により 農学博士の学位を受く，同 39 年日本動物学会名誉会員。

昭和 40 年 6 月 26 日歿 享年 81 才。

② 白蟻の生殖法に就て，動物学雑誌 19 (230) : 359~362 (1907)，日本内地産白蟻，同 20 (242) : 512~517 (1908)，第 1 回白蟻調査報告書 (台湾総督府土木局，1909)，台湾産白蟻に就て (1~2)，動物学雑誌 22 (260) : 343~346，(261) : 376~382 (1910)，岡山及び愛媛二県に発生せる白蟻，同上 22(262) : 413~416(1910)，第二回白蟻調査報告 (1911)，本邦産白蟻の分布系統に就きて，動物学雑誌 25(302) : 595~600(1912)，カロリン群島産白蟻，台湾博物学会報 6 : 167~170 (1916)，カロリン島産白蟻の 3 新種，日本動物学集報 9 (3) : 195~200 (1913)，第 3 回白蟻調査報告書 (1912)，第 4 回白蟻調査報告書 (1915)，第 5 回白蟻調査報告書 (1915)，第 6 回白蟻調査報告書 (1917)，Termites from Palao Islands, Palao Trop. Biol. Stat. Stud. 2 (3) : 381~389 (1942)，建物の敵しろあり，新昆虫 3 (1) : 17~20 (1950)。その他 1907 年より 1950 年にわたり多くの白蟻論文のほか魚学その他多数の論著がある。

③ 大島正満：私の青春時代，遺伝 10 (10) : 28~31 (1956)，大島正満：白蟻を語る (研究の動機)，新昆虫 3 (1) : 18~20 (1950)。大島家編：魚影—大島正満の遺稿と回想，1~109 (1966)，遺稿自然ははぐくむ (12~14)，記憶をたどりて (14~22)，大島広：大島正満兄と私 (29~32)，駒井卓：大島正満兄の事ども (32~33)，岡田豊日：大島先生の思い出 (59~61)，木場一夫：大島博士と蛇類研究 (65~67)，羽根田弥太：大島正満先生の思い出 (67~69)，末広恭雄：大島正満先生を偲ぶ (魚類学雑誌 13 巻より転載) (69~71)，他 26 氏の追悼集を集録。

大塚 <sup>ヨシナリ</sup> 由成 (1862~1925) (写真 Pl. 2)

① 文久 2 年 1 月 21 日 (1863 年 3 月 2 日) 由之の息として生る，幼名翁輔 (父由之は尾張藩下河原家の家臣，明治 7 年開農義会をおこし開農雑報を発行，また松原新之助 (別項) らと農学私塾混々舎を作る，岐阜公園内に頌徳碑がある)。明治 13 年 6 月駒場農学校卒，同 14 年 8 月岐阜県農学校教諭，同 15 年 10 月退職，11 月福井県農業講習所教諭，兼農業巡回教師，同 17 年退職，同年 8 月栃木県師範学校教諭，同 20 年 2 月栃木県師範学校教諭兼同中学校教諭，同 21 年 11 月福岡県師範学校へ転任，同 22 年 2 月福岡県勸農試験場長兼務，5 月兼務を解き場長に専任，同 22 年 11 月県測候所長兼務，同 26 年 4 月本兼職を免ぜられ，5 月農商務省農事試験場技師，同 6 月熊本支場長，同 31 年沖繩へ出張，37 年鹿児島，沖繩へ出張，同年 7 月米国へ出張，同 38 年 9 月関東州民政署付兼務，38 年日露戦役に出征，39 年 2 月帰国，39 年 2 月民政署兼務を免ぜらる。大正 8 年農学博士，同年 8 月農商務省技師，農務局勤務，同月退官。

大正 14 年 2 月 24 日歿 享年 63 才。

② 稲の螟虫に就て，大日本農会報 170 : 1~(2)，農事新報 86/87 (1895)，昆虫雑誌 3 : 1~8，同 4 : 14~21 (1895~1896)，螟虫駆除法 (有隣堂，1897)，螟虫と浮塵子，病虫雑誌 3 (7) : 3~4 (1911)，その他報文多数がある。

③ 経歴資料は農業技術研究所職歴による。参考：福岡県立農業試験場 80年史（同場編，1959）。

大林 一 夫 (1915~1967)

① 大正4年10月21日岡山市大字野田屋町に生る。昭和3年3月尾道市土堂小学校卒，同8年3月県立尾道中学校卒，同4月台湾旅行，同9年鳥取高等農林学校農学科入学，後退学，同11年11月東京農業大学助手，同13年3月退職，一時菓種会社に入りし後同14年10月米国昆虫局横浜出張所勤務，同15年退所し平山博物館嘱託，5月より台湾紅頭嶼へ採集旅行，8月~11月応召，同16年名和昆虫研究所技師，同17年7月毎日新聞社大垣支局入社，岐阜支局，関支局を経て名古屋中部本社勤務。

昭和42年4月30日歿 享年51才。

② 尾道附近の蝶，関西昆虫学会報 1:102 (1930)，尾道附近の蝶相 (1~2)，博物同好会雑誌（尾道中学校）1(1):3，同(2):37 (1931)，奈良春日山採集記，同上1(3):79 (1931)，尾道附近蝶目録，関西昆虫学会報 2:91~97 (1931)，ムカシトンボに就て，むし6(1):48~(1933)，広島県産天牛科目録，広島昆虫同好会誌 1(2)(1934)，New longicorn-beetles from Japan，関西昆虫学会報 7:11~15 (1937)，日本旧北区のリンゴカミキリ属に就て，同上7:16~28 (1937)，Notes on some Longicorn beetle from Manchuria, North China, Corea and Japan，関西昆虫学会報 8:114 (1939)，その他カミキリムシ，ベニボタルなどにつき多くの報文があるほか，原色昆虫大図鑑 II（北隆館，1963）の天牛科を分担執筆す。

③ 中根猛彦：大林一夫氏の思い出，昆虫と自然 2(6):2~4 (1967)。

岡 島 銀 次 (1875~1955)

① 明治8年4月18日福井県大野藩（家老）七郎の2男として生る。小学校を出て東京英語学校，第二高等学校を経て，明治33年7月東京帝国大学農科大学農学科卒，大学院に入り，続いて陸軍砲兵として軍務に服す，同34年山口県立農学校教諭，蚕業講習所技師，東京高等農学校講師等を歴任し，同42年新設の鹿児島高等農林学校教授，大正3年養蚕学・昆虫学研究のため欧米に留学，同5年帰国，昭和10~11年九州帝国大学教授兼任，同11年停年退職同校名誉教授，東京に転居，同13年から日本大学農学部講師，同27年退職後広島県三原市に転居。

昭和30年1月29日歿 享年79才。

② 野蚕に就て，大日本蚕糸会報 8(144):9~(1904)，キシタバアゲハに就て，動物学雑誌 18(216):272~274 (1906)，Contributions to the study of Japanese Aphididae 1, Bull. Coll. Agr., Tokyo Imp. Univ. 8(1) (1908)，恐るべき甘蔗の一新害虫に就て，農学会報 236:361 (1922)，Descriptim Oligotoma from Japan together with notes on the Family Oligotomidae，同上7(4)(1926)，九州に於ける稲の害虫の種類及び其の分布，鹿児島高農開校25周年記念論文集，537~615 (1934)。

③ 末永一：故岡島銀次先生を憶う，昆虫 23(2):43~44 (1955)，末永一：名誉会員故岡島銀次先生を憶う，応用昆虫 11(1):39~40 (1955)，訃報：新昆虫 8(3):20 (1955)。

## 岡田十蔵 (1874~1936)

- ① 明治7年11月4日山口県佐波郡防府町に生る。明治39年7月東京高等農学校本科卒，同年9月山口県農業試験場技手，大正11年4月技師，病虫係主任となり引続き在職中，昭和11年7月25日歿 享年62才。
- ② 泥負虫，山口農試臨時報告3 (1913)，ナシヒメシンクイに就て，日本園芸雑誌26(7) (1917)，螟虫の防除に関する試験研究成績1. 螟虫赤卵蜂の放飼利用試験，農事改良資料79 (1934)。その他防除に関する報文が多い。
- ③ 上遠章：岡田十蔵氏の逝去を悼む (肖像，口絵，写真)，昆虫10 (6) : 279 (1936)，野津六兵衛：故岡田十蔵君を偲ぶ，日本植物病理学会報4 (3) : 195 (1936)，——：岡田十蔵氏の死を悼む (上遠 (1936) と略同文) 昆虫部々報 (東京農業大学) 4 (2) 17~18 (1937)。本経歴資料の一部は山口県立農業試験場児玉行技師の教示による。

## 岡田忠男 (1871~1920)

- ① 明治4年6月静岡県浜名郡知波田村生。明治27年1月より1ヶ年名和昆虫研究所で昆虫研究に従事。28~33年郷里の小学校および浜名郡養蚕学校に教鞭をとる。明治30年浜名郡昆虫研究会を発会，明治33年5月静岡県立農事試験場創設に当り入場技手に任ぜられ大正4年技師，歿年まで20年間同場で害虫研究に専念す。
- 大正9年4月8日腸チフスで歿 享年49才。
- ② 浮塵子卵の寄生蜂に就て，昆虫世界2 (13) : 323~325 (1898)，稲の害虫クロムクゲムシの防除，同上4 (36) : 286~287 (1900)，静岡県下のルビー蠟虫駆除の顛末，病虫害雑誌5 (9) : 712~717 (1918)，*Icerya okadae* なる貝殻虫に就て，昆虫世界12 (126) : 51~53 (1908)，梨姫果蠹に就て，同上21 (239) : 267~274 (1917)，筍の害虫ハジマクチバに就て，病虫害雑誌6 (1) : 42~46 (1919)，このほか1898年から1921年にかけて各種害虫につき多くの発表がある。
- ③ 訃報：昆虫世界24 (272) : 149，同略歴24 (273) : 183 (1920)，病虫害雑誌7 (6) : 口絵肖像写真および卜蔵梅之丞記略伝を付す (1920)，なお氏の蔵書は歿後静岡農試に納り岡田氏文庫となつている。

## 岡田虎(后)二郎 (1872~1920)

- ① 明治5年愛知県渥美郡田原町生。全国の老農を歴訪し害虫駆除法等を研究，岡田式螟虫採卵法を案出，また浮塵子発生予報を提唱し，明治35年全国昆虫展覧会に際し功労賞を受く，明治34年6月米国に留学教育哲学等を学び同38年春帰国し，身心強健を図るため，岡田式静座法を案出，数万の門下生を得る。
- 大正9年10月14日尿毒症のため歿 享年48才。
- ② 虫害予防の報告，大日本農會報191 : 26 (1897)，岡田式螟虫採卵法を普及また早くより害虫発生予察の必要を説く。
- ③ 訃報：昆虫世界24 (279) : 341 (1920)，伊奈森太郎：螟虫採卵法を発見した岡田先生，愛知県農會報420 : 36~37 (1933)，昆虫世界49巻表紙全号に肖像写真を付す，同表紙の解説49 (568) : 15。

## 岡本 半次郎 (1882~1960) (写真 Pl. 3)

① 明治15年4月22日圭吉長男として広島県福山市に生る。明治34年福山中学校卒, 同40年7月札幌農学校卒, 同年北海道庁技手となり北海道農事試験場勤務, 同42年道庁技師, 大正元年~大正2年東京帝国大学農科大学実科講師を兼務, 同8年9月「日本産草蜻蛉に関する研究」で農学博士, 同9年10月朝鮮総督府勸業模範場技師病理昆虫係主任, 同13年水原高等農林学校教授を兼任, 同年末退官帰郷, 母校福山中学校教諭を経て, 昭和6年広島県立沼南中学校長, 同14年広島県立青年学校教員養成所長, 同17年広島県立広島第一中学校長, 同19年地方事務官に任ぜられ, 御調世羅地方事務所長, 同20年広島県書記官, 翌21年3月退官, 同22年4月公選により沼隈郡千年村長に就任1期を勤めらる。同19年以降は令弟経営の岡本工作機械製作所松永工場顧問, 同29年広島大学教育学部福山分校講師を勤めらる。

昭和35年3月4日喉頭癌で歿 享年79才。

② 北海道における脈翅目, 札幌博物学会報 1(1): 112~117(1906), 本邦嚙虫目の研究 (I~III), 博物之友 7(37): 35~37, 38: 67~69, (39): 99~100 (1907), 本邦産長角蜻蛉科, 動物学雑誌 21(254): 499~508 (1909), 実用害虫駆除法 (札幌朝日商会, 1909), Die Myrmeleoniden Japans, 動物学雑誌 23(272): 356 (1911), Erster Beitrag zur Kenntniss der japanischen Plecopteren, 札幌博物学会々報 4(2)(1912), 北海道害虫篇 (北海道園芸会, 1913), Ueber Chrysopiden-fauna Japans, 東北帝国大学農科大学紀要 4(3)(1914), 苹果果蠹の防除に関する試験及び調査成績, 北海道農試報告 6(1916), The insect fauna of Quelpart Island, 朝鮮勸業模範場報告 1(1924), 朝鮮に於ける稲を害する浮塵子に関する研究, 同上研究報告 12(1924), Some Myrmeleonidae and Ascalaphidae from Corea, Ins. Mats. 1(1): 18~22 (1926), その他1903年から1940年にかけて多数の論文が発表されている。

③ 桑山覚: 岡本半次郎先生, 昆虫 28(2): 148~150 (1960) (肖像写真付)。

小<sup>オ</sup>熊<sup>グマ</sup> 太郎吉 (1874~1938)

① 明治7年6月18日千葉県南相馬郡岡発戸村(現我孫子町)に生る。明治19年12月岡発戸尋常小学校中退, 同27年11月同県千代田村柏小学校雇教員, 同29年10月千葉県尋常師範学校講習科修業後柏小学校に復職, 同12月尋常科准教員免許状を受く, 同30年2月市川尋常小学校に転職, 同31年6月尋常科本科正教員免許状を受く, 同32年3月我孫子尋常小学校訓導, 同12月塚田小学校訓導, 同34年11月兼任校長, 同35年11月松戸町古ヶ崎尋常小学校訓導兼校長, 同35年12月退職, 同36年より我孫子町に博物標本製作業を開業, 傍ら昆虫採集飼育に専念, 同18年8月より病床につき,

昭和18年10月19日歿 享年69才。

② 鳳蝶科6種の飼育, 昆虫界 5(35): 64~68 (1937), クリシギザウムシ出現時期その他, 同上 5(39): 335~338 (1937), 幼虫飼育に就て, 同上 6(54): 633~638 (1938), 蝶や蛾の採集と飼育 (1~3), 採集と飼育 2(6): 225, 2(7): 284~285, 2(8): 307 (1940), サルトリイバラに生活する昆虫, 同上 4(10): 291~292 (1942), オオムラサキの飼育, 同上 4(11)

: 349~350 (1942), その他採集と飼育 5 巻にかけて蝶の飼育記録を発表す.

③ 本経歴資料は我孫子在住の息明氏の提供による.

#### 奥村 多忠 (1887~1923)

① 明治 20 年 5 月 6 日長野県伊那郡竜江村に生る. 明治 43 年 3 月第七高等学校造士館卒, 同 45 年 7 月東京帝国大学理学部動物学科卒, 大学院に進み蜘蛛の研究の傍ら医科大学に籍をおき基礎医学を修む. 大正 5 年北里研究所に入所医用動物学を研究, 同 9 年リグラ状裂頭条虫の生活環を究明し浅川奨学賞を受く.

大正 12 年 5 月 22 日ドクガ類研究中歿, 功績をたたえられ部長に昇進. 享年 36 才.

② 食用となる蜂の子, 動物学雑誌 24 (289): 645~650 (1912), 蜘蛛の糸紡績器及び其の腺に就て, 動物学雑誌 24 (290): 673~686 (1912), 毒蛾の飼育成績に就いて, 日本之医界 12 (30)(1922). なお, 七高時代鹿児島各地で昆虫採集をなしその採品の一部 (半翅類, ハムシ類) は農業技術研究所々蔵, キムラグモ最初の採集者である.

③ 北里研究所 50 年誌 (1966 年同所発行), 平坂恭助: 古日記より, 台湾博物学会報 22 (123): 509~511 (1932) (同級の奥村, 工藤祐舜, 平坂の 3 氏で霧島旅行の際の日記抄, 捕虫網をもつ奥村氏の写真挿入).

#### オジマ 小島 銀吉 (1868~1935)

① 明治元年 7 月 13 日 (1868 年 8 月 30 日) 福井市において喜平長男として生る. 明治 24 年 7 月東京帝国大学農科大学農学科第一部卒, 同 25 年 5 月岐阜県尋常中学校教諭, 同 28 年 3 月同退職, 同 29 年 4 月福島県尋常師範学校教諭, 同 11 月兼福島県蚕業学校教諭, 明治 30 年 4 月茨城県簡易農学校教諭, 同 30 年 11 月宮崎県尋常中学校教諭, 同 31 年 1 月兼宮崎県高等養蚕伝習所技師, 同 32 年 2 月兼宮崎県農事講習所技師, 同 32 年 7 月同退職, 宮崎県技師となり内務部第 4 課長兼農事講習所長, 同 33 年 5 月宮崎県農学校長兼宮崎農事講習所技師, 同 35 年 4 月福井県技師, 福井県農会農事試験場技師兼場長, 38 年 3 月退職, 同 4 月農商務省農事試験場技師九州支場勤務, 大正 5 年 6 月本場勤務, 同 10 年 9 月技師となり退官, 昆虫調査を囑託, 同 6 年本会創立幹事, 昭和 7 年囑託を解く, 同 9 年本会評議員.

昭和 10 年 1 月 26 日歿 享年 67 才.

② 杉の害虫, 動物学雑誌 2 (16): 70~72 (1890), 作物病害篇 (1892, 本邦最初の病理学書), 浮塵子発生期予察法, 鹿児島県立鹿屋農学校校友会報 4: 1~(1908), 果樹病虫害篇 (1913), 益虫保護器, 病虫害雑誌 5(3)(1918), その他多数の報文がある.

③ 岸田久吉: 小島銀吉氏小伝 (口絵, 肖像および年表付), 小島さんとカラスミと蘭の花 (八木誠政), オジマサン (湯浅啓温), 小島さん小話 (新開悟), 小島さんを惜みて (石井梯) 以上, 昆虫 9 (1): 7~18 (1935), 昆虫世界 47 卷 (1943) 全号表紙に肖像写真がある.

#### カズマ 織田 一磨 (1882~1956)

① 明治 15 年東京芝で信徳 4 男として生る (父信徳 (1848~1903) はわが国最初の動物製家<sup>ゾフノリ</sup>で昆虫に関する報文もある, ③の文献参照). 麻布小学校卒, 河村清雄, 金子政二郎に洋画および石版術を学び, 大正 7 年日本創作版画協会創立に参加, 同 13 年出雲松江に版



画研究所を設立，昭和5年洋風版画創設，日本版画協会員，文化学院教授，文展無鑑査。

昭和31年3月8日歿 享年74才。

② 天蛾類と花，昆虫世界 18 (205) : 379~380 (1914)，奥多摩蝶報，虫の世界 1 (4) : 25~26, 1 (5/6) : 9~11, 1 (7/8) : 22~25 (1937)，山形県蔵王山蝶類採集，虫の世界 3 (5/6) : 68~69 (1939)，武蔵野の記録（洗林堂，1944，武蔵野に於ける昆虫採集の追想，武蔵野と昆虫採集，武蔵野蝶類目録を納む pp. 223~265）。

③ 江崎悌三：日本昆虫学史話（3），昆虫 24 (1) : 63~65 (1956)，カイドウヒサシ兄海東 久は Wileman, A. E. (1860~1929) の論文の蝶の生態図を描いた。

織田 富士夫 (1895~1943) (写真 Pl. 4)

① 明治28年5月21日福岡県京都郡行橋町に生る。大正3年3月福岡県立豊津中学校卒，同6年3月鹿児島高等農林学校農学科卒，同8年3月福岡県農業技手，同県病虫害予防督励員，同同県立10年9月福岡県技手，産業部農林課勤務，昭和4年6月福岡県農林技師，農事試験場豊前分場勤務，同17年11月地方技師，福岡県勤務，同農事試験場豊前分場技師を命ぜられる。

昭和18年3月10日脳腫瘍により京都に歿 享年47才。

② 福岡県に於ける主要病虫害の被害に就て，病虫害雑誌 10(1) : 26~33(1923)，螟虫越冬の概況と螟蛾発生趨向，同上 11 (6) : 321~324 (1924)，梨果を害する恐るべき梨牡蠣介殻虫と之が駆除予防法，農業及園芸 5 (10) : 1351~(1930)，実験園芸害虫図譜篇（明文堂，1936），作物病虫害（竹内晴好と共著）（明文堂，1940），蔬菜病虫害（滝本清透と共著）（明文堂，1944），他に応用昆虫学史的な報文として日本に於ける応用昆虫学の趨勢，鹿児島高等農林学校博物同志会々報 4 (13) : 14~26 (1934)，明治時代に於ける我邦応用昆虫学の貴重なる文献に就て（1~2），病虫害雑誌 22 (1) : 33~37, (2) : 116~125 (1935)，日本に於ける稲三化性螟虫の研究（1~2），応用動物学雑誌 7 (2) : 75~87, 7 (5) : 242~261 (1935)，日本に於ける応用昆虫学の業績に就て，応用動物学雑誌 8 (4) : 229~233 (1936) などがある。

③ 経歴資料は福岡県農業試験場吉村清一郎技師の提供による。

尾高朝雄 (1899~1956)

① 明治32年1月次郎の3男として東京に生る。明治44年3月東京高等師範学校附属小学校卒，同中学校卒，大正11年7月東京帝国大学政治学科卒，引続き京都帝国大学文学部卒，大学院を経て京城帝国大学法文学部教授，後東京大学教授，法学博士。

昭和31年5月15日歯の治療のためのペニシリン注射により歿 享年57才。

② 中学時代より蝶の採集家として知られ，弟邦雄 (1908~ )，(東大教授，文博) 末弟尚忠 (1910~1952，作曲家) と共に蝶好きとして知られ，採集品は後に義兄の渡正監 (別項) のものと合同され渡・尾高コレクションとなつた。尚忠に山地蝶の採集（山岳科学講座），山と溪谷 8 : 51~58 (1931) の報文がある。

③ 尾高邦雄：兄朝雄の思い出，文芸春秋 24 (7) : 286~287 (1956)，江崎悌三：尾高朝雄さんと渡正監さんへの追想，新昆虫 9 (10) : 10~12 (1956)，蝶の標本は現在国立科学博物

館に渡・尾高コレクションとして保管されている。

オノノキシン  
小 貫 信太郎 (1869~1910) (写真 Pl. 3)

① 明治2年3月幕臣忠勝の長男として東京四谷坂町に生る。その後静岡に移つたが、明治6年上京近藤塾に学び後攻玉社に学び海軍に志願せしも病弱のため中止、同25年3月第一高等中学校を卒業の学力と同等と認めらる。同27年7月東京帝国大学農科大学農学科卒、同9月農商務省農事試験場技師補を命ぜられ農務局勤務、同28年3月農商務技手、農務局勤務、同29年4月農事試験場技師、同7月九州支場勤務、同31年10月病気のため休職、同32年5月復職、同8月農事試験場昆虫部長。同39年四国巡回中病を得、

明治43年3月2日病歿 享年41才。

② 害虫と植物の関係を論ず、昆虫雑誌 1 : 23~26, 3 : 13~15 (1895), 徳島県に於ける三化螟虫の大発生と其の防除, 大日本農会報 219 : 20~26 (1899), 本邦浮塵子第一集, 農事試験場特別報告 10 (1901), 実用昆虫学 (成美堂, 1903), 昆虫採集製作法 (成美堂, 1903), 梨ジラミ駆除試験, 農商務省農事試験場報告 30 : 86~87 (1904), 秋季に於ける苹果棉虫駆除試験, 同上 88~(1904), 二化螟虫幼虫の發育と湿度, 大日本農会報 274 : 11~(1904), 稲を害する弾尾類, 大日本農会報 282 : 22 (1905), 珍らしき苗代害虫附毛翅目幼虫検索表, 昆虫学雑誌 (東京) 2 (6) : 292~296 (1907), 四国に於ける三化螟虫, 日本昆虫学会報 2 (1) : 4~16 (1908)

③ 桑名伊之吉: 昆虫学に関係ある大家の略歴, 故農学士小貫信太郎氏, 昆虫世界 14 (153) : 196~197 (1910).

小 野 孫三郎 (旧姓中村) (?~1914) (写真 Pl. 1)

① 生年月日, 出生地不明。明治13年7月駒場農学校植物病理科入学, 同14年3月同科廃止に伴い退学, 同6月農務局雇となり, 直ちに6~9月練木喜三 (別項) に従つて同期の松下基之, 鳴門義次 (別項義民の息) と共に北海道蝗害調査に出張防除に従事, 同17年3月農務局御用掛として再び北海道へ蝗害調査に出張, その後農商務省技師, 同27年兵庫県へ転出, 農事試験場創設に関与し, 同28年8月兵庫県立農事試験場長, 同43年8月兵庫県農務課長となり, 大正2年農商務省技師を兼任し輸出検査事務主任となる。

大正3年1月13日病歿。

② 植物の病害及虫害, 大日本農会報 110 : 26~27 (1890), 重要植物害虫要説 (農商務省蔵版, 1891), 虫害駆除講話筆記 (殖産社, 1892), 稲作被害演話筆記 (福島県内務部, 1892), 明治18年ブトウフィロキセラ発生調査の復命書, 農務顛末 5 : 196~208 (1957).

③ 兵庫県農業試験場: 兵庫県農事試験場50年記念誌 (1943), 狩谷精之: 一植物検疫者の思い出 (14), 横浜植防ニュース 138 : 3 (1959).

## カ

カツ マダ カナメ  
勝 又 要 (1896~1945)

① 明治29年5月6日静岡県に生る。明治44年3月静岡県駿東郡佐野農業補習学校卒, 大

正2年4月静岡県農業試験場農業練習生となる。同5年4月同助手，同8年3月農商務省植物検査所雇，検査部勤務，同10年同上助手，同12年退職，同年6月静岡県農業技手，県立農業試験場勤務，同14年1月石川県農産技手，県立農事試験場勤務，同18年7月退職，同18年7月日本綿花協会技師，日本綿花栽培協会比島中央綿作試験場勤務，同20年2月現地飛行場に応召。

昭和20年7月12日比島北ネグロス島マナプラ山脚地にて戦病死 享年49才。

② 二十八星瓢虫に就きて(吉田嘉七と共著)，病虫害雑誌6(1):27~31(1919)，黒椿象に関する調査(1926)，稲黒椿象駆除予防に就いて(1~2)，同上14(6):320，(7):386~(1927)，黒椿象の産卵に就いて(1~2)，昆虫世界32(368):114~124，(369):154~158(1928)，農林省委託黒椿象に関する研究成績，石川県農事試験場(1930)，桃象虫に関する研究成績，石川県農事試験場(1934)，砂潜瓢箪象虫に関する研究，農事改料資料109:133~148(1936)，黄条蚤虫駆除予防に関する研究成績に就て，農友(石川県)8(8):9(1940)，黄条蚤虫に関する研究，石川県農事試験場(1941)。

③ 略歴資料は石川県農業試験場川瀬英爾技師提供。

#### 加藤 静夫(1906~1962)

① 明治39年5月15日山形県米沢市に武夫長男として生る(父武夫(1883~1949)は地質学者，理学博士，東大名誉教授)。大正8年3月福岡県戸畑市明治尋常小学校卒，同13年3月青山学院中学部卒，昭和7年3月北海道帝国大学農学部農業生物学科昆虫学分科卒，同4月農事試験場見習生，同9年6月北海道農事試験場副手，同10年2月北海道庁技手，農事試験場勤務，同11年7月北大農学部講師，同16年7月北大農学部助教授，同12月中華民国国立北京大学理学院副教授，同18年8月教授，同20年11月終戦により退職，同12月中華民国農林部華北農事試験場に留用，病虫害主任，同22年9月留用解除，10月帰国，同22年11月GHQ農業課技術顧問，同23年8月農林技官，農事試験場勤務，同25年4月農業技術研究所病理昆虫部昆虫科長兼昆虫同定分類研究室長，同30年本会評議員，同31年5月病理昆虫部長，同7月第11回国際昆虫学会議出席のためカナダおよび欧米へ出張12月帰国，同32年9月第4回国際作物学会議出席のため西ドイツに出張，9月帰国，同33年1月本会副会長，同35年9月ミカンコミバエ調査のため中華民国およびフィリピンへ出張，同36年1月帰国，同36年1月日本応用動物昆虫学会副会長，同10月農学博士。

昭和37年9月30日心筋梗塞症のため歿 享年56才。

② A new and four unrecorded species of Phaoniinae from Japan, *Ins. Mats.* 11(1/2):24~27(1936)，本邦産 *Polietes* 属2種，昆虫13(1):1~3(1939)，日本及び満洲に於て農作物を害するダイコンバエ属の種類とその特徴，植物及動物7(8):1367~1376，7(9):1529~1538(1939)，ノサシバエに就て，応用昆虫1(4):151~159(1939)，本邦産アカザモグリハナバエと其の近似種，昆虫15(2):55~68(1941)，A taxonomic study on the rice leaf miner *Agromyza oryzae* Munakata，農技研報告C6:26~34(1956)，Taxonomic studies on soy bean leaf and stem mining flies of economic importance in Japan, with descriptions of three new species, 農技研報告C13:175~206(1961)

のほか多数の報文がある。

③ 渡辺千尚：加藤静夫君の追憶，日本応用動物昆虫学会誌 6(4)：299～301(1962)，渡辺千尚：加藤静夫君を追想して，昆虫 30(4)：285～287(1962)，*Xanthochroa katoi* Kono カトウカミキリモドキのほか数種の昆虫に献名されている。

カニ 藤 吉 (1908～1944)

① 明治 41 年 1 月 1 日岡山県勝間田町藤十郎 2 男として生る。昭和 2 年 3 月岡山県立津山中学卒，同 5 年 3 月大阪府立浪速高等学校理乙卒，昭和 8 年 3 月京都帝国大学農学部農林生物学科卒，同年理学部大学院に入り川村教授の指導により溪流の生態学的研究に没頭，同 18 年 10 月太平洋戦争に一兵士として出征，同 19 年 4 月南方に出動。

昭和 19 年 7 月 18 日マリアナ方面で戦死 享年 36 才。

② 晩春の川にて，あきつ 2(4)：189～194(1940)，渓流性昆虫の生態，古川晴男編，昆虫(上)：171～317(研究社，1944)，京都鴨川水系産ブユ科 11 種の蛹，大津臨湖実験所生理生態学研究業績 11(1944)，満洲産泥虫科大蚊科蚋科の幼虫，関東州及満洲国陸水生物調査書(1950)，木曾王滝川昆虫誌(木曾教育会，1952)。

③ 遺稿論文集「木曾王滝川昆虫誌」略歴付。カニエリュスリカ，カニアミカは氏に献名された昆虫である。

カノ 忠 雄 (1906～1945\*) (写真 Pl. 4)

① 明治 39 年 10 月 24 日生(本籍福島県)。大正 12 年 3 月東京開成中学校卒，昭和 4 年 4 月台北高等学校(理甲)卒，同 8 年東京帝国大学理学部地理学科卒，理学博士(台湾シルビア山のカール研究)，台湾総督府理蕃課囑託を経て第二次大戦中フィリピンおよび北ボルネオの地質，生物民俗調査のため陸軍々属(中佐待遇)として派遣せらる。

昭和 20 年 8 月 13 日北ボルネオで行方不明となる。\* 歿年不明。

② 福島県産蝶類目録，昆虫世界 24(278)：358～368(1920)，日本アルプス高山蝶に就て，同上 26(304)：405～408(1922)，朝鮮産斑蝥歩行虫既知種目録，同上 27(305)：377～384(1923)，紅頭嶼産斑蝥及天牛目録並に同島昆虫相に就きての考察，昆虫 3(2)：76～82(1929)，Descriptions of three new species of Curculionidae of the genus *Pa-chyrrhynchus* Germer from the island of Botel Tobago，昆虫 3(4)：217～238(1929)，蝶類の分布より見たる紅頭嶼と隣接地との動物地理学的関係(1～2)，日本生物地理学会々報 2(2)：221～237(1931)，2(3)：249～252(1932)，New and unrecorded longicorn-beetles from Japan and its adjacent territories(1～2)，昆虫 6(5/6)：259～291(1932)，7(3)：130～140(1933)，Second contribution to the knowledge of coleopterous fauna of Kotosho，日本動物学集報 18(1)：29～32(1939)，紅頭嶼(瀬川孝吉と共著)(1940)，山と雲と蕃人と(中央公論社，1941)。

③ 中学時代より採集家として知られ，台北高等学校在学中はあらゆる蕃界に入り込み，極めて多くの昆虫を採集，多数の甲虫を記載す。後に地理学を専攻したが民族学，民俗学，考古学のあらゆる分野で活躍，また，登山家として知られ生物地理学，民族地理学上の業

績も多い。経歴資料は遠戚に当る小西正泰博士による。

川上 滝 彌 (1871~1915)

① 明治4年1月24日(1871年3月15日)山形県飽海郡松嶺町に十郎2男として生る。明治21年鶴岡中学校卒,同33年7月札幌農学校卒(第18回)同年北海道庁嘱託,同34年熊本県立熊本農学校教諭,同36年10月台湾総督府技師,農事試験場勤務,同37年同農事試験場技師,植物病理部長。

大正4年8月12日歿 享年44才。

② 新高山の蝶類, 昆虫世界 11(115):92~94(1907), 李嶼山の蝶, 台湾博物学会報 3:174(1913)。

③ 宮部金吾:故農学士川上滝弥君の略伝, 札幌農学会々報 6(1):70~73(1915), 日野巖:植物病学発達史, 224~225(1949), 伊藤一雄:日本に於ける樹病学発達の展望(1):149(林業試験場研究報告 174(1965))(肖像写真付)。カワカミシロチョウは氏の紅頭嶼における採品を記念して命名されたものである。植物病理学者であるが,台湾の植物にカワカミアジサイ,カワカミガシ,カワカミカズラなど献名されたものがある。

川村 多実二 (1883~1964)

① 明治16年5月4日岡山県津山市で良次郎2男として生る。明治38年3月第三高等学校理科卒,在学中浅井忠に洋画を学ぶ。同41年7月東京帝国大学理科大学動物学科卒,大正元年10月京都帝国大学医科大学助手,同11月講師,同3年9月大津に医科大学附属臨湖実験所を開設,同5年中華民国へ出張,同8年2月助教授,同10月長野県福島町に木曾生物学研究所を開設,同年在外研究員として北米・英・独・伊等に留学,同10年4月帰国,同10年5月教授,同13年2月大津臨湖実験所長,同18年5月停年退職後同大学名誉教授,同24年滋賀県立短期大学初代学長,同保育専門学院長,同32年京都市立美術大学長,同38年5月同大学名誉教授,日本陸水学会名誉会長,同9月京都市名誉市民の称号を受く。同10月脳軟化症を發し療養中,

昭和39年12月16日歿 享年81才。

② 日本昆虫図鑑(水生幼虫篇,北隆館,1932),日本淡水生物学上下2卷(1918),動物生態学(1931),動物地理学(1937),動物群聚研究法(1938),鳥の歌の科学(1947)等の著書のほか陸水学に関する多数の報文がある。

③ 川村多実二:水棲昆虫採集の思い出,新昆虫 5(7):2(1952),上野益三:川村多実二,陸水学雑誌 25:133~136(1966)。なお,兄清一(1881~1946)は理学博士,千葉高等園芸学校教授で菌茸研究の権威であつた,また弟福田邦三は生理学者で東京大学名誉教授,現山梨大学長である。

神 沢 恒 夫 (1889~1954)

① 明治22年4月21日山梨県中巨摩郡竜王村に生る。明治40年3月山梨県立農学校卒,同年県立農事試験場勤務,技手,技師を経て同17年退職,同年甘藷馬鈴薯統制株式会社甲府支所長に就任,同21年退職し,病害虫発生予察事業嘱託として再び山梨県立農業試験場勤

務，同25年病虫害専門技術員として山梨県農業改良課兼農事試験場勤務。

昭和29年6月2日十二指腸狭窄症のため歿 享年65才。

② 稻萎縮病予防法，山梨県農事試験場特別報告(1924)，かんざわはだに就て，蚕糸228：8~10(1927)，スカシバカゲロウ民家を襲う，病虫害雑誌16(3)：5(1929)，山梨県に於けるシナノコナジラミの発生，同上16(1)：56~58(1929)，葡萄フキロキセラの防除と耐虫性砧木の利用に就て，同上19(1)：53~57(1932)，葡萄免疫性砧木の試験並にその利用法，山梨農試(1935)，葡萄の大害虫フィロキセラの防除，新園芸2(3)：口絵(1949)，葡萄に脅威を与えるミドリメクラガメ，同上3(2)：口絵(1950)。

③ 小尾充雄：神沢氏の逝去を悼む(付肖像写真)，応用昆虫10(2)：142~143(1954)，笹本馨：故神沢恒夫氏を想う，植物防疫8(7)：巻頭(1951)，山梨の園芸(昭和29年8・9合併号)(神沢氏追悼号)：1~24巻頭略歴写真，天野久(県知事)，滝好雄(改良課長)，奥山七郎(園芸課長)，他2氏の追悼文ならびに米山勝則：神沢恒夫先生の業績について，p.16~24(1951)。資料は山梨県植物防疫協会小尾充雄氏の提供による。

神田重夫(1898~1961)

① 明治31年11月10日茨城県に生る。茨城県立水海道中学校卒，茨城師範学校卒，茨城県水海道小学校に奉職中動植物学の検定試験に合格，山形県立酒田中学校に転任，大正13年2月神奈川県立横浜第二中学校(現翠嵐高校)に転任，昭和15年4月私立浅野中学校に転任，昭和23年5月横浜市立平楽中学校副校長(6・3制改革による)，昭和25年9月横浜市本郷中学校長，昭和29年9月私立浅野高・中学校教諭。

昭和36年4月6日心筋梗塞のため歿 享年62才。

② 横浜産介殻虫科目録，昆虫世界34(400)：413(1930)，*Kermes kuwanai* n. sp. 附邦産 *Kermes* 属種の検索表，日本動物学彙報13(5)：551~554(1932)，*Eulecanium kuwanai* n. sp.，同上14(4)：405~408(1934)，On the Genus *Heliococcus*，同上15(1)：70~75(1935)，朝鮮産介殻虫考察(1~32)，昆虫世界45(530)：296~298，45(531)：323~330，45(532)：356~361(1941)，山西省の介殻虫，むし：21(4)：33~38(1950)，その他多数の論文を発表す。昭和7年糸賀璋(別項)等と横浜昆虫同好会を結成，機関誌「アゲハ」を発刊し，神奈川県下の昆虫研究と趣味普及に努力した。

③ 本資料は井上寛博士を通じ未亡人より頂く。

## キ

木下周太<sup>シユウ タ</sup>(1884~1955)

① 明治17年11月15日東京牛込に周一長男として生る(父周一(1851~1907)は佐賀藩士で山形県知事，台湾鳳山県知事，台中県知事，埼玉県知事を歴任)。明治37年3月埼玉県浦和中学卒，同44年3月第二高等学校卒，大正4年10月東京帝国大学理科大学動物学科卒，引続き大学院，同6年1月本会(当時，東京昆虫学会)創立に参画，創立幹事，同年11月大学院修業，その間伝染病研究所嘱託，同8年3月農商務省農事試験場害虫調査嘱託，同5月千葉高等園芸学校教授，同11年4月同校退職講師嘱託，同年8月農事試験場技師，

同 13 年 6 月～昭和 2 年 3 月九州帝国大学講師，同 15 年 10 月獣疫調査所技師兼任，昭和 2 年 7 月天敵調査のためフィリッピン，仏印，シヤム，マレー連邦，インド等へ出張，同 4 年応用動物学会創立に参画，同 8 年本会々長，同 13 年日本応用昆虫学会創立委員，評議員，同 15 年 12 月文部省天然資源に関する調査嘱託，同 16 年本会並びに応用動物学会（同 28 年まで）会長，同 17 年 3 月資源科学研究所嘱託，同 18 年～20 年日本応用昆虫学会会長，同 19 年 12 月退官，同 21 年 11 月社団法人農業協会理事長（26 年まで），同 29 年 4 月植物防疫協会理事長，同 30 年本会名誉会員。

昭和 30 年 3 月 26 日歿 享年 70 才。

② 本邦産跳虫科に就て（予報），動物学雑誌 28 (337) : 451～460 (1916)，日本産跳虫類の三新種に就て，同上 28 (338) : 494～498 (1916)，本邦産跳虫類の二新種，同上 29 (340) : 40～46，29 (341) : 73～76 (1917)，朝鮮産吸血性クリコイデスに就きて，同上 30 (354) : 15～20 (1918)，無翅蚤蠅の一新種に就きて，30 (360) : 402～408 (1918)，人虱雑記 (1～4)，同上 30 (361) : 462～463～31 (366) : 129～131 (1918～1919)，ヤギシロトビムシとシロトビムシモドキに就て，昆虫世界 27 (307) : 75～79 (1923)，アオヤンマの幼虫の記載と其の生態（小尾充雄他 1 名と共著），昆虫 3 (3) : 179～183 (1929)，害虫の解説 (1～16)，農業及園芸 3 (8) : 903～906～4 (12) : 1407～1413 (1928～1929)，二化螟虫分布の北限に就きて（八木誠政と共著）日本学術協会報告 6 : 546～548 (1930)，カミキリの穿道 (1～2)，植物及動物 1 (1) : 79～82，(2) : 237～240 (1933)，夜盗虫の全貌とその防除法 (1～4)，農業と病虫 4 (3) : 58～62～4 (6) : 323～329 (1950)，そのほか 1945 年にかけて多数の報文があり，著書として防災科学「虫害」（岩波書店，1936），昆虫生態写真集（西ヶ原刊行会，1933），日本昆虫図鑑粘管目および陸生幼虫篇（北隆館，1932），同粘管目一部（同改訂版，1950）の分担執筆などがある。

③ 木下周太：アッサム茶輸入の思い出，茶業技術研究 7 : 56～59 (1952)，同：昔蜻蛉合戦記，新昆虫 7 (3) : 18～20 (1954)，江崎悌三：木下周太先生，昆虫 23 (3) : 91～96（肖像写真付）(1955)，故木下周太氏記念号，応用昆虫 11 (3) : 79～86 までは追悼記事，その後 132 まで記念論文 (1955)，伊東広雄：名誉会員木下周太先生記念号発刊に際して (79)，鏑木外岐雄：木下周太君の追憶 (80～81)，三坂和英：木下先生と螟虫研究 (81～82)，尾上哲之助：木下先生と農業 (82～83)，石井悌：木下周太氏の思い出 (83)，南川仁博：木下先生によつて印度から導入されたアッサム茶種子のわが国茶業界に与えた功績 (84)，加藤静夫：故木下周太先生著作目録作成に当つて (84～86)，新昆虫 8 (5) : 30～33 (1955)，木下先生記念特集（江崎悌三：あゝ悲しい哉木下先生 (30)，河田党：木下先生の思い出 (30～31)，内田一：木下先生と私 (31～32)，朝比奈正二郎：私と木下先生のこと (32～33)，福田良太郎：木下周太先生を偲びて (33))，田村市太郎：わが旅の人々 (1)，木下周太氏の巻，植物防疫 10 (9) : 395～(1956)，杉繁郎：木下周太先生を偲ぶ，蛾類同志会通信 3 : 11 (1955)，上遠章：木下周太先生を偲ぶ，関東々山病害虫研究会年報 2 : 2 (1955)。

## ク

## 久保 猪之吉 (1874~1939)

① 明治7年12月広島県二本松の常保長男として生る。明治39年9月東京帝国大学医科大学医学科卒，同大学院で修業，同36年九州帝国大学医科大学助教授，耳鼻咽喉学研究のため独逸に留学，同40年帰朝して教授となり医学博士の学位を受く，後附属病院長，九州大学評議員を歴任，大正2年第17回万国医学会で渡英，同13年欧米へ出張，昭和10年停年退職，後東京に転居。

昭和14年11月12日歿 享年65才。

② 耳鼻咽喉学の権威であるが，古くから蝶の蒐集研究家として知られる。医学史学会評議員として医学史に関する報文もある。クボウラミスジシジミ (ダイセンシジミ) の和名は氏に因む。和歌を落合直文に師事し，後俳句に転ず，夫人よりえ (1884~1941) は俳人として令名がある。

③ 大人名事典その他の資料による。

## 黒沢 三樹男 (1903~1967) (写真 Pl. 4)

① 明治36年4月30日生 (本籍横浜市港北区篠原町)。大正14年4月東京帝国大学農学部実科卒，昭和2年5月農林省農事試験場見習生，同7年9月横浜税関嘱託，植物検査事務に従事，同8年11月植物検査官補，同20年2月地方技師に任ぜられ茨城県立農事試験場勤務，同23年農林技官，農林省農薬検査所勤務，同25年農薬検査所生物課長，同27年3月退官，同27年4月日本特殊農薬株式会社入社，同34年2~3月東京農工大学講師，同36年5月農学博士，同40年4月同社農薬研究所生物部長兼農場長，総務課長，同41年同農薬研究所総務部長兼総務課長。

昭和42年4月10日歿 享年63才。

② 総尾目の頭部と口器に就て，昆虫3(2):97~100(1929)，クリバネアザミウマに就て，同上3(4):247~252(1929)，Description of three new Thrips from Japan, 同上5(5/6):230~242(1932)，Description of four new Thrips in Japan, 同上11(3):266~275(1937)，A new species of *Litothrips* from Japan, 台湾博物学会報27(169):219~221(1937)，輸移入植物に発見せる蕪馬類の調査，農林省農事改良資料134:74~(1938)，Thysanoptera of Micronesia, Tenthredo 3(1):45~57(1940)，日本昆虫図鑑(北隆館，1950)および原色日本昆虫大図鑑IIIの総尾目(1965)を担当執筆のほか，1929年から1966年にかけて多数の報告がある。

③ 中田正彦：黒沢さんの逝去を悼む，農薬研究13(3)奥付(肖像写真付)(1967)，経歴資料は農薬検査所および日本特殊農薬株式会社の職歴による。

## 桑名 伊之吉 (1871~1933)

① 明治4年5月17日(1871年7月25日)福岡県築上郡黒土村寿八2男に生る。明治21年ハワイに渡り1ヶ年労役に服し後監督となり資を貯えて米本土に渡り苦学をしつつ中学課程を修め，更にコーネル大学に学び Comstock の指導を得てカイガラムシの分類を研



究, 明治 32 年 5 月同大学卒, 卒業後同大学助手となり大学院で研究中一時研究のため帰国せるも再び渡米し, 同 34 年 9 月 Master of Arts の学位を受く, 同 35 年帰国し英彦山の九州昆虫学研究所へ入所, カイガラムシの研究に従事する, 同 36 年 7 月農商務省農事試験場技手, 同 38 年 8 月小笠原飛蝗調査のため同島へ出張, 同 41 年技師, 同 45 年 6 月小笠原島へ出張, 大正 2 年 4 月農商務技師となり農務局農務課勤務, 同 3 年 2 月植物検査官兼農事試験場技師, 同 7 月植物検査所長, 同 5 年 1~3 月台湾へ出張, 同 9 年 11 月比島・印度・香港等へ出張, 同 12 年 8 月朝鮮へ出張, 同 13 年 12 月横浜税関植物検査課長, 大蔵技師兼農商務技師, 同 15 年農学博士, 昭和 4 年ジャワの太平洋学術会議に本会代表として出席, 昭和 5 年度本会々長, 昭和 7 年 1 月退官引続き農林省農務局嘱託, 昭和 7 年度本会々長.

昭和 8 年 7 月 14 日歿 享年 62 才.

- ② 昆虫採集製作法 (小貫信太郎と共著, 1903), 日本介殻虫図説前後篇 (1911, 1917), 農用昆虫学講義 (1918), 農芸殺虫剤 (1924), 実用害虫駆除予防法 (1925) 等の著書のほか, きわめて多くのカイガラムシ類分類の報告がある (昆虫 7(3):107 の主著目録参照).
- ③ 上遠章: 前会長農学博士桑名伊之吉氏の逝去を悼む, 昆虫 7(3):105~107(1933) (肖像写真および主著論文目録付), 桑名伊之吉博士の永眠を悼む, 昆虫世界 37(433): 巻頭 (1933), 卜蔵梅之丞: 桑名博士の逝去, 病虫害雑誌 20(8): 巻頭 (肖像および略伝) (1933), 平野伊一: 植物検疫諸先輩の略歴, 大阪植物防疫 7(75/76): 95~100 (1959).

桑山 茂 (1882~1912) (写真 Pl. 3)

① 明治 15 年 11 月 4 日愛媛県北宇和郡吉田町で貞常 (1851~1934) の長男として生る. 明治 25 年北海道釧路町に移り, 同 35 年 3 月函館中学校卒, 明治 41 年 7 月東北帝国大学農科大学農学科卒, 同 12 月昆虫学教室副手, 同 42 年 3 月私立北海中学校講師嘱託, 同年同大学実験農場害虫試験調査を嘱託されるも病氣となり,

明治 45 年 2 月 17 日歿 享年 30 才.

- ② Die Psylliden Japans (1~2), 札幌博物学会々報 2(1/2): 149~189 (1908), 同上 3(1): 53~66 (1910).
- ③ 訃報: 昆虫世界 16(175): 124, ——: 昆虫学に関係ある大家の略歴 (12), 桑山茂氏, 昆虫世界 16(176): 158~195 (1912) (肖像写真付), 江崎悌三: 日本昆虫学史話 (4), 昆虫 24(2): 120 (1956). 元北海道農業試験場長桑山寛博士は茂氏の令弟である.

## コ

小泉 <sup>マコト</sup>丹 (1882~1952)

① 明治 15 年 11 月会津藩士忠武長男として兵庫県に生る. 第二高等学校を経て明治 40 年 7 月東京帝国大学理科大学動物学科卒, 伝染病研究所に入所寄生虫学を専攻す, 大正 3 年台湾総督府技師, 台湾帝国大学医学部教授, 同 7 年白蟻に寄生する原虫類の研究で理学博士を受く, 同 8 年 12 月~同 10 年 6 月欧米留学, 後北里研究所副所長を経て大正 13 年 1 月慶応義塾大学医学部講師, 同 7 月同大学教授, 兵役召集を経て昭和 18 年 2 月復職, 同 21 年 4 月医学博士, 同 24 年 4 月兼大学予科医学部主任, 同 26 年 3 月兼務を解かる.

昭和 27 年 10 月 31 日歿 享年 69 才。

② 人体寄生動物学 (1911), 住血原虫に関する疾病の伝播並撲滅, 日新医学 1(4) (1911), 本邦産鼠蚤ノ研究 (1~2) (宮嶋幹之助と共著), 細菌学雑誌 159: 1~46, 162: 286~310 (1909), 白蟻に特殊なる寄生原虫所謂トリコニムフ類に就て, 台湾博物学会報 7: 27 および 113 (1917), The Anophelinae of Formosa, 動物学雑誌 37 (442): 314~377 (1925), On the distribution of *Anopheles* in Formosa, 動物学雑誌 40 (476): 219~228 (1928). 日本昆虫図鑑蚤科分担執筆 (1932).

③ 略歴資料は慶応義塾大学森八郎博士による。

河野 禎 蔵 (旧姓原田) (1818~1871)

① 文化 14 年 12 月 1 日 (1818 年 1 月 7 日) 筑前国糸島郡波多江村原田種彦長男に生る。名は剛 (初め養立) 通称禎蔵。福岡唐人町の河野春竜の家を嗣ぐ, 安政~文久年間 (嘉永 2 年あるいは天保年内とあるものは恐らく誤り) 藩命により長崎に留学, ハンデン (Van den Broek) およびシーボルト (Philipp F. von Siebold) に医学, 農学, 植物学を学び帰国して波多江村に眼科医を開業せしも後廃業, 慶応 3 年二豊三備, 播州作州の各地を踏査し農業を視察して穂生三分の選種法を發明, 明治 3 年京都府検参事に任ぜらる。

明治 4 年 2 月 12 日京都に歿 享年 53 才。

② 「農家備要」およびその後篇「農家花暦」(1870) を著す。農家備要 2 巻中にある稲災害篇はわが国における洋式害虫防除法の嚆矢と称せられ「螟虫」の言葉初めて使用される。

③ 河野禎蔵氏小伝, 大日本農会報 108: 58~59 (1890), 岡田忠雄: 明治初年に於ける病虫害の記載, 病虫害雑誌 5(2): 96~98 (1918), 見波定治: 農界における郷土史の一端, 筑前 2: 67~75 (1921).

河野 廣 道 (1905~1963) (写真 Pl. 4)

① 明治 38 年 1 月 17 日札幌市で常吉 2 男として生る (父常吉 (1862~1930) は長野県人, 明治 27 年渡島し道庁に奉職, 北海道開拓史, 北方民族学, 考古学の研究者として知らる。高山研究者として知られる齡蔵 (1865~1939) の兄)。大正 6 年札幌市中央創成尋常高等小学校卒, 同 10 年道立札幌第二中学校卒, 同 11 年 7 月北樺大学術調査隊に参加, 同 13 年 7・8 月台湾昆虫調査旅行, 昭和 2 年 3 月北海道帝国大学農学部生物学科昆虫学分科卒, 同 5 年 3 月同大学院修業同大学助手, 同 7 年 2 月日本産短吻象鼻虫科の研究で農学博士の学位を受く。同 9 年 5 月農学部授業嘱託, 同 13 年 5 月農学部講師, 同 15 年 5 月樺太庁より森林害虫調査事務嘱託, 同 12 月八紘学院講師, 同 16 年~18 年南樺太調査, 同 16 年 7・8 月北千島調査隊長として同島調査, 同 17 年 12 月北海道新聞社北方研究室長, 同 19 年 6~10 月満洲国大興安嶺総合調査隊に参加, 同年同社論説委員, 5 月同上参事, 同 28 年北海道道政史編集事務嘱託, 同 30 年 1 月北海道学芸大学札幌分校教授, 同 34 年付属図書館長。

昭和 38 年 11 月 12 日歿 享年 53 才。

② Beitrag zur Kenntnis Attelabinen-Fauna Japans, Ins. Mat. 2(1): 34~45 (1927), Die biologischen Gruppen der Rhynchitinen, Atelabinen und Apoderinae, Jour.

Facul. Agr., Hokkaido Imp. Univ. 29 (1) : 1~36 (1930), Die Apoderinen aus dem japanischer Reich. Jour. Facul. Agr., Hokkaido Imp. Univ. 29 (2) : 37~83 (1930), Die japanischen Hylobinen, Journ. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 33 (3) : 223~248 (1934), 本邦に於けるマイマイガの周期的大発生と太陽ヴォルフ黒点数との関係, 植物及動物 6 (8) : 1361~1376 (1938), Die curculiniden, Schädlich an Sachalintannen und Ezofichten, Ins. Mat. 12 (2/3) : 143~146 (1938), 北東亜細亜産虻科の研究 (I~III) (高橋弘と共著), Ins. Mats. 13 (4) : 147~162, 動物学雑誌 51(2) : 759~760, Ins. Mats. 14 (1) : 6~18(1939), 蝶類の幼虫の食性に関する研究 I~II (沢本孝久と共著), 昆虫 12 (4) : 140~145, 13 (2) : 60~62 (1938~1939), トドマツ・エゾマツ類の根に寄生するアブラムシ類に就て, 北海道林業試験場彙報 2 : 65~86 (1942), 日本動物分類 10 (8) no. 1~3, no. 10 (1936~1937), 北方昆虫記 (楡書房, 1955), 雪虫 (プラヤ新書刊行会, 1956) このほか 1925 年から 1958 年にかけて昆虫学の報文きわめて多数あるほか, 考古学, 民族学, 北海道自然史関係およそ 130 篇がある.

③ 渡辺千尚: 河野広道博士の逝去を悼みて, 昆虫 31 (4) : 314~315 (1963), 故河野広道博士小伝 (河野家, 1963) (付著書論文目録 (昆虫学関係を除く)), Okada, H. : Hiromichi Kono, 1905~1963; Arctic Anthropology 2 (2) : 149~154 (1964), 経歴資料は小西正泰博士の提供による.

小竹 浩 (1869~1923)

① 明治元年 12 月岐阜県不破郡中村に生る. 岐阜県農事講習所卒, 明治 21 年来岐阜県下名地小学校訓導, 同 31 年 4 月名和昆虫研究所第 1 回害虫駆除講習会参加, 明治 36 年小学校訓導を退き, 名和昆虫研究所へ入所昆虫研究に従事, 大正 3 年眼病のため同所退職.

大正 12 年 5 月 7 日歿 享年 55 才.

② 害虫駆除予防実見録 1~17, 昆虫世界 9 (89) : 27~30 (1905) ~ 10 (111) : 464~466 (1906), 初等教育に於ける昆虫学 1~16, 昆虫世界, 11 (115) : 100~104 (1907)~12 (132) : 322~325 (1908), その他温古虫談, 皇太子殿下献上標本の解説などを昆虫世界に連載. 1903 年より 1913 年にわたり発表活動をなす.

③ 昆虫世界 27 (310) : 214 訃報 (肖像写真付).

小西<sup>ジン</sup> 甚七 (旧姓渋谷) (1900~1944) (写真 Pl. 4)

① 明治 33 年 10 月 18 日青森県に生る. 大正 7 年 3 月青森県立農学校卒, 同 8 年北海道農事試験場実習生終了, 同年 4 月北海道帝国大学雇, 農学部昆虫学教室勤務, 同 10 年 9 月同上助手, 同 13 年 3 月休職, 英独仏の 3ヶ国に私費留学, 昭和 2 年 3 月帰国, 同年 4 月北海道帝国大学農学部実科講師, 昭和 5 年 8 月「台湾産螟蛾科の分類学的研究」その他で農学博士の学位を受く, 同 5 年 12 月退職, 岐阜高等農林学校講師, 同 6 年 8 月~同 8 年 7 月まで名和昆虫研究所技師長, 同 9 年 4 月岐阜高等農林学校退職, 南洋興発株式会社試験場長としてサイパン島に赴任, 同 11 年秋南洋群島および西部ニューギニアへ調査研究のため出張, 同 12 年夏棉害虫天敵調査のため比島ロスバニオス大学および南方諸地域へ出張, 同 14 年南洋興発株式会社製糖所長.

昭和19年2月セレベス島マカッサル事務所長として転任の途次乗船撃沈されしため、ロタ島沖で夫人と共に歿 享年43才。

② 日本本土産太螟蛾亜科, 台湾博物学会報 17: 339~358 (1927), Descriptions of two new species Phycitinae from Japan, Ins. Mats. 2 (1): 23~25 (1927), Some new and unrecorded species of Pyralidae from Corea, Ins. Mats. 2 (2): 87~102 (1927), Descriptions of one new genus and one new species, with four unrecorded species of Phycitinae from Japan, Ins. Mats. 2 (3): 121~124 (1928), The systematic study on the Formosan Pyralinae, 北大農学部紀要 22 (1): 1~300 (1928), The Galleriinae of Japan, Ins. Mats. 4 (1/2): 17~24 (1929), The Endotrichinae of Japan, Ins. Mats. 5 (4): 161~170 (1931), 日本本土産斑螟蛾亜科目録, 昆虫世界 36 (420): 255~258, 同 (421): 295~298 (422): 331~335 (1933), その他多数の報告がある。

③ 安松京三: サトウキビの救い主, 昆虫物語: 103~107 (1960) (フィリッピンよりヒメハラナガツチバチをサイパン島に導入放飼してサトウキビ大害虫マリアナスジコガネ防除に大成功をおさめた小西博士の功績を紹介す)。本経歴資料の前半は北海道農業試験場の桑山覚博士より、後半は刈谷正次郎氏よりの提供による。

コバヤスキ  
木庭康喜 (1888~1946)

① 明治21年7月6日熊本県山鹿市に生る。明治40年3月熊本県球磨農業学校卒, 同41年4月農商務省農事試験場九州支場勤務, 同45年4月台湾新竹庁農会技手, 大正2年5月熊本県鹿本郡大道小学校勤務, 同6年4月球磨郡湯前村産業技手, 同7年5月熊本県立球磨農業学校勤務, 同8年4月熊本県立農事試験場勤務, 同14年9月退職, 同15年4月熊本県鹿本郡農会勤務。

昭和21年3月9日歿 享年57才。

② 蚕豆象虫に関する研究 (1), 熊本農試 (1933), 田植前に於ける稲の病害虫防除研究 4: 7~(1939), 熊本県に於ける作物病害虫発生の変遷 (1~12), 研農 (熊本) 6 (1~9) (1941), 7 (1) (1942)。

③ 熊本農業試験場古山覚技師提供資料による。

小山海太郎 (1870~1953)

① 明治3年4月3日 (1870年5月4日) 長野県小県郡和村生。和村和小学校卒, 明治18年4月和小学校雇教員, その後弥津尋常小学校雇を経て22年4月和尋常小学校に復帰し, 同26年4月同校訓導, 同31年6月同郡第1~第3区害虫視察委員, 小県昆虫研究会を創立, 害虫研究に励む, 同33年3月同校退職し農商務省農事試験場雇を拜命昆虫部勤務, 同12月文部省中等学校教員検定試験に合格, 34年4月同場退職, 長野県野沢中学校教諭となり爾来20数年同校に勤務, 後長野商業学校長, 小諸高等学校長などを歴任す。

昭和28年8月歿 享年83才。

② 長野県下の害虫, 昆虫雑誌 9: 14~16 (1897), 長野県下浮塵子発生状況, 昆虫雑誌 12: 28~(1897), 稲の害虫一覽図 (1898), ジャノメモドキ蝶の産地, 昆虫雑誌 12: 27~

(1897), 昆虫見聞録 1~8, 昆虫世界 2 (15) : 423~426 (1898)~5 (43) : 108~110 (1901), 昆虫標本中摺翅類及蟬の卵採集に就ての注意, 動物学雑誌 13 (155) : 285~287 (1901), 北信地方に於けるギフテフの産地, 昆虫世界 5 (411) : 397 (1931), 昆虫物語 (信濃郷土誌刊行会, 1933) 他多数の報文がある.

③ 農業技術研究所職歴および長野県和村誌 (p. 372).

コレイシ マカシ  
是石 肇 (1906~1965)

① 明治 39 年 7 月 17 日福岡県築上郡友枝村に生る. 昭和 3 年 3 月台湾総督府北高等農林学校農学科卒, 同月台湾総督府特殊課雇, 同 5 年 10 月台湾総督府植物検査所技手, 同 17 年 6 月総督府技師, 海南警備府附, 同 8 月経済局植物検査所長, 同 9 月経済局第 1 課兼務, 同 18 年 2 月産業試験場兼務, 同 21 年 6 月退官, 同 10 月熊本県農事試験場病虫害発生予察事務嘱託, 同 24 年 6 月嘱託を解き熊本県技術吏員, 農事試験場勤務, 同 25 年 10 月農業講習所講師兼任, 同 29 年 8 月経済部植物防疫室兼務, 同 31 年 3 月熊本県農業試験場環境部主任, 同 35 年 7 月退職, 同 8 月日産化学工業株式会社福岡支店勤務, 同 40 年 12 月退社.

昭和 40 年 12 月 25 日歿 享年 59 才.

② 熊本県に於ける夏ウンカ及秋ウンカの発生予察法, 九州農業研究 10 : 163~(1952), 熊本県に於ける気象並に害虫の発生相より見た水稻豊凶の考察, 同上 12 : 12~(1953), 最近のツマグロヨコバイの発生とその対策, 植物防疫 8 (9) : 387~390 (1954), セジロウンカ及トビロウンカの越冬並びに第 1 次発生源に関する調査, 病虫害発生予察資料 56 : 188~192 (1956), その他 1937 年より 1958 年にかけて多数の報文がある.

③ 経歴資料は熊本県農業試験場古山覚技師の提供による.

旧姓 廿

齋藤孝蔵 (1904~1961)

① 明治 37 年 1 月 25 日秋田市に生る. 大正 10 年 3 月秋田県立秋田中学校卒, 同 13 年 3 月盛岡高等農林学校林学科卒, 同 4 月朝鮮総督府水原高等農林学校助教授, 同 15 年 8 月「昆虫に依る樹相の変化に関する研究」で農学博士の学位を受く, 同年 9 月教授, 同 19 年水原農林専門学校と改称, 20 年 5 月在満公立専門学校教授, 兼公主嶺農林専門学校教授, 同 21 年 10 月帰国, 同 22 年 1 月山形県立農林専門学校嘱託, 同 22 年 3 月演習林長兼厚生課長, 同 7 月文部教官に任ぜられ山形農林専門学校教授, 24 年 8 月山形大学農学部講師, 同 25 年 4 月退職, 同月山形大学教授兼演習林長, 同 33 年非常勤講師, 同 34 年 6 月山形大学評議員.

昭和 36 年 5 月 15 日歿 享年 57 才.

② 朝鮮における主要森林害虫, 水原高等農林学術報告 4 : 1~81 (1931), 樹木昆虫学の提唱, 動物学雑誌 47 (558) : 236~237 (1935), 朝鮮における松蛄蠹の生態的研究, 林学会雑誌 13 (12) : 808~(1931), 朝鮮産天牛の種類と分布, 動物学雑誌 47 (557) : 206~209 (1935), 昆虫に依る樹相の変化に関する研究, 水原高農学術報告 6 : 1~272 (1941), 山形県に於ける松喰虫の樹木昆虫学的研究, 山形農林専門学校報告 3 (1950), 樹木生理 (朝倉

書店, 1954), 森林昆虫学 (朝倉書店, 1957) その他 1929 年より 1960 年にかけて多くの論文を発表す。

③ 山形大学農学部造林学研究室編: 故齋藤孝蔵博士業績抄録: 1~30 (1965) 内容は肖像写真・追悼文 (植木秀幹: 齋藤博士のおもいで) 著書, 論文目録, 略歴その他。

酒井久馬 (1896~1948)

① 明治 29 年 5 月 9 日 愛媛県北宇和郡三島村に生る。大正 4 年 3 月 愛媛県立宇和農学校卒, 同 7 年 7 月 愛媛県北宇和郡農会技手, 同 14 年 3 月 同上退職, 昭和 4 年 3 月 鹿児島高等農林学校農業別科卒, 同年 4 月 農林省農事試験場に雇として入場, 同 5 年 12 月 大分県農林技手農事試験場へ転出, 同 8 年 7 月 北宇和郡三島村農会技手, 同年 8 月 退職, 同年 9 月 愛媛県農業調査書記, 同 9 年 3 月 陸軍少尉, 同年 5 月 鹿児島県農林技手農事試験場勤務。

昭和 23 年 3 月 4 日 歿 享年 51 才。

② 大分地方産浮塵子類の天敵の種類と之等天敵の時期に依る消長に就いて, 応用動物学雑誌 4 (3): 124~127 (1932), 稲を害する浮塵子の駆除剤に関する研究, 鹿児島高等農林学校開校記念論文集: 617~629 (1934), 甘蔗小翅椿象の一斉駆除について, 昆虫世界 39 (452): 152~153 (1935), イナズマヨコバヒの越冬に関する考察, 昆虫世界 37 (436): 409~413 (1938), 鹿児島県に於ける三化螟虫駆除の概要, 応用昆虫 1 (2): 77~79 (1938), 鹿児島県に於けるナカジロシタバの発生とする予防対策, 応用昆虫 1 (5): 222~225 (1939), 本邦に於けるアカマルカヒガラムシと其の近似種との比較, 応用昆虫 2 (2): 45~62 (1939), そのほか 1928 年より 1951 年まで極めて多くの研究を発表している。

③ 御子息福岡県農業改良課酒井久夫技師の提供資料による。

坂口<sup>ソウ</sup>総一郎 (1887~1965)

① 明治 20 年 1 月 和歌山県に生る。明治 41 年 和歌山師範学校本科第 1 部卒, 海草郡安原小学校訓導, 中等学校植物科検定合格, 大正 2 年 和歌山県実科高等女学校教諭, 中等学校動物科生理衛生科検定試験合格, 同 7 年 12 月 海草中学校教諭, 同 9 年 11 月 沖縄県立第一中学校教諭, 同 14 年 12 月 和歌山県師範学校教諭, 昭和 14 年 12 月 退職, 京都帝国大学嘱託として臨海実験所勤務等を経て同 29 年 大浦市の自宅に坂口自然科学研究所を設立。

昭和 40 年 1 月 4 日 歿 享年 78 才。

② 沖縄県の甘蔗にタイワンコバネガイタの大発生, 昆虫世界 26 (303): 394 (1922), 沖縄本島に於ける蝶類, 同上 26 (300): 258~260 (1922), 再び沖縄本島に於ける蝶類に就て, 同上 27 (314): 338~340 (1923), 琉球産蝶類目録 (1927, 自刊?), 和歌山県産昆虫目録 (池田義雄と共著, 1962). 沖縄生物教育研究会: 沖縄動物目録 (昆虫を分担執筆) (1959).

③ 経歴資料は植村利夫博士の御教示による。

向<sup>サキ</sup>坂<sup>サカ</sup>幾三郎 (?~1928)

① 滋賀県の人, 明治 27 年 7 月 東京帝国大学農科大学農学科卒, 同 30 年 10 月~同 33 年 5 月 福岡県勸業試験場々長 (8 代目), 同 33 年 5 月~同 38 年 2 月 長崎県農業試験場々長, 同 39 年 9 月~大正 12 年 3 月 朝鮮総督府勸業模範場技師, 種芸係主任。

昭和3年8月13日歿。

② 螟虫及夜盗虫の卵寄生蜂に対する保護器, 大日本農会々報 199: 12~ (1898), ウリバイ並に稲椿象に対する除虫菊の効果, 大日本農会報 215: 11~14 (1899), コバネウンカの雄, 大日本農会報 229(1900), イネノクロカメムシに就て, 大日本農会々報 240: 140~141(1901), クモカメムシに就いて, 大日本農会々報 289: 19~21(1905), 害虫に関する調査, 勸業模範場報告 2(1908), 同3号(1909), 4号(1911), 5号(1911), 6号(1912), 7号(1913), 8号(1914), 9号(1915), 10号(1916), 同研究報告(1919).

③ 足立丈太郎: 嗚呼向坂幾三郎君, 朝鮮農会報 2(9): 74~76(1928), 八田吉平: 故向坂幾三郎氏を悼む, 朝鮮農会報 2(10): 72~77(1928), 福岡県立農業試験場 80年史(同場編, 1959).

佐々木 忠次郎(旧名忠二郎)(1857~1938)

① 安政4年8月10日(1857年9月27日)越前福井神明前神楽町で長淳(別項)長男として生る。慶応元年儒者山本平太郎の門に入り漢籍を学ぶ, 明治2年旧藩校明新館中学部に入学, 同6月旧藩主より語学伝習生申付らる, 同7年9月開成学校入学, 同14年7月東京大学理学部生物学科卒, 同9月農商務省農務局雇, 農学校詰, 10月東京大学雇, 理学部準助教, 同15年1月東京大学予備門教員兼務, 同6月駒場農学校助教, 同19年7月東京農林学校教授, 同10月兼第一高等中学校教諭, 同22年5月養蚕および水産研究のため欧米へ差遣, 同8月理学博士, 同10月帰朝, 同32年10月忠二郎を忠次郎に改名, 同39年6月学術取調べのため台湾へ出張, 同40年6月柞蚕調査のため清国へ出張, 同41年3月テグス蚕調査のため清国へ出張, 同43年5月欧米各国へ出張, 同44年7月帰京, 大正10年3月退官, 同11年1月東京帝国大学名誉教授, 昭和2年東京農業大学名誉教授。

昭和13年5月26日歿 享年80才。

② 蚕の蛆(丸善商社, 1885), 動物通解(上下)(岩川友太郎と共著)(1885), 農業書虫一斑, 駒場農学叢誌 1(1885), 稲の螟虫駆除法(1885), 微粒子病論(1886), 農作物害虫篇(成美堂, 1899), 日本樹木害虫篇(上)(1900), (中, 下)(1901)(成美堂), 虫類發育表(博文館, 1902), 昆虫分類法(敬業社, 1902), 柞蚕の飼育(1903), 樟樹害虫調査(1~2)(大蔵省主税局, 1905), 台湾樟樹害虫調査報告(台湾総督府, 1907), 園芸害虫篇(東京園芸株式会社, 1910), 昆虫検索法(成美堂, 1912), 蔬菜害虫篇(大倉書店, 1918), 作物害虫篇(大倉書店, 1919), 果樹害虫篇(1921), 花卉害虫篇(1924), 日本昆虫学の発達, 昆虫 1(1): 1~6(1926), 桑の心止癭蠅の研究(興学社, 1931), 日本の根付(1936)その他昆虫学, 養蚕学に関し 1884年から 1938年にかけてきめて多くの報文がある。

③ 佐々木忠次郎博士伝記編纂会: 佐々木忠次郎博士(1~377, 1940), 石森直人: 佐々木忠次郎博士を憶ふ, 昆虫 12(4): 115~120(1938), 佐々木忠次郎博士記念号, 動物学雑誌 51(7): 381~392, 高橋奨: 病害虫雑誌 8(3): 9(1921), ——昆虫学に関係ある大家の略歴 佐々木忠次郎博士, 昆虫世界 15(171): 468~471(1911), 鎬木外岐雄: 佐々木忠次郎博士, 科学 8(9): 384(1938), 同: 故佐々木忠次郎先生を語る, 紫友会誌 4: 12~17(1938)。

佐々木 長 淳(1830~1916)(写真 Pl. 1)

① 天保元年9月3日(1830年10月19日)越前国福井神明前で長恭長男として生る。嘉永6年7月武術修業のため出府, 安政4年1月御製造方大砲, 小銃, 火薬, 船舶頭取役, 同8月長男忠二郎誕生, 文久2年3月郡奉行, 元治元年製造局頭取役, 同4月製造奉行, 慶応3年3月軍用品購入のため米国へ出張, 同12月帰福, 明治4年東京へ転居, 工務省勸工寮出仕, 同6年1月オーストリア, イタリア, フランス, スイスへ養蚕, 製糸, 紡績の学術調査研究のため出張, 同12月帰朝, 同9年5月イタリアおよび米国博覧会へ出張, 同11月帰国, 内務省勸業寮農務課養蚕掛兼新町紡績所長, 同10年1月内務省書記官, 勸業局事務取扱, 同3月勸業局試験場長兼養蚕試験掛兼新町屑糸紡績所長, 同11年7月神奈川県下蝗害調査のため石渡正敏(石渡繁胤(別項)の父, 勸業局属)らと出張, 同12年5月宮内省書記官, 四谷勸農試験掛兼植物御苑掛, 同13年1月青山御所養蚕御用掛, 同6月大蔵省御用掛兼務, 同15年11月大蔵省兼務を辞す, 同19年より同28年まで各県へ出張養蚕に関する巡回講演を行なう, 同37年12月隠退長男忠次郎家督を相続す。

大正5年1月25日歿 享年85才。

② 明治7年内藤新宿試験場養蚕掛として科学的養蚕を実行, 絹糸紡績所設立の建議(容れられ群馬県藤岡町に設けられた紡績所所長となり歐式製糸の端をひらく), 蚕事摘要(1885), 新發明蛆害防禦法, 蚕1:18~20(1888), 蚕の夢(1893), 蚕児ノ眼ニ就テ, 大日本蚕業雑誌17:1~3(1894), 湿度ト養蚕トノ関係, 蚕業新報10(116):69(1902), 嚙蛆蠅ノ食物ニ就テ, 蚕業新報10(105):5~6(1902), 微粒子病蚕之顛末(1907), 神奈川県虫害調査復命書, 農務顛末5:129~132(1959)および明治前期勸農事蹟輯録(上):906~909(1939)。

③ 故佐々木長淳翁, 蚕業新報24(275):巻頭肖像写真および略伝, 佐々木長淳先生功德碑, 蚕業新報35(413):1402(大正13年群馬県藤岡町順気社構内に建設さる), 佐々木忠次郎博士伝記編纂会, 佐々木忠次郎博士, 佐々木長淳翁略年譜(336~341), 同年譜補記(342~351), 著述目録(351~352)(1940)。

佐竹正一(1885~1938)

① 明治19年1月27日岐阜県大垣市で正章(東京の人, 鉄道技師)長男として生る。明治36年3月府立第一中学校卒, 同40年3月第六高等学校卒, 同45年7月東京帝国大学工科大学工学部土木工学科卒, 同7月鉄道庁房総建設事務所入所, 大正9年鉄道技師, 東京建設局工事課勤務, 同13年7月ドイツへ留学, 昭和2年3月帰国, 同7月山口建設事務所長, 同4年7月盛岡建設事務所長, 同5年10月岐阜建設事務所長, 同10年7月東京建設事務所長, 11年7月病気のため休職。

昭和13年7月24日心臓弁膜症で歿 享年53才。

② 浅間産蝶類の一部, 博物之友4(21):82~84(1904), 但馬丹波紀行付丹波大江山採集記, 博物之友6(34):244~248(1906), 岡山産虫報(鈴木一郎と共著), 博物之友7(40):151~152(1907), 日本産蝶類雑記, 昆虫学雑誌(京都)2(1):48(1916), 本邦産蝶類の2異常型, 名和靖還暦記念論文集:141~142(1917)。

③ 内田一・新村太朗:蝶類研究家としての故佐竹正一氏, 自然科学と博物館12(143):



264~266(1941), 江崎悌三: 佐竹正一氏, *Zephyrus* 9(4): 297~298(1947), 佐竹一郎・佐武正雄: 父を追懐して, 同上 298~300, 内田清之助: 正木逆風に倒る, 同上 300~303, 蒐集の蝶標本は国立科学博物館に佐竹コレクションとして収蔵されている(高野鷹蔵の②項参照).

#### 佐藤 栄 (1880~1928)

① 明治13年5月5日新潟県岩船郡神納村に生る。研動と号す。宮城農学校卒, 明治31年昆虫館を自宅に建設, 昆虫研究に熱中す, 明治36年~37年に名和昆虫研究所の永沢小兵衛(別項)を台湾および中国に派遣し昆虫採集をなさしむ, 明治40年11月神納村農会主催, 害虫駆除講習会を開催, 名和靖を招聘, 同村農会長として活躍す, 後年昆虫標本を私蔵するのを惜み村上中学校および東京某所(不明)に寄贈す。

昭和3年5月13日歿 享年48才。

② 新潟県岩船郡神納村産の虫報, *昆虫世界* 8(78): 78~79(1904), ギフテフを採集す, *昆虫世界* 8(82): 253(1904).

③ 小川全一: 越後昆虫学会の先覚者佐藤栄先生について, *越佐昆虫同好会々報* 2: 33~34(1947), 新潟県下ではじめてヒメハルゼミを採集(谷貞子: 鳴く虫について, *昆虫世界* 9(91): 101(1905)) 神納村害虫駆除講習会景況, *昆虫世界* 12(125): 33~39(1908).

#### 里村 <sup>ヒロシ</sup>浩 (1916~1945)

① 大正5年1月18日大阪に生る。昭和8年3月大阪府立今宮中学卒, 昭和12年3月第六高等学校卒, 同15年3月京都大学農学部農林生物学科卒, 同年4月農林省農事試験場昆虫部助手, 同16年7月支那事変のため応召, 同19年12月召集解除, 農林省農事試験場に帰任, 同20年2月技手。

昭和20年3月4日爆撃により歿 享年29才。

② 甘藷の切干害虫(石倉秀次と共著), *応用動物学雑誌* 13: 146~149(1941), キスジノミハムシの幼虫及び蛹の発育並びに死亡率と温度との関係, *応用昆虫* 4(1): 1(1950).

③ 春川忠吉: 里村浩君を偲びて, *応用昆虫* 6(1): 10(1950), 本資料は農研職歴による。

#### 佐野 貞 蔵 (1837~1902)

① 天保8年10月筑後国三潞郡木佐木村生, 幼名国太郎, 初め貞興後貞蔵に改む。久留米藩譽明善堂に学び, 明治6年3月小学校教員となり, 傍ら螟虫を飼育生活史を研究す, 同9年教職を辞し, 同13年同郡第10組螟虫駆除試験主任, 益田素平(別項)らと行なつた研究実験成績を基として稲株掘取駆除を福岡県下4郡219ヶ町村に共同実施せんとしたところ, これを反対する農民が動乱を起し, 所謂筑後稲株騒動となる, 貞蔵は幾多の危険を顧みず, その主張を貫徹した。

明治35年11月11日歿 享年65才。

② 福岡県八女郡三潞郡内に螟虫試験所18ヶ所を設置, 被害経過, 防除の研究を行なわしめし際, その一つの試験地主任として活躍, 稲株掘取りのための特殊な鋏を發明「佐野鋏」と呼ばれた。

③ 故佐野貞蔵彰功碑除幕式：福岡県農会報 192 (1929) (大正 5 年功績表彰会が設置され、木佐木村八丁牟田の県道に功碑が建設された)，福岡県内務部：福岡県に於ける螟虫駆除予防の沿革，病虫駆除予防資料 15 : 17~19 (1926) (同文転載例，病虫害雑誌 14 (2)~14 (5) 他数例あり)，——：螟虫駆除発見者佐野貞蔵氏，病虫害雑誌 2(11) : 23~(1910)，村田藤七：明治年間に於ける螟虫に関する研究及び駆除予防法の変遷，昆虫 9(4) : 181~203(1935)。

沢田 <sup>タカ</sup> <sup>シロ</sup> 高材 (1915~1965)

① 大正 4 年 2 月 21 日大阪市に生る。東京，水戸，釜石を経て小樽市に定住，昭和 14 年 3 月北海道帝国大学農学部農学実科卒，同 16 年 12 月同大学農学部生物学科卒，同 17 年 1 月農林省農事試験場助手，同 19 年 3 月技手を命ぜられ東海支場勤務，同 21 年 4 月農林技官，同 22 年 4 月愛媛県農事試験場技術吏員，同 9 月農林省道後農事改良実験所勤務，同 22 年 11 月同所々長，同 23 年 8 月愛媛県農事試験場嘱託兼務，同 24 年 8 月京都府農事試験場技術吏員，同 25 年病虫害専門技術員試験合格，同 31 年 10 月病虫害課長，同 40 年 4 月京都府専門技術員として農林部農蚕茶業課勤務。

昭和 40 年 8 月 4 日肝硬変で歿 享年 50 才。

② アカスヂチュウレンジハバチの産卵によるバラ新梢の被害 (内田登一と共著)，札幌農林学会報 12 (3) : 21~(1942)，クリのキクイムシ防除，植物防疫 17 (9) : 346~350 (1963)。

③ 寺本稔：沢田高材氏を偲びて，関西病虫害研究会々報 8 : 巻頭肖像写真および略歴 (1965)，益富寿之助：沢田高材学士の死を悼む，地学研究 17(3) : 91~(1966)。

経歴及び追悼文献資料は京都府農試の鈴木久弥技師による。

沢田 <sup>マサ</sup> <sup>トシ</sup> 栄寿 (1892~1962)

① 明治 25 年 11 月 7 日熊本市出水町に生る。大正 2 年 3 月熊本県立熊本農学校本科卒，同 3 年 1 月農商務省農事試験場九州支場へ見習生として入場，同 5 年 11 月同雇，同 6 年 1 月植物検査所神戸支所勤務，同 9 年 10 月長崎県立農事試験場技手，同 15 年 1 月地方農林技師，同年退職三共農業株式会社営業部長，昭和 19 年 2 月陸軍技師，東京陸軍糧秣本廠教育部勤務，同 20 年までフィリピン，ハルマエラ，セレベスなどに派遣さる。同 21 年 6 月和歌山県田辺港上陸，同 22 年 4 月有明産業株式会社農薬部長，同 24 年 5 月熊本県立農事試験場副手，同年 10 月病虫害専門技術員資格試験合格，同 27 年 2 月熊本県技師，八代地方農業改良普及事務所勤務，同 28 年 5 月県庁農業改良課勤務，同 29 年 8 月同經濟部植物防疫室勤務，同 32 年 5 月退職，同 32 年 5 月富田薬品株式会社入社，同 33 年病気のため退社。

昭和 37 年 4 月 18 日歿 享年 70 才。

② 桑の介殻虫に就て，長崎県農会報 3 (1)(1922)，小麦縞萎縮病予防に就て，病虫害雑誌 14 (8) : 444~449 (1927)，二化螟虫に就て，長崎県農会報 8 (8) (1927)，大根の心喰虫とその防除，長崎農試時報 3 (9) : 6 (1930)，稲縦葉捲に就て，同上 3 (10) : 6 (1930)，大正 10 年~昭和 8 年二化及三化螟虫の発蛾並被害調査成績，同 7 (9) : 2 (1934)，柑橘果実に大害を与へし椿象，同 8 (12) : 12 (1935)，その他 1922 年より 1940 年にかけて報文がある。

③ 経歴資料は熊本県農業試験場古山覚技師の提供による。

## シ

## 芝川 又之助 (1888~1916)

① 明治 21 年 12 月大阪に生る。明治 40 年 3 月府立北野中学校卒，同 44 年 3 月山口高等商業学校卒，同年 9 月京都帝国大学法科大学選科入学，大正 4 年 2 月大日本昆虫学会の創立発起人の 1 人として昆虫学雑誌発行に当る一方実業界で活躍する。

大正 5 年 3 月 27 日腸チフスで歿 享年 27 才。

② ユウマダラエダシヤクの駆除，昆虫世界 16 (179) : 288~289 (1912)，サツマシジミ鹿児島に産す，昆虫学雑誌 (京都) (1) : 40 (1915)，クサカゲロウの嗅気，昆虫学雑誌 2 (1) : 56 (1916)。

③ 訃報：昆虫世界 20 (215) : 219~220 (1916)，芝川家：得々題紫水遺稿集 (2 卷) (1920)，江崎悌三：京都「昆虫学雑誌」発刊当時の秘話 (付肖像写真)，関西昆虫学雑誌 1 (1) : 1~13 (1933) シバカワコガシラアブ，シバカワヒロウドツリアブ，シバカワシリアゲは氏に献名された昆虫である。

## 芝山 直清 (旧名宗太郎) (1855~1914)

① 安政 2 年金沢に生る。名は初め宗太郎，明治 11 年石川県より選ばれ農業研究生として駒場農学校官費生となる。同校植医科廃止に伴い退学，同 14 年農務局雇，御用掛，属官を経て同 26 年西ヶ原蚕事部教師，27 年直清と改名，同 28 年山形県技師兼庄内蚕業学校長，同 30 年第 5 課長，同 32 年蚕業講習所技師，同 35 年石川県技師，同 38 年同県農事試験場兼務，同 39 年同県生絲検査所長，同 41 年愛知県農事講習所技師兼同県農会技師として転出，同 45 年農業技師兼県立蚕種製造所長，大正 2 年退職。

大正 3 年 12 月 15 日東京で歿 享年 59 才。

② 野虫説，大日本農會報告 17 : 51~60 (1882)，麦を害するハリガネムシ駆除法，同上 95 : 60~(1889)，日本蚕業史 (1893)，蚕の種類，日本蚕業雑誌 15 : 21~24 (1889)，桑葉虫の防除法，大日本農會報 144 : 21 (1893)，蜜柑樹を害する野虫駆除法，同上 146 : 38~40 (1893)，稗の害虫同上，156 : 42~43 (1894)，養蚕教授録 (松尾重信と共著) (1900) 明治 15 年練木喜三 (別項) らと北海道蝗害調査に従事。

③ 日本人名事典 (平凡社) などによる。

## 島田 五郎 (旧名 五三郎) (1882~1960)

① 明治 15 年 11 月 24 日生 (本籍長野県上田市)。明治 40 年 3 月札幌農学校農芸科卒，同 44 年 6 月山形県農業試験場技手，大正 7 年 12 月山形県技手，同 11 年 8 月秋田県農事試験場技師，昭和 11 年退官 (?)。

昭和 35 年 1 月 3 日歿 享年 78 才。

② クハノコナカヒガラムシに就て，日本園芸雑誌 35 (3) : (1923)，萃樹綿虫駆除と新薬，病虫害雑誌 11 (2) : 84~93 (1924)，浮塵子注油駆除に関する実験，秋田県農會報 243 : 12, 244 : 21 (1932)，その他果樹害虫に関する報文多数あり。

③ 本資料は秋田県農事試験場渡辺忻悦技師による。

シラ イワ

白岩 秀雄 (旧姓下宿口) (1897~1946)

① 明治30年3月29日鹿児島県始良郡栗野村に生る。大正7年3月鹿児島高等農林学校農学科卒, 同年6月横浜植物検査所雇員となる, 同年11月入営のため退職, 同9年5月除隊翌月再び植物検査所勤務(雇), 同9年9月植物検査官補, 同11年3月陸軍輜重兵少尉, 同14年白岩と改姓, 昭和8年7月函館税関植物検査課長, 同10年9月植物検査官, 大阪税関植物検査課長, 同16年12月大阪税関検疫部植物課長後植物検査課長, 同18年11月大阪海運局植物検査課長, 同19年3月門司海運局植物検査課長, 同20年6月九州海運局動植物課長。

昭和21年10月1日歿 享年49才。

② 鳳梨粉介殼虫に関する調査, 農事改良資料 55:6~7(1933), サイパンコナカイガラムシ(新称)に関する調査, 同上 55:8~9(1933), 日本に於て梨を害する粉介殼虫に就て, 昆虫9(2):63~75(1935), Description of two new Coccids from Japan, 昆虫12(3):106~110(1938), Notes on and descriptions of the Coccids of Southern Saghalién, 昆虫13(2):63~75(1939), 日本昆虫図鑑(カイガラムシ科担当)(1950)。

③ 平野伊一: 同氏略歴(肖像写真付), 大阪植物防疫7(4/3):579(1959)。

シン ジ オリ ヘイ

進士 織平 (1885~1951)

① 明治18年5月16日静岡県小笠郡川城村の人藤七2男として生る。掛川中学校を経て明治35年3月東京明治義会中学校卒, 同37年1月北米に留学, 42年加州サンノゼ高等学校卒, 同45年5月加州大学農科卒, 大正2年同大学院卒, 同6年6月ハミルトンカレッジ文科卒, 同7年ミズリー州立大学院卒(ドクトルオブフィロソフィーの学位を得る), 同7年12月帰国, 同8年宮崎県都城中学校講師, 同13年5月盛岡高等農林学校教授, 昭和5年2月農学博士(アブラムシの染色体の進化の意義), 昭和14年12月東京高等農林学校教授, 同21年3月退職, GHQ 技術顧問。

昭和26年8月25日脳溢血で歿 享年67才。

② アブラムシ分類を専攻し極めて多くの論文があるほかタマバエ, キジラミ等虫癭昆虫の分類も多数発表し次の著書がある。昆虫学講義(上下)(養賢堂, 1926, 1928), 昆虫(目黒書店, 1942), 日本野虫総説(修教社書院, 1941), 昆虫の生活と環境(大日本出版, 1943), 虫癭と虫癭昆虫(春陽堂, 1944)。

③ 石井悌: 進士織平博士の逝去を悼む, 応用昆虫7(3):154~155(1951)。

## ス

鈴木 <sup>モト</sup>元次郎 (?~1942)

① 生年月日不明。京都市外花園村に花園昆虫研究所を設立, 大正4年2月大日本昆虫学会の創会発起人の1人として昆虫学雑誌(京都)の発会に参画す, 同11年(頃)京都市竜安寺境内より門前に居を構え, 生物学標本商を営む, 同12年6月通俗昆虫雑誌を発行, 昭和5年頃明石市に転居し, その後発表活動を中止す。

昭和17年7月20日岐阜県谷汲村で歿。

② 花園昆虫研究所標本目録(自刊, 1915, 同研究所所蔵昆虫 3745種の目録), 日本産尖蛾科の分類, 昆虫学雑誌(京都) 2(2): 67~84, 2(3): 131 (1916), 日本産尖蛾科の1新種, 動物学雑誌 28(334): 317 (1916), モンキテフ黒化の1例, 昆虫学雑誌 2(3): 120 (1916), 日本の鋏形虫, 通俗昆虫雑誌 1(1): 5~16 (1923), ダンダラテフとヒメギフテフ, 関西昆虫学雑誌 2(1): 19~22 (1934), 日本産蟻蜂科目録, 同上 2(1): 23~25 (1934), 天牛図説(1~3), 同上 2(3): 69~78, 3(1): 1~14, 3(2): 37~49 (1935).

③ 箕浦忠愛: 関西むかし話, 新昆虫, 11(7): 2~6 (1958) (箕浦氏によれば鈴木氏ははじめ中京の漆器の蒔絵師で, ある時絵の参考に島津標本店の昆虫標本を見たのが研究の動機となり, 36才とかで虫の仕事をはじめたようになったという。また, 語学なども全く独学で勉強されたという)。歿年は上野益三博士の御教示による。スズキヒメヨコバイ, スズキカミキリ, スズキシヤチホコ, スズキドクガ, スズキナガハナアブなどの多数の昆虫にその名を遺しているが「花園昆虫研究所標本目録」にはなお未記載に終わった多数の *suzukii* の種名をもつ昆虫がある。標本の一部は北海道大学昆虫学教室に多数蔵せられるほか横浜植物防疫所調査課などにも蔵せられ, 松村博士等が未記載に終わった多くの *suzukii* の正体を解く鍵となつている。

住田史郎(1866~?) (写真 Pl. 2)

① 慶応2年6月広島県佐伯郡に生る。蚕種検査員, 郡農会試験委員を経て, 明治33年香川県仲多度郡農事試験場長, 同34年3月名和昆虫研究所第7回全国害虫駆除講習会修業, 同40年6月香川県穀物検査所長, 同43年12月退職, 大正7, 8年(頃) 沖縄県技師となるも爾後の経歴歿年不明。

② 浮塵子駆除予防法(有隣堂, 1898)。

③ 香川県穀物検査創始30周年記念誌(肖像写真付)(1938)。経歴は昆虫世界等により取材。

## セ

関谷英夫(1911~1950)

① 明治44年9月13日栃木県那須郡境村に生る(本籍佐賀市)。昭和4年3月佐賀県立佐賀中学校卒, 同13年3月東京高等農林学校農学科卒, 同年4月農林省農事試験場雇, 同14年4月富山県立農事試験場技手, 同15年8月応召(南支方面), 同21年7月復員, 富山県農林技師農事試験場技師病虫部主任。

昭和25年8月8日歿 享年39才。

② モンシロチョウの生態観察, 応用動物学雑誌 12(3/4): 129 (1940), ヤチスズ, マダラスズに関する研究, 明るい農村(富山) 9・10 合併号: 16~23 (1950), ラッキョウのネダニに就て, 応用昆虫 4(4): 175~184 (1948)。

③ 温浅啓温: 関谷英夫君を悼む, 応用昆虫 6(2): 116 (1950), 杉山章平: 故関谷英夫君の業績を憶う, 防疫時報 17: 2~3 (1950), 明るい農村 9・10 合併号(1950): 関谷英夫技師

追悼特別号 (pp. 1~190) 深谷昌次, 石井悌, 湯浅啓温, 河田党, 石井象二郎, 杉山昌平, ほか県関係者 19 氏の追悼文ならびに同氏遺稿集 (pp. 2~83) (表紙は同氏の発見に関わる *Notiphila sekiyai* Koizumi (1949) イミズトゲミギワバエ図, 口絵肖像写真他付).

## ソ

## 庄島熊六 (1864~?)

① 元治元年 9 月 3 日 (1864 年 10 月 3 日) 佐賀市水ヶ江町に生る. 明治 21 年 7 月札幌農学校卒 (第 7 期), 卒業後渡米同 23 年 11 月 ミシガン農学校研究科卒 (マスターオブサイエンス), 同 30 年 8 月農商務省農事試験場技師試補, 同横浜生絲検査所事務嘱託, 同 31 年 5 月農事試験場技師試補及び兼職を解かる, 同 32 年 5 月農事試験場技師, 九州支場勤務, 大正 4 年休職 (後静岡県庁及び農事試験場にて茶業害虫研究関係せし模様なるも爾後の経歴歿年不明).

② 浮塵子駆除談, 昆虫世界 2 (7) : 92~95 (1898), (同文静岡県農会報) コホロギ及エンマコオロギ, 農事試験場報告 23 : 137~144 (1904), 稲の螟虫調査復命, 同上 23 : 145~ (1904) タバコノシンムシ同上 31 (1905).

③ 農業技術研究所の職歴による.

## タ

## 高嶋春雄 (1907~1962)

① 明治 40 年 3 月 20 日 米峰長男として東京に生る (父米峰 (1875~1949) は宗教家教育家として知られる). 大正 8 年 3 月本郷誠之小学校卒, 同 12 年 3 月府立第 5 中学卒, 昭和 4 年 3 月静岡高等学校 (理科) 卒, 同 8 年昆虫趣味之会幹事, 同 11 年東京文理科大学理学部生物学科卒, 同 6 月同校副手, 東亜蜘蛛学会創立発起人となる, 同 18 年 4 月東京文理科大学理学部講師, 同 22 年同校退職, 山階鳥類研究所員, 同 27 年早稲田大学文学部講師, 同 37 年同校専任講師.

昭和 37 年 5 月 31 日気管支肺炎にて歿 享年 55 才.

② タガメ・タイコウチ等について, 台湾博物学会報, 20 (108) : 173~176 (1930), 数種昆虫の方言, 昆虫世界 35 (411) : 394 (1931), 蟬について, 静岡高等学校寮誌 10 : 15~18 (1931) 東京市内の蝶相, *Zephyrus* 3 (3/4) : 260~263 (1931), 伊豆のヒメハルゼミ概説, 紀州動植物 2 (2) : 5~9 (1935), 注目すべき伊豆産昆虫, 動物学雑誌 51 (2) : 99~100 (1939) その他多数の昆虫関係報文のほかサソリ, クモ, ムカデ, 鳥類, 哺乳動物, 爬虫類などに関する報文著書がある. 昆虫関係単行書には「よい虫わるい虫」(小学館, 1946 及び 1949 増補版), 「昆虫の世界」(雁書房, 1949), 「昆虫の本」(小林清之助と共著) (あかね書房, 1952) があり, 主著には「動物渡来物語」(学風書院 1955), 「日本に於ける動物の変遷」(上野益三: 明治前期日本生物学史 1, pp. 584~630) (日本学術振興会, 1960) がある.

③ 高島きみ (母堂) : 高嶋春雄の思い出 (1~223) (本書出版まで各関係雑誌掲載の追悼

文その他を含め 75 氏の追悼記, 各学会弔辞, 略歴主著目録などが集録されている (非売品). その後の追悼記集には次のものがある. 早稲田生物 11 (追悼号): ~29 (向坂道治他 16 氏の追悼文, 1963), 動物分類学会報, 29: 1-9 (内田亨他 7 氏の追悼文を附す).

高千穂 <sup>ノブ マロ</sup> 宣 麿 (1865~1950) (写真 Pl. 2)

① 元治元年 12 月 14 日 (1865 年 1 月 10 日) 徳大寺実則 2 男として京都に生る (父実則 (1840~1919) は公卿の名門で明治天皇の侍従長, 公爵). 明治 3 年上京, 同 5 年~同 7 年まで訓蒙学舎に学び, 同 10 年学習院創設に伴い入学, 同 13 年麻布学農社に転校, 同 14 年同校を退学し共立学校に入学, 大学予備門に入学準備中, 同 16 年豊前彦山の座主高千穂家を嗣ぐことになり, 学業を廃し英彦山神社宮司となり, 男爵を授けらる. 同 23 年理科大学動物学実験室に於て昆虫学及び動物学を研修, 同 40 年貴族院議員に選出され, 同 41 年東京に転居, 同 41 年 3 月農商務省農事試験場嘱託として害虫研究に従事, 同 42 年 7 月~8 月牧茂市郎 (別項) と沖縄へ採集旅行, 大正 2 年東京帝室博物館天産部嘱託を兼務, 同 9 年 11 月農事試験場退職, 同 14 年彦山に帰り再び同地の昆虫研究に没頭.

昭和 25 年 12 月 23 日歿 享年 86 才.

② 英彦山に産する蝶類, 動物学雑誌 2 (25): 471 (1890), 蝶類の仔虫友喰ひをなす, 同上 12 (143): 338 (1900), エゾゼミに就て, 同上 12 (143): 337~338 (1900), 害虫飼育成績, 農事試験場報告 38 (桑名伊之吉と共著) (1911), 害虫飼育成績, 同上 40 (1931) 山形地方病虫害観察の所見, 病虫害雑誌 2 (5): 396~398 (1915), 甘藷アリモドキゾウムシに就て, 同上 2 (10): 839~840 (1915), 桃の心折虫に就て, 同上 3 (6) 423~425 (1916), コノマテフ英彦山に産す, Zephyrus 7 (1): 75 (1937), オホキノコムシ科 2 種の蛹 (安松京三と共著), むし 11 (2): 197~200 (1938), その他の報文がある. 明治 32 年彦山に高千穂昆虫実験所を設立, 新帰朝の桑名伊之吉 (別項) を迎えて九州昆虫研究所と改称, 講習会を開催して米国最新昆虫学を講じ, 昆虫学及び害虫防除の啓蒙普及に務む, 昭和 11 年私有地一万坪と多数の文献標本を九州大学に寄贈し, 同大学附属彦山生物学研究所設立の基礎を作る.

③ 高千穂宣麿: 鶯嶺仙話 (彦山生物学研究所, 1946) (自叙伝風回想録), 彦山生物学研究所要覧 (第 1 版, 1939, 第 2 版 1952, 第 3 版 1961, 第 2, 3 版巻頭に肖像写真略歴が附され第 1~第 3 版にはそれぞれ彦山関係文献集が附されている), 江崎悌三: 高千穂宣麿氏逝く, 応用昆虫 6 (4): 210~211 (1951), タカチホヒラタフシバチ, タカチホクチナガガンボに献名されているほか, 明治 28 年 7 月氏が英彦山で採集された蛇は波江元吉 (別項) によりタカチホヘビと命名された著名な種類である.

高野 鷹 蔵 (1884~1964) (写真 Pl. 3)

① 明治 17 年 3 月 14 日横浜市中区本町で 亀右衛門の長男として生る (生家は生糸輸出商のための運送, 倉庫, 金融の業を兼ねた高野屋旅館を営む). 神奈川県立第 1 中学校卒, 明治 41 年東京帝国大学理科大学動物学選科修業, 早稲田大学法学部卒, 大正 12 年 9 月震災により横浜の家屋・倉庫一切を焼失し, 東京に転居.

昭和 39 年 9 月 28 日歿 享年 80 才.

② 本邦産しじみ蝶科中印度ニ産スル種名一斑, 博物之友 1(5): 1~3 (1901), 生存競走に対する動物の自護性, 同上 2(7): 4~9 (1902), 本邦産新種ノ蝶ニ就テ, 同上 3(16): 2~6 (1903), キマダラルリツバメノ棲息地ニ就テ, 同上 4(22): 132~133 (1904), 蝶類採集便覧(1~4), 同上 4(24): 23~30~5(28): 271~276 (1905), めすあかむらさき(新称)ニ就テ, 同上 5(28): 246~247 (1905), *Erebia* 属の一品くもまべにひかげ(新称)に就テ, 同上 6(31): 81~83 (1906), 蛺蝶考(1~2), 同上 7(37): 49~52~(39): 112~115 (1907), 本邦産へうもんでふ属ノ特殊鱗ニ就テ, 同上 7(43): 240~246 (1907) などの報文のほか蝶類名称類纂(警醒社, 1907)の著書がある. 1903年より1908年にかけて活躍, 博物学同志会横浜支部幹事, 明治38年山岳会(後の日本山岳会)の創立に参画し山岳写真家としても知られる. 大正6年菟蔵の蝶類標本を友人佐竹正一(別項)に譲る(昆虫学雑誌(京都)2(4): 161 (1917), 内田一, 新村太郎: 自然科学と博物館 12(143): 264~266 (1941)参照), 大正6年以降小鳥の飼養研究に移り, 大正9年鳥の会を創会同10年10月「飼鳥(かひどり)」を発行, 後にカナリア特にローラーカナリア研究の第一人者として知られ多くの報文著書を残す.

③ 「山岳」第60年, 追悼高野鷹蔵氏(1965)(武田久吉(179~181), 中村清太郎(181~183), 山川黙(183~184), 三枝守博(184), 藤島敏男(184~188)の追悼文を収む), 鳥獣時事新聞 234(1964)高野鷹蔵先生追悼号, 岡田利兵衛: 高野鷹蔵氏を憶う(2~3), 黒田雁月(長礼): 高野鷹蔵君をしのぶ(4), 児玉健一: 高野先生の御逝去を惜しむ 他20氏の追悼文を収む(4~18), 朝比奈貞一: 高野鷹蔵さんのこと, 神奈川新聞(昭和39年12月24日号(1964), 高野鷹蔵: 思い出の採集地, 遺伝 14(7): 10~11 (1960).

#### 高橋 <sup>ススム</sup> 奨(1887~1935)

① 明治20年5月16日山形県飽海郡南平田村に鉄蔵2男として生る. 明治34年3月同村砂越尋常高等小学校高等科卒, 同37年3月山形県立庄内農学校卒, 同39年7月東京高等農学校選修科修業, 同8月農商務省農事試験場研究生として1年間害虫研究に従事, 同40年10月鹿児島県立鹿屋農学校助教諭, 同43年11月辞任し島根県立農業試験場技手, 大正2年1月島根県立農林学校講師兼務, 同年8月新潟県農事試験場技手, 同3年9月植物検査官補, 植物検査所敦賀支所長, 同9年7月横浜植物検査所穀物害虫部勤務, 同10年1月東京農業大学講師兼務, 同11年6月農商務技手食糧局業務課勤務, 昭和5年7月生糸検査所技師兼務, 同7年6月米穀部勤務, 同9年5月農学博士, 同米穀局勤務, 同10年6月農林技師.

昭和10年6月29日歿 享年49才.

② 葡萄鳥羽に就テ, 園芸の友 20(1908), 梨の実蜂駆除予防法, 昆虫世界 16(118): 217~221 (1912), メダカカメムシに就テ, 同上 20(130): 400~403 (1916), 油桐の三大害虫に就きて, 病虫害雑誌 5(1): (1918), 日本農業昆虫学発達史, 病虫害雑誌 8(1)~8(12)(1921), 日本害虫発生史, 同上 9(1) (1922), 誘蛾燈及予察燈の歴史, 昆虫世界 27(307)~(310) (1923), 日本に於けるエピラクナ瓢蟲に関する研究(英文), 東京農業大学紀要 3: 1~112 (1932), 害虫の発生に依る穀物の発熱の原因に関する実験的研究(学位論文): 1~210



(1934) そのほか 1906 年から 1934 年にかけて多数の報文があり, また, 作物害虫論 (1928), 蔬菜害虫各論 (1928), 果樹害虫各論 (上下) (1930) その他多数の著書がある。

③ 河野常盛: 高橋奨博士略伝, 昆虫 9 (4): 153~158 (1935), 昆虫部々報 4 (1): 1~16 (1935) 河野常盛: 故高橋博士と其の業績 (目録付): 1~5, 野津六兵衛: 島根の業績を顧みて, 故高橋奨君を偲ぶ: 5~7, 太田幸好: 我が応用昆虫学界の恩人 高橋奨氏を偲びて: 7~8, 神谷一男: 故高橋奨博士を想ふ: 8~9, 内海牧衛: 農学博士高橋奨先生の思ひ出: 9~12, 原田豊秋: 昆虫部と高橋博士: 12~14 (ほか 2 篇), 平野伊一: 諸先輩の略歴など, 大阪植物防疫 7 (3/4): 571~573 (1959), 肖像写真は昆虫世界 44 巻全巻の表紙に出る。

#### 高橋秀雄 (1906~1942)

① 明治 39 年 6 月 7 日北海道天塩国土別町に源太郎 2 男として生る。大正 14 年 3 月北海道庁立旭川中学校卒, 同 4 月北海道帝国大学農学部農業実科入学するも昭和 2 年 9 月より 1 ヶ月入営, 同 3 年 3 月同科卒, 同年 7 月台湾総督府中央研究所農業部糖業科に勤務, 同 5 年 5 月糖業試験場創立に伴い同所技手, 昭和 15 年台湾総督府技手を兼任, 同 16 年 10 月応召入隊。

昭和 17 年 2 月 5 日フィリピン, バタン州キナウアン岬附近の戦闘で戦死 享年 36 才。

② 甘蔗の生育過程と螟虫の産卵並に心枯発生との関係に就て (I~II), 台湾蔗作研究会報 16 (7): 135~153, 同 7 (12): 321~335 (1938), 赤眼卵蜂及び黄脚卵蜂の季節的消長に就て, 同上 17 (5): 265~282 (1939), 甘蔗小翅椿象及撞木椿象の大発生と其の駆除予防法, 蔗作改良座談会講演集: 84~97 (1940), ほか多数の報文がある。

③ 高野秀三: 故高橋秀雄君の英霊を弔ふ, 台湾蔗作研究会報 20 (11/12): 599~601 (1942) (著作論文目録, 肖像写真付), 同, 台湾博物学会々報 32 (228~229): 325 (1942)

#### 高橋良一 (1898~1963)

① 明治 31 年 4 月 6 日良直長男として札幌に生る (父良直 (1872~1914) は北海道農事試験場病理部長, 植物病理学者)。大正 5 年 3 月札幌第 1 中学卒, 同 6 年 12 月農商務省林業試験場勤務, 同 9 年 4 月台湾総督府農事試験場昆虫部勤務, 昭和 8 年 9 月農学博士, 同 16 年 3~7 月香港・カンボジア・タイ・マレー方面にラックカイガラムシ調査のため出張, 同 17 年 9 月陸軍司政官としてマラヤのクアラルンプール博物館勤務, 同 20 年帰国, 同 21 年米軍第 8 軍水耕農場技術顧問, 同 23 年 9 月日本シエラック株式会社顧問, 資源科学研究所及び横浜植物防疫所嘱託として昆虫研究に従事, 同 29 年 3 月浪速大学 (現大阪府立大学) 短期農学部教授, 同 38 年 3 月停年退職, 東京に在住。

昭和 38 年 7 月 17 日声帯癌のため歿 享年 65 才。

② 動物雑録, 学友会雑誌 (札幌第一中学) 31: 23~36 (1915), 昆虫に関する諺及び俗語, 同上 32: 87~90 (1916), 野虫の 3 種に就きて, 動物学雑誌 30 (359): 368~376 (1918), タイコウチ科 Nepidae の生態, 札幌博物学会報 7: 185~193 (1919), Aphididae of Formosa 1, Agr. Exp. Sta. Formosa Rept. 20: 1~97 (1921), Some Malayan Aphididae, Philippine J. Sci. 21: 421~422 (1922), Aphididae of Formosa 2, Dept. Agr. Govt. Res. Inst.

Formosa 4 : 1~173 (1923) 同 3, 同上 10 : 1~121 (1924), 4, 同上 16 : 1~65 (1925), 5, 同上 22 : 22 : 1~22 (1925), 6, 同上 53 : 1~127 (1931), Coccidae of Formosa (1~2), Philip. J. Sci. 36 : 327~349 (1928), 2, Trans Nat. Hist. Soc. Formosa 18 (97), 253~261 (1928), Aleyrodidae of Formosa, Dept. Agr. Govt. Res. Inst. Formosa 59~66 (1932~1935)

このほか 1915 年から歿後の 1964 年まで 400 余篇の報文がある。③の著述目録参照。

③ 桑山覚：高橋良一博士を悼む（略歴写真付），日本応用動物昆虫学会誌 7(4) : 358~359 (1963)，南川仁博：高橋良一博士を偲びて，昆虫 31(3) : 230~231 (1963)，伊藤修四郎・宗林正人：高橋良一著述目録（退官記念），Mushi 37 (17) : 167~190（略歴肖像写真・献名された昆虫名 list 付），高橋良一：わが 10 代を語る，新昆虫 10 (2) : 18~19 (1957)，江崎悌三：少年は語る，関西昆虫雑誌 3 (3) : 92 (1935)。

#### 滝 沢 求 (1907~1936) (写真 Pl. 4)

① 明治 40 年 1 月 1 日長野市に生る。大正 13 年長野中学校卒，昭和 5 年 3 月北海道帝国大学農学部農業生物学科昆虫学分科卒，同 4 月北海道農事試験場助手，同年北海道庁技手産業部勤務農事試験場昆虫部在勤，同 8 年 10 月退官，同 11 月南満洲鉄道株式会社農事試験場技術員となり熊岳城分場昆虫科勤務。

昭和 11 年 9 月 15 日歿 享年 29 才。

② The Haliplidae of Japan, Ins. Mats. 5 (3) : 137~143 (1931), The Gyrinidae of Japan, 同上 6 (1/2) : 13~21 (1931), The Dytiscidae of Japan, 1~2, 同上 7 (1/2) : 17~24 (1932), 同上 7 (4) : 165~179 (1933) マンシウリングヒメシンクヒに就て（秋山武雄と共著），農業の満洲 7 (7) : 408~417 (1935)，テフセンカブラハバチに就いて（秋山武雄と共著），昆虫 9 (5) : 207~220 (1935)，マンシウリングヒメシンクヒに関する研究，農事試験場研究時報（南満鉄道）16 : 77~112 (1936)，満洲国園芸作物害虫目録，同上 40 : 1~68 (1937)。

③ 桑山覚：滝沢求君小伝，昆虫研究 2 (1) : 19~21 (1938) (肖像写真付)

#### 武 内 護 文 (1868~1923)

① 明治元年 2 月 24 日（1868 年 3 月 17 日）高知県高坂村に生る。明治 16 年中学校へ入学するも 2 ケ年で退学，同 18 年昆虫標本 500 種を中学校に寄贈し賞状を受く，同 33 年 11 月名和昆虫研究所第 6 回全国害虫駆除講習会修業，同 34 年高知県立農林学校助教，大正 5 年教諭同師範学校嘱託。

大正 12 年 7 月 20 日歿 享年 55 才。

② 土佐の虫報 (1~9)，昆虫世界 5 (51) : 428~429~7 (69) : 214~217 (1901~1903)，イシガキテフの發育，同上，7 (66) : 45~49 (1903)，産卵の跡を隠匿する功妙なる蛾 3 種，同上，8 (78) : 60~(1904)，ピロウドスズメの擬態，同上 24 (276) : 250 (1920)，ウリハムシモドキの生活史，同上 26 (293) : 25~(1922) その他多数の報文あり。

③ 高橋奨：武内護文氏略歴（肖像写真付），昆虫世界 27 (313) : 313~314, 324 (1923)。

#### 田 中 <sup>タカヨシ</sup> 教 義 (1897~1927)

① 明治 30 年 6 月 28 日和歌山県に生る。大正 8 年 3 月鹿児島高等農林学校卒，大正 9 年

渡米，大正 11 年コーネル大学に入学，ヨハンゼン教授の許で昆虫学を研究，大正 13 年 1 月同校卒，マスターオブサイエンスの称号を得る，同年 3 月帰朝，静岡県立中泉中学校教諭，大正 14 年朝鮮勸業模範場昆虫部主任兼水原高等農林学校講師，大正 15 年病のため退職，帰国。

昭和 2 年 2 月 27 日歿 享年 31 才。

② 医用昆虫学史の第一頁，水原勸業模範場同窓会報 16(1926), Homologies of wing veins of the Hemiptera, Annota. Zool. Jap. XI (1) : 33~57(1926), The cytological studies of the alimentary canal of *Simulium pictipes* Hagen : its structure and metamorphosis, 鹿児島高農開講 25 周年記念論文集 : 813~913(1934), 主要なる蔬菜の害虫と其検索表, 博物同志会々報 1(3) : 8~12, 1(4) : 10~13, 1(5) : 4~8 (1928~29).

③ 野平安芸雄：昆虫の翅脈に関する日本人の研究 (1), (野平自刊 : 1~2 (1951)). 岡島銀次：田中教義氏追悼文, 博物同志会報 1(1) : 3~5(1927), 同 : Postscript (英文略歴), 鹿児島高農開講 25 周年記念論文集 : 892~895(1934).

田中 房太郎 (1862~1950)

① 文久 2 年 9 月 10 日 (9 月辛亥なら 1862 年 10 月 3 日, 9 月辛巳なら同 11 月 1 日) 安芸市荒島町日白に生る。荒島村小学校卒, 明治 19 年 4 月島根県庁第 2 部勸業課, 同 26 年 10 月同内務部産業課 (兼福富育種場?), 同 29 年 4 月島根県農事試験場技手, 同 37 年 7 月同八田分場長 (隠岐島), 大正 2 年 3 月退職, その後八束郡津田村農会, 玉湯村青年学校などに勤務す。

昭和 25 年 1 月 3 日歿 享年 88 才。

② ツマグロヨコバイ虫に就ての実験, 昆虫雑誌 3 : 28~29 (1895), 28 年中蠟虫飼養実況並に一種有効なる肉食昆虫の発見, 昆虫雑誌 5 : 20~21 (1896), 害虫キリウジ虫に就ての実験, 昆虫雑誌 7 : 22~23 (1897), 蠶蛆の寄生虫, 大日本農会報 181 : 32~33 (1896), モンキテフの幼虫は紫雲英を害す, 昆虫世界 4 (37) : 343 (1900), 浮塵子調査成績 (1~2), 昆虫世界 6 (53) : 23~25, (54) : 69~72 (1902), 島根県下に於けるサンホーゼ貝殻虫, 昆虫世界 8 (78) : 79 (1904), その他 1939 年まで多数の報告がある。

③ 上田常一：隠岐の動物, (開拓者とその業績 1. 田中房太郎) : 2~4 (1964), 歿後蔵書は島根農科大学へ寄贈された。

田中 芳男 (1838~1916) (写真 Pl. 1)

① 天保 9 年 8 月 9 日 (1838 年 9 月 27 日) 信州飯田に隆三 2 男として生る, 幼名芳介。父に医学を学び嘉永 3 年名古屋に出で伊藤圭介 (1803~1901) の門に入り医術, 蘭学, 本草学を学ぶ, 同 5 年一旦帰郷し家業を助けるも文久 2 年圭介の招きにより幕府の蕃書取調所に出仕, 明治元年開成所御用掛, 同年大阪舎密局御用掛, 同 3 年大学出仕, 同 9 月上旬物産局勤務, 同 6 年澳国博覧会出品事務のため同国への出張, 同 9 年アメリカ博覧会へ出張, 同 13 年メルボルン博覧会へ出張, 同 9 年内務権大丞, 同 10 年内務権大書記, 同年内務大書記官, 博物局勤務, 同 14 年農商務大書記官, 農務局長, 元老院議員, 同 18 年学士会員, 同 23 年貴族院議員, 大正 4 年 12 月男爵を賜わる。大日本山林会長・大日本水産会長・伊勢神

官農業館長などを歴任。

大正5年6月21日歿 享年77才。

② 慶応元年仏国より同3年開催の万国博覧会に出品勧誘があり、幕府は出品中本邦産昆虫を加うる事となり、採集及標本製作を幕府より命ぜられ、同2年2月より安倍為任を助手として相模、伊豆、駿河及び下総に出張昆虫採集を行ない50余箱を作製、同年11月仏国へ出張し、動植物研究上多くの新知見を得て、同3年帰国した。動、植物農水産、山林に関する多くの報文があるほか明治期初の動植物の教科書、啓蒙書がある。

③ 田中芳男君の経歴談、田中芳男君七六展覧会記念誌（大日本山林会、1913）、同上の転載は日本科学技術史大系 15: 32~34 (1965) のほか数例あり、同上展覧会紹介。昆虫世界 17 (194): 32~35 (1913)、田中芳男：維新前の昆虫学等に就て、博物之友 5 (28): 239~240 (同上の転載日本科学技術史大系 15: 34~35)、Girard, M. Les insectes à l'Exposition universelle de 1867, Bull. Ann. Soc. ent. France 1868 p. III~V これは田中の出品した昆虫標本の批評であり、訳文は江崎悌三：日本昆虫学史話 (4)、新昆虫 5 (11): 27~28 (1952)、同上転載は日本科学技術史大系 15: 35~37 (1965)、田中芳男先生略伝、講農会々誌 103 (1916) (肖像写真5種類付)、奥一：田中芳男のサボテン研究 (略伝著書目録、田中五一：父芳男を語る、芳男稿本呀蘭虫養育法 (小笠原島へコチニール介殻虫養殖のため多数のサボテンを植えし事蹟) サボテン考 (写真版) 他多数の資料を納む (1956, 限定孔版出版)、上野益三：明治前日本生物学史 1: 531~548 (1960)。

谷 貞 子 (1885~1911)

① 明治18年12月名古屋に生る。明治36年名古屋市立高等女学校卒、明治37年2月から12月まで名和昆虫研究所特別研究生として入所、明治39年7月上京、語学勉強のため桜井女塾に入る。病のため退学、明治42年4月から7月まで名和昆虫研究所定期研究生となる。

明治44年2月12日病歿 享年26才。

② モモズメの幼虫の發育、昆虫世界 8 (84): 331~333 (1904)、鳴く蟲に就て (一)~(十二)、同 9 (89~100) 1905、このほか1904年から1906年にかけて研究を発表、鳴虫女史のペンネームで知られる。

③ 谷貞子嬢逝く、昆虫世界 15 (163): 128: (略歴肖像写真付)(1911)。

## 千

チノミツシゲ  
千 野 光 茂 (1888~1957)

① 明治21年11月2日長野県上諏訪村に生る。諏訪中学校卒、文部省植物科教員検定試験合格、明治41年茨城県土浦中学校教諭、後文部省動物科、地質鉱物科検定試験合格、諏訪高等女学校創設に当り同校に転任、後に松本高等学校講師兼任、大正15年京都帝国大学理学部嘱託となり遺伝学を専攻し、黒猩々蠅の遺伝学的研究により理学博士、同年日本遺伝学会賞受賞、昭和23年諏訪清陵高等学校 (元諏訪中学校) 校長、同27年退職。

昭和32年9月12日歿 享年68才。

- ② 昆虫の標本製作に就て, 信濃博物学会雑誌 20 : 602~609 (1906), 諏訪の蝶類, 同上 24 : 794~802 (1907), 同正誤及追加 25 : 15 (1907), テントウムシの斑紋の変化に就て, 信濃博物学雑誌 37 : 1632~1635 (1912), 信濃の蝶, 信濃教育 349 : 118~125 (1915), テントウムシの変異に関する研究, 信濃教育 384 : 86~(1918), 日本産猩々蠅の遺伝学的研究, 動物学雑誌 39 (469/470) : 472~476 (1927), その他遺伝学的研究の多数の報文がある. 晩年信濃博物学々長, 信濃教育会長を歴任す.
- ③ 山崎林治: 千野光茂先生 (肖像写真付), 採集と飼育 19 (11) : 330~332 (1957), 篠遠喜人: 千野光茂先生をたずねて, 同上 19 (11) : 332 (1957).

## ツ

トシオ  
土田 都止雄 (1871~1945)

- ① 明治 4 年 5 月 22 日 (1871 年 7 月 30 日) 越後与坂藩士柔助三男として新潟県に生る. 明治 32 年東京帝国大学農科大学助手, 明治 36 年第 5 回内国博覧会審査補助, 明治 40 年 10 月熊本県農業学校教諭, 大正 2 年病気のため退職, 大正 6 年慶応義塾大学部助手, 大学予科助手 (医学部), 大正 14 年同塾普通部教諭兼幼稚舎訓導, 昭和 18 年退職. 土田兔四造 (別項) の令弟である.

昭和 20 年 5 月 26 日戦災により歿 享年 74 才.

- ② 本邦産食虫鱗翅類 *Taraka hamada* ノ仔虫ニ就テ, 動物学雑誌 10(120) : 358~361 (1898) 蚜虫ノ話, 園芸界 2(9)~2(10)(1905), 桑芽玉蠅 (桑芯止虫) ニ就テ, 日本昆虫学会々報 2(10) : 223~228(1909).
- ③ ツチダセミ, ツチダニイニイの採集者として知られる. 略歴資料は子息富士雄氏の教示による.

トシゾウ  
土田 兔四造 (? ~1928)

- ① 越後与坂藩士柔助の息として新潟県に生る. 理科大学動物学教室の助手を勤め, 三崎の東大臨海実験所にも勤務, 明治 38 年 10 月清国政府の招きに応じ北京大学に赴任, 同 39 年 7 月帰国後京都の島津製作所勤務. 土田都止雄 (別項) の兄.

昭和 3 年歿.

- ② 宮城県下の毒蛾に就て, 動物学雑誌 1 (11) : 374~377 (1889), *Astaxa* sp. (チャドクガ) に就て, 動物学雑誌 1 (13) : 456~458 (1889), 浅間山麓蝶類採集一斑, 動物学雑誌 2 (24) : 422~424(1890), 箱根七湯の蝶類, 動物学雑誌 2(24) : 456(1890), 李氏 (Leech) 日本及朝鮮産鱗翅類 (1~13), 動物学雑誌 5 (60) ~9 (107) (1894~1897).
- ③ 小川弘太郎: 動物標本談, 動物学雑誌 26 : 4~8 (1901).

## テ

寺西 暢 (1896~1938)

- ① 明治 29 年 6 月 26 日大阪府東成郡城北村に生る. 明治 40 年 3 月東成郡城北小学校卒, 同

42年3月同高等科2年修業，大正3年3月大阪府立四条畷中学校卒，同年3月関西大学選科入学，直ちに米国農務省昆虫局横浜出張所入所昆虫研究に従事，同12年退職。

昭和13年8月7日歿 享年42才。

② テラニシアリツカコホロギ（新種新称）に就て，昆虫世界 18(202)：227~228(1914)，同追報，18(205)：378~379(1914)，A new species of Formicidae from Japan，昆虫学雑誌（京都）1(4)：137~139(1915)，日本産蟻類雑誌（1~2），動物学雑誌 39(460)：88~94(465)：297~300(1927)，*Tiphia* の翅脈と其の変異に就いて，同上 40(472)：33~37(1920)，日本産蟻類の習性と其の分布（1~2），同上 41(488)：239~251，(489)：312~332(1929)，The parasites of *Popillia japonica* in Japan and Korea (Clausen et al.)，U.S.D.A. Dep. Bull. 1429：1~66(1929)，A new species of the Trigonaloidea with description of a new genus，関西昆虫学会報 2：9~11(1931)，日本産蟻類の習性と分布(3)，同上 4：77~80(1932)，ウラナミシジミの蛹と其の寄生蜂キアシプトコバチに就きて，同上 6：35~39(1935)，熱河省産アリ科，第1次満蒙学術調査研究団報告 51区 11編 60輯(1936)。

③ 関西昆虫雑誌 5(2)：49~98(1938)，故寺西暢回想集（戸沢，江崎，矢野他 22氏の追悼文のほか（肖像写真），略歴主著目録を収む），岩田正俊：寺西君を憶ふ，関西昆虫雑誌 5(3)：24~25(1936)，神谷一男，寺西氏の想い出他 2篇，昆虫部々報 14：3~8(1938)，戸沢信義編：寺西暢遺稿集（年代別報文複刻（1~311）及び未発表遺稿 9篇（1~95）を収む）。なお同氏の蟻類標本は歿後東京農業大学に寄贈されたが戦災により焼滅した。

## ト

トイヒロノブ  
土居寛暢（旧姓平井）（1885~1949）

① 明治18年2月15日大分県速見郡杵築石町に生る。明治36年大分県杵築中学校卒，明治40年3月東京高等師範学校卒，同年長野県長野中学校教諭，明治43年韓国統監府中学校教諭に転任，同年5月平壤高等普通学校嘱託，明治44年同校教諭，大正10年新義州高等普通学校教諭，大正14年同校長，昭和3年病氣により一時退職し京城に移り諏訪女子高等学校教諭となり，恩賜記念科学博物館嘱託を兼任，昭和8年竜谷高等女学校教諭・兼京城公立中学校講師，昭和20年竜谷高等女学校長・兼科学博物館嘱託，同年11月7日引揚帰郷，昭和22年10月福岡市に移り米軍第3地区民間検閲局に就職，昭和24年2月狭心症のため退職静養す。

昭和24年12月31日歿 享年64才。

② 朝鮮産蝶類図録：朝鮮彙報 58：2057~2070(1919)，朝鮮産蝶類図説（森，趙両氏と共著），その他1916年より1943年にかけて半翅類・蜻蛉類に関する多くの論著がある。

③ 江崎悌三：「朝鮮昆虫学の開拓者」土居寛暢氏追憶，新昆虫 5(2)：30~31(1952)，竹内吉蔵：土居寛暢さんの追悼，新昆虫 5(2)：31~32，上田常一：土居大愚先生の追憶，新昆虫 5(2)：32~33。

東 条 <sup>ミサオ</sup>操 (旧姓村松) (1884~1966)

① 明治 17 年 12 月村松秀茂 2 男として東京深川に生る。府立第 1 中学校卒, 明治 43 年 7 月東京帝国大学文科大学卒, 大正 2 年同大助手, 同 13 年静岡高等学校教授, 昭和 4 年広島高等師範学校教授を経て学習院教授, 後学習院大学教授。

昭和 41 年 12 月 18 日歿 享年 82 才。

② 明治 33 年 5 月市河三喜及び兄の村松茂 (昆虫研究家に同姓同名の別人あり) と共に日本博物学同志会の創会に参画, 博物之友を発刊して活躍す。富士採集隊記事, 博物之友 1 (3): 附録 1~8, 同 (4): 附録 1~8 (1901) 日原鐘乳洞採集隊記, 同上 2 (10): 附録 1~6, (11): 1~6 (12): 1~6 (13): 1~6 (1902), 後に方言学者となり多数の著書がある。

③ 経歴資料は帝国大学出身名鑑 (1932) などによる。

ト <sup>ゲンゾウ</sup>鳥 <sup>バ</sup>羽 <sup>源</sup>源 蔵 (1872~1946)

① 明治 5 年 1 月 20 日 (1872 年 2 月 28 日) 岩手県気仙郡小友村に生る。明治 25 年 8 月東京振農会農学全科卒, 同 28 年 2 月蚕業用達組合より蚕業習得証を受く, 同 33 年 8 月小学校教員免許を受く, 同年 9 月岩手県気仙郡小反尋常高等小学校尋常科准訓導, 同 41 年 4 月素木博士の招きにより台湾総督府農事試験場勤務害虫研究に従事, 同 42 年 9 月同技手, 同 44 年退官, 同 45 年 1 月岩手県気仙郡小反尋常小学校准訓導, 大正 11 年 5 月岩手県師範学校教諭心得, 同 14 年 3 月盛岡夜間中学校講師嘱託, 昭和 3 年 8 月岩手県師範学校教諭, 同 19 年 3 月退官。

昭和 21 年 5 月 23 日歿 享年 74 才。

② テグス蟲に就て, 昆虫世界 1 (3): 92~94 (1897), ハサミムシの一種オオヨコバイを食す, 同 2 (13): 339 (1898), 昆虫標本製作法 (有隣堂, 1899), 虫談片々 (1~7), 昆虫世界 2 (7): 103~106—3 (24): 299~300 (1898~1899), 岩手県産蝶類, 岩手学術彙報 564 (1900), 昆虫採集旅行記, 博物学雑誌 27: 18~31: 11~17 (1901), エダナナフシの食餌昆虫世界 7 (76): 515~517 (1903), 蝶と花, 岩手学術彙報 738 (1905), その他 1893 年より 1937 年にかけて多くの報文がある。明治 33 年 8 月岩手県昆虫学会を創会幹事となる (昆虫世界 4 (37): 358 (1900))。

③ トバヨコバイその他の昆虫に献名された種があるほかカタツムリ一種にトバマイマイがある。本経歴資料は岩手大学農学部宮慶一郎博士の提供による。

ト <sup>ヤマ</sup>外 <sup>山</sup>山 亀太郎 (1867~1918) (写真 Pl. 2)

① 慶応 3 年 9 月相模愛甲郡小鮎村で健次郎の長男として生る。明治 13 年同郡古沢小学校卒, 同 17 年慶応義塾に入学 1 年間英語を学ぶ, 同 25 年 7 月東京帝国大学農科大学農学科卒, 同年農科大学助手, 後に水産講習所講師を兼務, 同 29 年福島県蚕業学校校長 (初代), 同 32 年農科大学大学院に入り翌年より蚕の遺伝研究を始む, 同 35 年 2 月シャム国の招きに応じ同国農務省蚕業局の技師長となり蚕の品種改良試験を行ない同 38 年 3 月帰国, 農科大学講師, 同 39 年 4 月農学博士, 同 41 年 9 月助教授, 同 44 年 6 月原蚕種製造所技師兼任,

同年7月欧州へ出張，大正4年日本育種学会創会に参画す，同6年12月同教授，動物学，昆虫学，養蚕学第3講座担任。

大正7年3月29日歿 享年50才。

② 蚕蛆試験，福島県蚕業学校報告 1 : 87~102 (1898)，蚕の種類比較試験 (他2氏と共著) 同上 2 : 1~38, 3 : 1~26, 26~704 : 1~53, 5 : 1~43, 7 : 1~48, 8 : 1~64 (1899~1907)，シヤムニ於ケル家蚕ノ寄生蠅ニ就テ，蚕業新報 14 (164) : 700~703 (1906)，Contribution to the study of silk-worms (I-II), Bull. Coll. Agr. Tokyo Imp. Univ. 5 : 73~118 (1902)，同 7 : 125~245 (1906)，Studies on the Hybridology of Insects (I~II), Bull. Coll. Agr. Tokyo Imp. Univ. 7 : 259~393 (1906)，Journ. Coll. Agr. Tokyo Imp. Univ. 2 : 85~103 (1909)，養蚕術講義 (1901)，実験蚕の遺伝 (1918) その他多数の論著がある。

③ 噫外山博士，蚕業新報 26 (302) 口絵肖像写真付 (1918)，外山博士10周年追悼記念号，蚕業新報 35 (406) (1927)，石川千代松：外山亀太郎君の思ひ出，田中義麿：遺伝学に於ける外山博士の功績，宮原忠正：蚕業学校長時代の外山；石渡繁胤：外山博士洋行中の動静，富田勘之丞：蚕界の恩人外山博士，松井佳一：外山博士についての思ひ出，他多数 (略)，町田次郎：伝記外山亀太郎博士，遺伝 6 (10) : 29~31 (1942)，外山農学博士記念事業会編：外山博士論文抄録集 (1942)，内田為寿：外山亀太郎博士の伝，N. I. G. 談話室 11 (1942)，鈴木筒一郎：外山博士の面影，同上 (1942)，篠遠喜人：遺伝学史講 (1945)，田中義麿：日本遺伝学の夜明 (1)，遺伝 15 (1) : 39~42 (1961)，佐藤七郎：外山亀太郎博士のカイコの遺伝研究，日本科学技術史大系 15 生物科学 : 136~139 (1965)，外山亀太郎記念録 (1940)。

知

十

中川久 (和) (1859~1921)

① 安政6年3月21日 (1859年4月23日) 豊後国直入郡岡城に生る (兄久成は藩主後に伯爵)。幼名梯二郎，明治6年英人うわいと及び鴨池宜之等に就き英語数学等を学ぶ，同8年4月東京英語学校，開成学校を経て同10年9月大学南校 (東京大学理学部) に入学，同12年10月退学，13年4月麻布学農社英語，数学授業の嘱託，同15年8月内務省地理局雇，同16年5月愛媛県松山中学校教諭同師範学校嘱託，同19年6月福岡県師範学校教諭，同22年10月第五高等中学校 (後の五高) 教授，同25年7~8月沖縄県下採集旅行，同32年4月農商務省農事試験場技手，昆虫部勤務兼蚕業講習所技手，同35年4月同技師，同36年3月退職し大分県選出衆議員議員，同年11月農事試験場嘱託を経て同37年11月農事試験場技師九州支場勤務，大正2年同支場廃止により退官，大正5年まで郷里に於て養蜂・養鶏等を営む，同9年育離のためビタミン研究の必要となり熊本医学専門学校研究生となり研究にはげむ。

大正10年11月12日脳溢血のため歿 享年62才。

② 夜中蛾を採集する法，動物学雑誌 1 (5) : 136~ (1889)，三化螟卵の寄生蜂と其利用，昆虫世界 2 (12) : 281 (1898)，稲の害虫クロクサガメと其の寄生蜂，同上 2 (16) : 449 (1898)，本



邦産昆虫卵寄生蜂図説 (1), 農事試験場報告 6 (1900), 本邦産葉蜂科 (1), 農事試験場特別報告 17 (1902), 天牛卵寄生蜂の発生経過, 同上 30 : 27 (1904), 熊本に於ける昆虫の観察二三, 昆虫世界 8(88) : 489~(1904), その他 1889 年より 1922 年まできわめて多数の報文がある. 詳細は ③ の高橋奨編 : 論文目録参照.

③ 高橋奨 : 中川久知氏小伝と論文, 昆虫世界 26 (295) : 95~99 (1922) 同追加, 同上 (300) : 263~265 (1922), 高橋奨 : 中川久知氏略伝, 病虫害雑誌 8(6) 附録 p. 12 及び 8 (12) : 附録 13 (1921). 遺稿 : (鎮西医報 192 号 : 1~12 (1922) ヴイタミンに関する研究及び高安慎一 : 附記 p. 11~12) 中川家遺族刊 (1922). 本略歴の一部は農技研職歴による.

#### 永 沢 小兵衛 (1865~?)

① 慶応元年 7 月宮城県仙台に生る. 仙台中学校卒, 明治 13 年 9 月 駒場農学校 予備科入学, その後退学, 宮城県農会勤務, 同 33 年 4 月名和昆虫研究所第 3 回全国害虫駆除講習会修業, 同 34 年 1 月より 36 年 1 月まで名和昆虫研究所主任として編集業務に活躍, 後名和昆虫研との関係をたち台湾及び南清に昆虫調査旅行をなす, 爾後不明.

② リンゴワタムシの駆除法, 昆虫世界 5 (52) : 474 (1901), 無翅の螢につきて付台湾の螢 (1~3), 昆虫世界 7 (71) : 286~289, (73) : 368~373, (74) : 410~414, (76) : 500~507 (1903) その他昆虫世界 4~6 巻の質問の回答を執筆し「なにがし生」の名で昆虫界消息を執筆「晴耕雨読生」の名で温古記事を執筆す. また「青蓑白笠の人」も恐らく同人と思われその活躍によつて雑誌内容が多彩となる. 雑誌編輯のほか出版物の編纂にも当る.

③ 駒場農学校に入学せしことは円藤円秀編, 駒場農学校等史料 (1966 p. 311) にその名がある. 本資料は昆虫世界 4~6 巻による. 又台湾旅行は新潟県佐藤栄 (別項) の出費後援によるという. 一 : 永沢小兵衛氏, 昆虫世界 8 (80) : 175 (1904).

#### 長 野 菊次郎 (1868~1919) (写真 Pl. 3)

① 明治元年 9 月 27 日 (1868 年 11 月 11 日) 福岡県筑紫郡警固村に生る (祖父種正は本居宣長に国学を学び後伊能忠敬と測量に従う). 明治 13 年 5 月警固小学校卒, 同 17 年 12 月福岡中学卒, 同 18 年 6 月警固小学校教員, 同 7 月那珂, 席田両郡立高等小学校教員, 同 19 年 5 月粕屋郡箱崎小学校教員, 同 21 年 4 月箱崎高学小学校訓導, 同 30 年 7 月文部省尋常師範学校, 尋常中学校植物科教員検定試験合格, 同 12 月大阪府第二中学校教諭, 同 32 年 6 月文部省師範学校中学校, 女学校, 動物科・生理科検定試験合格, 同 33 年 4 月岐阜中学校教諭, 同 6 月「筑前国中央部植物分布の状態」の論文で東京植物学会より銀牌を受く, 同 36 年 4 月東京府立第三中学校講師, 同 37 年 10 月米国へ私費留学, 同 40 年 3 月帰朝, 同 40 年 4 月名和昆虫研究所附属農学校教諭, 同 42 年同校廃校と同時に同研究所にとどまつて研究に従来, 同 44 年 2 月同研究所技師,

大正 8 年 8 月 11 日歿 享年 50 才.

② 筑前国産蝶類一斑, 動物学雑誌 5 (60) : 391~393 (1893), 昆虫と植物の関係 (1~6), 昆虫世界 4 (38) : 363~367, (39) : 403~407, (40) : 441~446, (43) : 83~88, (45) : 167~169, (52) : 444~451 (1900~1901), 鳥類の食物と昆虫との関係 (1~3), 同上 6 (55) : 93~97, (57) : 180~184, (58) : 221~222 (1902), 六足虫巢窠 (1~12) 同上 7 (65) : 14~15,

(66) : 70~71, (67) : 116~118, (68) : 158~159, (69) : 206~207, (70) : 244~245, (71) : 299~300, (72) : 336~337, (73) : 383~384, (74) : 421~422, (75) : 468~469, (76) : 518~519(1903) 日本昆虫図説 I (天蛾科) (1904), 日本鱗翅目汎論 (名和昆研, 1905), 日本産蛾類の 2 新種, 昆虫世界 16 (179) : 259~264 (1912), 日本鱗翅類の新属新種, 動物学雑誌 28 (329) : 109 (1916), 日本産蛾類の新種及び未記録種, 昆虫世界 22 (256) : 487~ (1918), 害虫と益虫 (1918), その他多数の報文がある。

③ 訃報 : 昆虫世界 23 (264) : 318 (1919), 嗚呼長野菊次郎氏逝く (追悼文及肖像写真) : 昆虫世界 22 (265) : 319~320, 同 353~355 (1919), 矢島八兵衛編 : 故長野菊次郎遺墨「菊のかおり」 : 1~58 (1920), (履略, 我宗教 (遺稿), 病虫日記 (一日一感及病床録), 矢島八兵衛 : 長野先生の思出及び, 中田武雄 : 畏友長野君の片影を集録), なお歿後江崎悌三は遺稿図「日本産蝶類の幼虫蛹等の記録」(1~5) (Zephyrus 3 (3/4)~5(1)(1931~1933)) を紹介している。

中 林 <sup>ヒョウ</sup> 馮 <sup>ツ</sup> 次 (1876~1934)

① 明治 9 年 9 月 25 日大阪に生る。大阪府立農学校卒, 大正 3 年名和昆虫研究所第 27 回全国害虫駆除講習会修業, 大阪府技手となり大阪穀物検査所に 16 年間勤務, 昭和 3 年岐阜県穀物検査所へ転任後同所長となり, 昭和 7 年退官, 昭和 12 年台湾採集旅行, 大阪府囑託として公園課などに勤務。

昭和 22 年 8 月 6 日大阪府箕面に歿 享年 70 才。

② 避債虫に就て, 病虫害雑誌 1(3) : 310~(1914), 大阪府に於けるイセリア介殻虫発生状況 (1~2), 昆虫世界 24 (276) : 293~(277) : 328~(1920), 貯蔵穀物の主なる害虫とその防除法, 大阪穀物検査所特別報告 1 (1922), カンタンの産卵に就て, 第 20 回関西病害虫研究会講演要旨 : 12~(1933), マツムシの産卵, 昆虫世界 38 (439) : 97~98 (1937), 庭木の害虫防除法, 関西昆虫学会報 9 (1) : 60~83 (1939), タイワンカンタン京都市に産す, 同上 10 (2) : 43~(1940) その他 1914 年より 1941 年にかけて多くの報文があり, 採集記「虫のまにまに」を昆虫世界 33 巻より永く連載す。

③ ナカバヤシヒゲブトカメムシその他台湾産の昆虫に氏の発見によるものが若干ある。歿年は上野益三博士の御教示による。

中 村 正 雄 (1867~1943)

① 慶応 3 年 11 月 20 日 (1867 年 12 月 15 日) 山形県鶴岡市家中新町に生る。明治 18 年 3 月山形県立西田川中学校卒, 同年 5 月庄内英学会教授囑託, 同 22 年 9 月庄内中学校囑託, 同 29 年 4 月庄内尋常中学校書記兼助教諭, 同 31 年 1 月米沢尋常中学興譲館教諭, 同 33 年 7 月新潟県長岡中学校教諭, 同 34 年 2 月文部省植物学検定試験合格, 同 8 月理科大学動物学実習修了, 同 38 年 8 月新潟県柏崎中学校教諭, 大正 12 年 2 月同上退職し宇都宮高等農林学校講師, 昭和 5 年 4 月同上退職, 昭和 6 年より 9 年まで同校事務囑託図書館主事を勤め退職後同 17 年まで宇都宮在住, 同 17 年 5 月山形県鶴岡市に帰郷。

昭和 18 年 1 月 11 日尿毒症のため歿 享年 75 才。

② 新潟県所産直翅類目録, 名和靖還暦記念論文集 : 77~82 (1917), 新潟県天産誌 (1925),

消化管に寄生せし蠅につきて、動物学雑誌, 38 (453) : 211~212 (1926), 宇都宮に於ける誘蛾装置内の昆虫目録 (1~V) : 昆虫 13(1) : 305~309, 13(4) : 152~160, 14(1) : 33~41, 14(4) : 152~162, 15(1) : 37~43 (1939~1941) その他鳥類, 魚類, 植物に関する報文も多い。  
 ③ 野平安芸雄 : 越後のギフテフ (4), 昆虫世界 47(548) : 118 (中村氏追悼記事) (1943). 経歴資料は宇都宮大学農学部田中正教授の提供による。

中村 <sup>ヤマト</sup> 倭 (1896~1948\*)

① 明治 29 年 1 月 7 日東京に生る (本籍向島区寺島町). 大正 9 年 7 月早稲田大学商学部の課程を終了, 同 7 月為替貯金局事務員, 同 10 月簡易保険局書記補, 同 11 月退職して 1 年志願兵として入隊, 同 10 年 11 月除隊, 昭和 2 年 11 月東京中央郵便局通信事務員, 同 3 年退職し農林省畜産局雇鳥獣調査室勤務, 同 10 年 6 月山林局勤務, 同 16 年 6 月農林属, 山林局管理部勤務, 昭和 18 年 11 月農商務省属, 同 20 年浦和木炭所長。

昭和 23 年 (頃) 長野市郊外で歿。

② パラオ島の蝶, *Lansania* 1(2) : 26~29 (1929), 筑波山の蝶類に就て, 同上 1(5) : 68~73 (1929), エゾシロテフの生活史, 理学界 27 (9) : 789~(1929), 岸田・中村昆虫標本製作法 (岩田久吉と共著, 綜合科学出版協合, 1930) 台湾恒春地方の蝶類, *Lansania* 2(17) : 98~112 (1930), 日本産ネアカテフ属, 同上 2(14) : 59~60 (1930), 日本産シロテフ属, 理学界 28 : 312 (1930), 鹿児島県川辺十島の蝶類, *Lansania* 6(60) : 145~148 (1934), 沖縄シロオビヒカゲに就て, 同上 7(68) : 113~(1935), 日本帝国産蝶類目録 (岸田久吉と共著), 昆虫界 4(29/30) : 434~674 (1936), 八丈島の蝶類, *Lansania* 8(75) : 70~73, 蒙疆の蝶類 (岸田久吉と共著), 昆虫世界 44 (519) : 325~330(1940).

③ 本経歴資料は岸田久吉博士の提供による。

波江 <sup>ナミ エ モト キチ</sup> 元吉 (1854~1918) (写真 Pl. 1)

① 安政元年 2 月 15 日 (1854 年 3 月 13 日) 東京本郷西片町に生る。明治元年 8 月広島県福祉誠之館に学び, 同 6 月上京本郷の進文学社に入り独語を学び, 同 9 年 2 月東京博物館の職員となり爾来 10 数年天産部で動物調査に従事, 同 12 年動物学会の前身東京生物学会の設立発起の 1 人となる, 同 15 年東京大学別科医学生並びに製菓生の動物学講師を嘱託, 同 22 年東京帝国大学理科大学兼農商務省嘱託として鳥類調査に従事, 同 26 年理科大学助手。

大正 7 年 5 月 24 日歿 享年 64 才。

③ 蟬の発音器に就て (I~II), 動物学雑誌 2(24) : 415~420 (26) : 522~526 (1890), 日本及朝鮮産鱗翅類に就て, 同上 4(41) : 115~120 (1892), 沖縄産蝶類について, 同上 7(79) : 150~162 (1895), 鯉節害虫調査報告, 水産調査所水産調査報告 8(1)(1898), 日本産トンボ図版, 動物学雑誌 13(156~158) (1901), 14(160~169) (1902), 15(172~178) (1903), 16(194)(1904), 白蟻の敵, 同上 18(217) : 270~(1906), G. Lewis に昆虫を学び Pryer の *Rhopalocera Nihonica* II (1888) 及び III (1889) の邦訳を同書に附す。

③ 訃報 : 動物学雑誌 30(357) 巻頭 (肖像写真及略伝), 訃報, 鳥 7 : 巻頭肖像写真略歴及業績 (1918), ナミエチヨウは黒岩恒, 三木原広介の氏に献名せるものである (動物学雑

誌 7(85) : 384 (1895).

<sup>ナルト</sup>  
鳴門義民 (1833 (or 1835)~1913) (写真 Pl. 1)

① 天保4年7月15日 (1833年8月29日, 別に天保6年生という説があるが, この年は閏で7月<sup>ツチノトヒツツ</sup>己未なら1835年8月9日, 7月<sup>ツチノエネ</sup>戊子なら同9月7日である) 徳島県美馬郡重清村の佐々(後鳴門と改姓)三大夫の3男として生る. 弘化年間習学のため大阪に出て3年間以上奉公し(呉服商・大工等)学費を貯えて江戸へ出る途中横浜で酒屋に奉公しつつ中浜某(万次郎か)につき英語を学ぶ. 安政3年ペリ来朝するや幕府に召され通弁兼鉄砲役人となるも慶応年間に辞して上京学塾を開き子弟を教育す, 明治4年内務省勤農寮(後の勤農局)に出任, 同10年勤農局5等属, 同年5~8月青森秋田両県下螟虫発生調査に出張本邦初の試験田設置防除試験実施, 同11年1月~10月熊本県他螟虫調査のため九州各地へ出張, 同14年7月栃木県下害虫調査, 同16年8~9月下総種育場虫害調査のため出張, 同10月虫害調査のため神奈川県下へ出張, 爾後経歴不明.

大正2年11月9日歿 享年80才.

② 英語階梯 (1868), 五倍子の話, 開農雑誌 30 (1877), 螟虫駆除実験説, 農事月報 1 : 1~15 (1878), 螟害の説, 第2回内国勸業博覧会害虫図解説中の p. 47~50 (1881), 明治10年青森秋田両県下出張復命書, 農務顛末 5 : 116~129 (1957), 明治11年熊本県下出張復命書, 同上 : 134~162 (1957), 明治16年栃木県下出張復命書, 同上 : 164~168 (1957), 明治16年下総種畜場出張復命書同上 : 173~175 (1957), 同上16年神奈川県下出張復命書同上 : 175~176 (1957), 哥氏田圃虫書 (訳書, 有隣堂, 1882).

③ 高橋奨 : 本邦応用昆虫学の先学鳴門義民先生附鳴門義次氏の北海道蝗害発源地探検談 (1~2), 昆虫世界 25 (281) : 16~18, (282) : 53~59 (1921) (肖像写真, 昆虫世界 25 (281) 口絵第1図版), 高橋奨 : 日本農業昆虫学発達史 (1), 病虫害雑誌 8 (1) 附録 : 5~6 (1921).

名和梅吉 (1874~1945)

① 明治7年1月8日平三郎3男として岐阜県本巢郡船本村に生る. 少年時代より親戚の名和靖(別項)につき昆虫学を学び, 其の研究協力者となり, 名和昆虫研究所の創設につくし, 女婿となる. 明治35年10月渡米し国立自然博物館等で昆虫研究に従事し各地を視察, 同38年3月帰国, 名和昆虫研究所技師, 大正15年10月同研究所第2代所長に就任, 理事を兼務, 爾来昆虫世界の主筆として活躍.

昭和20年7月20日肝臓癌のため歿 享年61才.

② 本邦産蟬の種類に就て (1~4), 昆虫世界 1(1) : 19~20—(4) : 130~34 (1897), シモバシラの虫癭に就て, 同上 2(7) : 91~92 (1898), 本邦産浮塵子の種類について (1~9), 同上 2(13) : 325~328—3(23) : 249~249 (1898~1899), ムシクサの虫癭に就て, 同上 4(35) : 241~243 (1900), ゴマダラテフに就て, 同上 6(56) : 134~137, ウラギンシジミの生活史, 同上 11(118) : 235~237 (1907), 葡萄害虫2点姫横這駆除予防(フタテンヒメヨコバイ *Erythro-neura apicails* Nawa の原記載), 同上 17(196) : 480~486 (1913), ツマグロオオヨコバイに就き, 同上 23(265) : 329~332 (1919), 大螟虫及切蛆の防除に就きて, 同上 49(570) : 42~

43 (1945 絶筆), このほか昆虫世界 1 巻より殆んど毎号, きわめて多くの報文を発表す. 実名のほかに初め随然 (昭和 3 年頃まで) 後に随其の号を用いて執筆, 著書に害虫防除宝典 (名和昆虫研究所, 1929), 稲の害虫 (童話春秋社, 1949) がある.

③ 訃報: 虫界速報 6: 1~4 (1945) 略歴付, 同, 号外 (1945 年 9 月 8 日付), 土井久作: 逝ける名和梅吉先生, 虫自然 16: 44~45 (1947), 名和正男: 名和梅吉翁逝く, 昆虫世界 49 (571): 1~2 (1945) なお名和靖長女貴子夫人 (瓢虫女史) (1884~1928) については新農報 16: 64~65 (1900) 及び Marlatt, C. L, Japan's foremost entomologist, Ent. News 14 (3): 65~65 (1903) (肖像写真付) を参照.

名和 <sup>ヤスシ</sup> 靖 (1857~1926) (写真 Pl. 1)

① 安政 4 年 10 月 8 日 (1857 年 11 月 24 日) 美濃国本巢郡船本村に正也長男として生る. 明治 15 年 3 月岐阜県農学校卒, 引続き同校雇, 博物学助手となる, 同 16 年 7 月同県華陽学校助教諭試補, 同 19 年 11 月~20 年 4 月まで東京帝国大学理科大学で動物学を研修, 同 21 年 2 月岐阜県師範学校助教諭心得及同県尋常中学校助教諭心得兼務, 同 26 年 5 月尋常師範同中学高等女学校博物動物科及び師範学校尋常中学校農学科教員免許状を受く, 同年 6 月岐阜県尋常師範学校助教諭, 同 29 年 2 月同校教諭となり 4 月退職して名和昆虫研究所を設立, 同 30 年 9 月「昆虫世界」を創刊, 同 32 年以降全国害虫駆除講習会を開催す, 同 34 年 5 月藍綬褒賞を受く, 同 37 年 10 月同県巡查教習所教諭嘱託, 同 38 年県立農学校講師嘱託, 同 40 年名和昆虫研究所附属農学校を創立し同校長, 同 42 年 4 月廃校, 同 43 年 12 月鉄道院の白蟻研究嘱託, 同 44 年財団法人名和昆虫研究所々長.

大正 15 年 8 月 30 日歿 享年 68 才.

② 喰野虫の説, 農事雑誌 (岐阜農学校) 32: 7~13 (1882), マサキ尺蠖の説, 大日本農会岐阜支会報告 10: 6~7 (1884), クサカゲロウ産卵の実験, 動物学雑誌 1 (8): 260~261 (1889), 御嶽山の六足虫, 同上 1 (12): 433~434 (1889), 大豆害虫ヒメコガネの実験, 同上 4 (40): 50~61 (1892), 洪水と昆虫との関係, 同上 9 (106): 328 (1897), 蜂と南瓜との関係, 昆虫世界 1 (1): 16~18 (1897), 水蜜桃袋掛の起源, 昆虫世界 29 (335): 238~240 (1925) このほかきわめて多数の報文がありまた, 薔薇の一株, 昆虫世界 (1897), 新式昆虫標本製作法 (木村小舟と共著) (1909), 昆虫翁白話 (1924) などの著書がある.

③ 名和靖氏の逝去, 昆虫 1 (2): 142 (1926), 松村松年: 名和靖氏を追想して, 昆虫世界 43 (1): 18~19 (1939) 名和先生の遠逝を悼む, 昆虫世界 30 (349): 289~290, 昆虫翁の臨終及葬儀, 同上: 311~316 (1926), 寒川鼠骨: 嗚呼名和昆虫翁, 日本及日本人 9 月号 (1926), 土井久作: 昆虫学者小伝 (1) 名和靖氏, 昆虫研究 1 (1): 20 (1937), 経歴資料は名和靖履歴書, 動物学雑誌 2 (23): 404 (1889), 名和靖氏還歴記念寄贈論文集: 1~4 (1917), 高橋熒: 病虫害雑誌 8 (2) 附録 p. 8 (1921) 及び昆虫世界による. 養嗣子梅吉 (別項) 参照.

## 二

新島 <sup>ヨシナオ</sup> 善直 (1871~1943)

① 明治4年7月善之長男として東京に生る。明治29年東京帝国大学農科大学林学科卒，同31年農科大学動物学教室助手同32年札幌農学校教授後に東北帝国大学農科大学教授，同38年造林学及び保護学研究のためドイツに留学，同42年林学博士，北海道帝国大学農科大学教授兼北海道庁技師，林業試験場長，昭和9年4月退官，北海道帝国大学名誉教授となり，北星女学校長などを勤む。

昭和18年2月7日歿 享年71才。

② 森林保護学（博文館，1900），日本森林保護学（裳華房，1912），森林昆虫学（博文館，1913），On some Japanese species of the Scolytini, Journ. Sapporo Agr. Col. 2: 67~(1906), Die Scolytiden Hokkaido unter Berücksichtigung ihrer Bedeutung für Forestschaden, 東北大農科大学紀要 3(2): 109~(1909), Die Borkenkäfer Nord und Mittel-Japans, 札幌博物学会報 3(1): 1~(1910), コガネムシに関する研究報告 I~III, 東北帝国大農科大学演習林報告 5(1917) 北大農学部演習林研究報告 3(2)(1923) 同4(1)(1927) (以上3篇木下栄次郎と共著), その他森林害虫に関する多数の報文がある。

③ 訃報 昆虫世界 47(547) 92(1943), 本略歴資料は桑山覚博士による。

ニイムラ タロウ  
新村太朗 (1917~1951)

① 大正6年7月7日長野県下諏訪町に生る。下諏訪小学校卒（細野淳校長に昆虫を学ぶ），昭和10年4月長野県立下諏訪中学校卒，同4月平山博物館に昆虫研究生として入館，後同研究員として研究に従事，後海軍軍属としてニューギニア民政府囑託，続いて海南島海軍病院昆虫研究室主任となりマラリア研究に従事，戦後帰国して科学博物館動物課に入り文部技官となる。

昭和26年4月20日狭心症で歿 享年34才。

② 霧ヶ峰を中心とする蝶相，下諏訪中学学友会誌，昭和8年号(1933)，信州八ヶ岳の蝶類，虫の世界 1(4): 24~25(1936)，諏訪地方の蝶類二・三, Zephyrus 7(1): 71(1937)，南信州蝶類雑記(1~2) Zephyrus 8(3/8): 122~130, 9(1): 13(1940)，信濃の蝶(1~2) 教濃教育, 649: 50~57, 650: 40~62(1940)，ニューギニアの昆虫, 宝塚昆虫館報 39(1949), *Hyphantria cunea* or fall webworm, as a new comer to Japan, 国立科学博物館報告 25(1949)，ガロアムシについて，自然科学と博物館 18(2): 25~(1951)，蝶の生活（日本教育出版社，1948），昆虫の世界（高山書店，1949），日本の蝶（南条書店，1950）。

③ 訃報：虫界速報 21: 3(1951)，北沢右三：新村太朗君をしのびて，新昆虫 4(6): 31(1951)，中井猛之進他：訃と弔辞，自然科学と博物館 18(7): 19(1951)，訃報：新村太朗氏，応用昆虫 7(2): 96(1951)。

西村真次 (1879~1943)

① 明治12年3月久三の長男として宇治山田市に生る。厚生尋常小学校卒，明治38年早稲田大学文学部英文科卒，日露戦役に際し軽重兵として満洲に出征，除隊後一時朝日新聞社に勤務後博文館に入社，雑誌「学生」の編集主任として活躍，大正7年早稲田大学史学科講師，昭和3年より史学科教務主任として早大史学科の基礎を作る，同7年文学博士，同

10年教授，文化史を専攻，酔夢と号す。

昭和18年5月27日歿 享年64才。

② 鳴く虫の研究 (参文社, 1907), 蟬の研究 (博文館, 1909), 鳴く虫の観察 (弥田書房, 1924).

③ 経歴資料は大人名事典 (平凡社) 等による。

<sup>ニシ</sup> <sup>ヤ</sup>  
西谷 順一郎 (1890~1961)

① 明治23年1月6日青森県黒石町に生る。明治33年黒石小学校4年過程修了，同37年黒石小学校高等科4年卒，同年南津軽郡農事講習所に入学，同39年南津軽郡立農学校第2学年へ編入，同41年同校3年過程卒，明治42年名和昆虫研究所附属農学校別科修了，大正2年青森県立農事試験場勤務，同6年9月退職，同年りんご園を経営，同9年南津軽郡役所勤務，同12年郡農会技師を退職。

昭和36年3月11日歿 享年71才。

② りんごはばち *Hylotoma mali* Mats. に就て，昆虫世界 14 (152) : 141~142 (1910)，青森県に於ける苹果の害虫たる綿虫・蚜虫・牡蠣介殻の発生史について，名和靖遷暦記念論文集 p. 61~70 (1917)。その他1909年より1930年にかけてりんご害虫に関するきわめて多くの論文を発表している。

③ 斉藤康司・山田三智穂編：西谷順一郎伝，青森県りんご育種同好会 123 pp. (1962)，その他青森県りんご発達史第4巻 (青森県) (1963) 参照。経歴資料は青森県りんご試験場津川力技師の提供による。

<sup>ニトベ</sup> <sup>イナ</sup> <sup>オ</sup>  
新渡戸 稲雄 (1883~1915) (写真 Pl. 3)

① 明治16年6月11日青森県上北郡三本木に良助長男として生る。(母わかには三本木開拓の祖新渡戸伝の娘で新渡戸稲造博士 (1862~1933) は稲雄の従兄に当る) 三本木尋常高等小学校卒，明治30年5月三本木模範伝習所を経て，同32年4月青森県立農学校農科入学 (後官制変更により校名畜産学校に変わる，同35年3月青森県立畜産学校農科卒 (第1回)，同4月名和昆虫研究所第12回全国害虫駆除講習会修業，同35年青森県農事試験場技手，害虫係，同39年10月台湾総督府農事試験場に転任，昆虫部勤務，大正3年殖産局及び警察官・獄官練習所講師を兼務，同4年新高山採集旅行中アミーバ赤痢 (腸チフスという説もある) にかかり腎臓病を併発，大阪の病院に入院したが回復せず，

大正4年6月3日歿 享年31才。

② 明治39年1月青森県師範学校教諭木梨正太郎，畜産学校教諭沢山繁太郎と共に青森県昆虫学会を創立し「青森昆虫学会々報」を発行す，これは地域昆虫同好会誌の最初のものという。螢狩の唱三種，昆虫世界 5 (49) : 352~353 (1901)，林檎樹に発生する虫類，同上 6 (62) : 428~429 (1902)，昆虫界の現象，青森県昆虫学会々報 1 (1906)，青森県に於ける苹果樹害虫 (1~4)，昆虫世界 10 (101) : 19~23, (103) : 97~103, (104) : 141~144, (105) : 187~193 (1906)，リンゴオオザウムシ に就て，同上 10 (107) : 275~277 (1906)，ニトベエダシヤクについて，同上 11 (114) : 54~56 (1907)，台湾に於ける綿吹介殻虫，同上 14

(155) : 299~301 (1910), 本島に於けるベエタリア瓢虫と其の応用, 台湾農事報 6 (1910), 過去 20 年間に於ける台湾農学の進歩, 「虫害」同上, 100 : 179~184 (1916), 柑橘害虫調査報告, 台湾農事試験場出版 89 (1916). ③の論文目録参照.

③ 計報, 台湾農事報 103 (1915), 昆虫世界 19 (214) : 264 (1915), 桑名伊之吉 : 新渡戸稲雄君の訃 (肖像写真付), 病虫害雑誌 2 (7) : 巻頭及び 86 (1915), ——: 故新渡戸稲雄氏が生前に公にせる印刷物, 台湾博物学会々報 11 (54) : 114~115 (1921), 青森県りんご発達史 (明治期りんご病虫害発生防除史) 4 : 103~104 (1963) (この資料では新渡戸稲<sup>男</sup>とありまた, 文献誌名に誤りがあるので注意のこと), 経歴資料は青森県農業試験場病理昆虫科香川寛技師の提供による. ニトベエダジャク, ニトベシヤチホコ, ニトベキバチ, ニトベナガハナアブ, ニトベベッコウハナアブ, ニトベシロアリ等氏の発見に関わる昆虫が多い. なお昆虫世界 8 (87) : 480~481 (1904) に青森県昆虫学会会則あり.

#### 二 宮 元 孝 (1891~1928)

① 明治 24 年 12 月 11 日神奈川県中郡国府村に生る. 国府尋常高等小学校卒, 明治 42 年 3 月神奈川県中郡農学校卒, 大正 4 年 3 月盛岡高等農林学校農学科卒, 岩手県東磐井郡蚕業学校教諭, 同 12 年 1 月志願兵として入隊, 同 8 年歩兵少尉, 同 6 年農商務技手, 同 14 年植物検査官, 昭和 2 年 5 月農林技師.

昭和 3 年 3 月 7 日流感にて歿 享年 36 才.

② 比律賓に於ける稲の害虫等に就て (訳), 病虫害雑誌 9 (3) : 140~143 (1922), 夜盗虫の实用的駆除予防法, 同上 12 (2) : 81~91 (1925) その他.

③ 同桑名伊之吉 : 二宮元孝君の遠逝を悼む, 昆虫世界 32 (368) : 巻頭 (1928), ——: 故二宮元孝君, 病虫害雑誌 15 (4) : 口絵写真裏面略歴 (1928).

#### ネ

#### ネリキキゾウ 練木喜三 (1850~1910) (写真 Pl. 1)

① 嘉永 3 年 11 月 1 日 (1850 年 12 月 4 日) 埼玉県南埼玉郡柏壁町に生る. 幕末に江戸に出て, 初め平田鉄胤 (~1882) に国学を学び, 後司馬盈之 (1838~1879, 号凌海, 医学校教授) の私塾春風社で独語を習得, 明治のはじめ医学者三宅秀 (1848~1938, 東大名譽教授, 医博) の門人となり医学を学ぶ, 明治 6 年東京医学校に独人 Hilgendorf, F. M. (1839~1904, 動物学者で日本の昆虫を多数採集せし人) が来朝するや同氏の家に寄寓して動物学, 昆虫学を学び, しばしば同氏に随行して各地に採集を行ない医学校助手となる. 同 10 年内務省勤農局員を兼ね内藤新宿農事試験場で害虫研究と質疑応答の業務を担当す. 同 12 年 11 月駒場農学校 (動物学) 助教, 同 13 年駒場農学校植物病理試験場担当兼同学校講師, 同 14 年 6 月農務局御用掛に転任, 同 6 月~9 月小野孫三郎 (旧姓中村, 別項), 鳴門義次 (鳴門義民の項参照), 松下基之 (経歴不明) と共に北海道蝗害調査に出張, 同 16 年 8 月~9 月秋山元 (別項) と共に青森・函館両県へ虫害調査のため出張, 同 17 年蚕病試験場所長兼務, 同 18 年医科大学を辞す (高橋の文献による), 同 8 月農務局御用掛として宮城県下虫害調査に出張, 同 29 年蚕業講習所長, 同 31 年退官大日本蚕絲会理事, 宮城県養蚕顧問.



明治43年3月22日歿 享年61才。

② 第1回内国博覧会出品(害虫図)説明(駒場農学校, 1880), 同第2回害虫図解説(同1881), 螟虫図解(有隣堂, 1883), 苞虫図解(有隣堂, 1883), 応用動物学(1883), 蚕桑生理問答(田島武平と共著, 1884), 蚕事提要(1891), 蚕葉ヲ与ヘタル蚕兒ニ白殭蚕ノ微毒ヲ接種シ其感染如何ヲ試ミタル成績, 同白殭蚕伝染試験, (松永伍作と共著, 農商工公報附録3: 22~29 (1887). 蚕桑講筈筆記(1888), 蚕ノ体温ニ就テ, 農学会報 6: 74~77 (1889), 養蚕演術筆記(1891), 蚕教(1901), 応用蚕桑問答(1909), 延喜時代より明治に至る蚕の種類(1~5), 蚕業新報 17(200): 94~99, (201): 46~50, (202): 54~60 (以上1909), (203): 39~46, (204): 39~47(1910), 北海道飛蝗実地視察復命書, 農務顛末 5: 236~259 (1957), 青森函館両県虫害調査復命書, 同上: 176~178(1957).

③ 竹沢章: 嗚呼蚕界の功労者練木喜三氏, 蚕業新報 18 (205): 1~5 (口絵肖像写真付)(1910), 一: 昆虫学に関係ある大家の略歴, 練木喜三氏, 昆虫世界 14 (154): 237~241(1910), 一故練木喜三氏北海道蝗害調査時の話, 大日本農会報告 66: 7 (1887), 高橋奨: 日本農業昆虫学発達史, 病虫害雑誌 8 (1) 卷末附録 1~4 (1921), 農務局編: 明治前期勤業事蹟輯録(上・下)(大日本農会, 1939), 農林省: 農務顛末卷5 虫害: 1~429(1957), 安藤円秀編: 駒場農学校等史料(東京大学出版, 1966), 上野益三: 動植物学准講師練木喜三申報, 日本科学技術史大系 15: 68 (東京大学第2年報(1883): 188 の転載)(1965).

ノ

野口徳三(1897~1965)

① 明治30年5月28日茨城県土浦で仙二男として生る。大正2年3月県立石岡農学校卒, 同5年12月農商務省園芸試験場研究生修業, 同7年7月文部省農業科教員試験検定合格, 同8年4月奈良県添上郡農業技手, 同10年1月愛媛県立新居農学校教諭, 同12年4月静岡県産業技手, 農事試験場, 同梨害虫研究所勤務, 昭和4年8月静岡県柑橘病虫害研究所主任, 同18年海軍技師, 同19年トラック島海軍々需部勤務, 同21年3月地方技師, 静岡県勤務, 同22年9月庵原郡農村工業化学研究所長, 同年11月農業専門技術員, 同年12月農学博士, 同25年1月茨城県農林部農業改良課技術吏員, 同38年3月中外製薬株式会社常勤嘱託。

昭和40年2月10日出勤途上交通事故により水戸市で歿 享年67才。

② 殺虫ニコチン剤(数井正俊と共著)(中央園芸会, 1924), 大正14年度梨害虫に関する調査静岡県農事試験場(1926), 矢ノ根介殻虫調査報告(I~III), 同上臨時報告2(1928), 同11(1931), 同16(1931), 同23(1932), 矢ノ根介殻虫研究15年を語る, 病虫害雑誌 28(4)~28(10)(1941), 29(1)~29(2)(1942) その他1924年から1959年にかけて梨害虫, 柑橘害虫, 農薬に関するきわめて多くの報文があるほか農用薬剤学(内田郁太と共著 明文堂, 1941, 1949), 柑橘害虫駆除法(1959), その他の著書がある, 機械油乳剤の練混法, 松脂合剤の新調製法の発明などの功績で昭和18年科学協会から鈴木梅太郎賞を受けられ, また, 昭和36年には農業技術賞を受賞された。

③ 白浜賢一: 野口徳三博士, 関東々山病虫害研究会年報 12: 1 (略歴肖像写真付)。

野平 <sup>アキオ</sup> 安芸雄 (1892~1966) (写真 Pl. 4)

① 明治25年10月3日大阪市北区曾根崎に生る。大阪市北野中学校，京都第3高等学校を経て，大正8年京都帝国大学医学部卒，同9年11月中華民国青島に渡り同地で開業，同13年帰国，福岡県小倉市記念病院勤務，同15年京都帝国大学病院皮膚科研究生となり，昭和3年医学博士，同4年新潟県長岡市赤十字病院皮膚科医長，同22年越佐昆虫同好会を創立同会誌を発行，会長となる，また，長岡市立科学博物館創設に参画し，初代昆虫部長となる，同26年小倉記念病院に転任，同34年退職，京都市宇治市広野町に在住。

昭和41年10月22日歿 享年74才。

② スズメガ科と花とに就きて，博物之友 9 (59) : 28 (1909)，伊吹山の蝶類，同上 9 (61) : 61 (1909)，京阪地方の蜻蛉目録，昆虫学雑誌 1 (1) : 35~(1915)，日本産鳥羽蛾科の研究 (1~2)，同上 2 (1) : 37 (1916)—3 (2) : 61~77 (1917)，*Agdistis* 属の鳥羽蛾に就て，同上 4 (1) : 24~(1919)，フジミドリシジミに就て，同上 3 (3/4) : 152~(1919)，本邦産 *Zephyrus* 雑記，同上 3 (3/4) : 207 (1919)，山形地方蝶類目録，昆虫界 5 (44) : 626~(1937)，越後のギフテフ (1~17)，昆虫世界 47 (545)~(556) (1943)，48 (557)~(561) (1944)，ギフテフ幼虫の生態断片二・三，新昆虫 3 (3) : 76~(1950)，粉蝶科の翅脈，昆虫 29 (2) : 111~122 (1961) このほか1909年から1961年(途中1920~1936は殆んど発表がない)この間に多数の報文があるほか「鱗翅類翅脈の研究」を1947~1951年にかけ自費出版する。

③ 野平安芸雄：在校時の回顧，*Life* 10 : 2 (1953，大阪北野中学校発行)，同：わが10代を語る，新昆虫 10 (4) : 30~31 (1957)，江崎悌三：京都昆虫学雑誌発刊当時の秘話，関西昆虫雑誌 1 (1) : 1~13 (1933)，荻野誠作：野平先生を想う，越佐昆虫同好会復刊 1 (2) : 1 (1967) (表紙に肖像写真を付す)，松井松太郎：日本産蝶類発見者物語 (5)，採集と飼育 29 (5) : 153~161 (1967)。

野村 彦太郎 (1861~?)

① 万延元年12月4日\*(1861年1月14日)石川県金沢市に彦次の息として生る。明治13年7月駒場農学校植物病理科へ入学，同14年3月同科解散のため退学，同6月農務局雇，駒場農学校勤務，同6月直ちに北海道蝗害調査に陸産課練木喜三(別項)とともに出張防除に従事 同16年3月蝗害調査のため再渡道し秋帰京す。同12月農商務省農務局御用掛同18年退職，同25年帝国大学理科大学選科に入学，同29年7月修業，蚕業講習所技手，同35年5月農事試験場病理部技手，兼蚕業講習所技手，同36年伊太利 *Pavia* 大学に3年半留学，同大学名誉講師，帰朝後蚕業講習所講師を大正末年まで勤む。

歿年月日不明

② 動物音声考，動物学雑誌 1~4巻に連載(鳴く虫，蟬の発音研究を含む) (1891)，蚕ノ蠟虫ニ就テ，大日本蚕絲会報 10 (110) : 4~7 (1901)，介殼虫の猖紅病，農事試験場報告 18 : 105~113 (1901)，桑樹ノ甘露ニ就テ，大日本蚕絲会報 11 (119) : 25~28 (1902)，伊国ノ介殼虫ハ日本ノ輸入ニ係ルカ，蚕業新報 21 (245) : 23 (1912)，上古の養蚕者を論じて蚕の眠数に論及す，蚕学新報 21 (246) : 24~27 (1913)，植物病理学の揺籃期(北海道蝗害調

査の回顧を含む) 菌類 1 (4/3) : 114~(1931).

③ 日野巖: 植物病学発達史: 149~151 (肖像写真及筆蹟付)(1949).

\* 註) 生年月日は農業技術研究所職歴によるも日野: 植物病学発達史では安政6年4月2日生となつている.

## ハ

橋本 左五郎 (1866~1952) (写真 pl. 2)

① 慶応2年9月岡山の人芳太郎2男に生る. 明治22年7月札幌農学校卒(第8期), 卒業後同校教授, 東北帝国大学農科大学教授, 同32年牧畜及畜産製造学研究のためドイツに留学, 北海道帝国大学教授(畜産学)となり, 大正8年12月朝鮮勸業模範場長兼水原農林専門学校校長, 大正12年3月退官, 北海道大学名誉教授, 北海道農会副会長.

昭和27年9月25日病歿 享年86才.

② 綿虫駆除法試験結果, 北海之殖産 7 (1890), 林檎害虫綿虫並びに駆除法, 同 16 : 7~13 (1891) (この論文に石油乳剤の訳語を初めて使用), 亜麻害虫調査成績報告, 同 18 : 1~12 (1892), 浮塵子, 同 40 : 14~17 (1893), 根切虫と除虫菊, 同 56 : 67~72 (1894) 札幌農学校で明治30年頃まで昆虫学の講座を担当, 松村松年の昆虫学の師の一人. 畜産製造殊に乳製品の研究で名高い.

③ 朝鮮総督府農事試験場25周年記念誌上巻(巻頭に肖像写真付)(1931) 青森県りんご発達史4 (1963) に綿虫の上掲論文を復刻してある(p. 31~39). 経歴資料は桑山覚博士の御好意による.

ハタケヤマ ヒサシゲ  
畠山 久重 (1880~1959)

① 明治13年1月7日富山県の人久左衛門長男として東京に生れる. 富山中学校卒, 富山県高岡市高等小学校訓導(英語科), 後上京小石川植物園で植物学を学び, 中等教員検定試験合格, 明治36年4月富山県立富山中学校教諭, 同37年4月新潟県立新発田中学校教諭, 同39年より新潟県博物調査会員として岩船・北, 東蒲原の地区の昆虫動植物調査に従う, 同44年4月同上を退職し上京, 海城中学校, 大成中学校, 京北中学校, 京北実業学校, 早稲田中学校, 芝中学校等の講師を歴任一時科学博物館, 中央气象台嘱託, また, それらのかたわら大正10年6月から昭和16年4月まで科学雑誌「理学界」の編集主任, 戦時中より戦後にかけて都立忍ヶ岡高等女学校, 都立第6中学校講師を歴任す, 昭和26年3月都立第7高等女学校を退職し自適の生活に入る.

昭和34年2月27日歿 享年79才.

② 北蒲原郡昆虫報告 I~II (1908~1909), 筑波山の動物遺稿集「あしあと」: 121~128 (1959) のほか多数の生物学, 理科教育に関する報文があり, 動物の分類と実験(中興館, 1925), 動物界の智囊(松山亮蔵と共著)(中興館, 1925), 動物の発生と環境(中興館, 1927)などの多数の著書がある.

③ 畠山久重遺稿「あしあと」(長男久尚(気象庁長官, 理博)次男久幸発行, 1959), ハタケヤマヒゲボソムシヒキ, ハタケヤマアブの松村博士の type 標本のほか新潟時代採集せ

られた標本の一部が北海道大学農学部昆虫学教室に蔵せられている。なお、ザトウムシの一種に *Oligophus hatakeyamai* Kishida がある。また洞窟動物の開拓者でもあり秩父影森石灰洞で発見せられたカマドウマの新種にホラズミウマがある（遺稿集 p. 141~146 洞窟動物）。氏の教へ子中の昆虫学者には村山醸造（元山口大学教授，林博），鳥居酉蔵（九州大学教授，農博，理博）氏等がある。

#### 服部 徹 (?~1908)

① 土佐中新町の人，桜東園主人後に凶南と号す。明治13年上京，学農社（東京麻布）卒，明治20年小笠原島，ボルカノ島などを巡り動植物の調査をなし，21年4月より7月まで鳥島に滞在鳥類の調査をなす，同24年伊豆七島調査後南洋スマトラの蕃地に入つて動植物を調査，明治41年5月大阪日報の記者として再び南洋探検の壮図に出で台湾を1周調査の後アモイを経香港より船でジャワに向う途中過つて河舫より墜死す。

明治41年5月24日歿。

② 田圃害虫新説（有隣堂，1888），小笠原島物産略記（1888），鳥島信天翁の話，動物学雑誌 1(12) : 405~411(1889)。

③ 大日本人名辞書 3 : 2104 及び著書の奥付等による。

#### ハブミチヤ 羽生道也 (?~1904)

① 鹿児島県熊毛郡北種子村の人，生年月日不明。明治29年3月東京美術学校卒，同年1月1年志願兵として入隊，除隊後陸軍少尉，同32年佐賀県師範学校教諭，後農商務省農事試験場昆虫部勤務，同37年日露戦争に出征第6師団第45聯隊付として従軍，

明治37年8月30日清国盛京省マエトウンで戦死，享年29才。戦功により陸軍中尉に進級。

② 日本稲作害虫図，同説明書（益農商会，1902），重要農作物害虫図（益農商会，1905）のほか，稲作害虫駆除図，日本益虫図，日本桑樹図，日本茶樹害虫図の著ありという。

③ 訃報：昆虫世界 19(209) : 44(1915)，経歴は大日本人名辞書 3 : 2111~2112(1937) による。（本書にはハニウドウヤの仮名をふつてあるが②の著書奥付にあるハブミチヤの読み方をとる。）

#### ハブツカンキチ 土生津勘吉 (1878~1914)

① 明治11年2月埼玉県北葛飾郡田宮村に生る。東京高等農学卒，明治35年東京帝国大学農科大学動物学教室雇，同38年雇を免ぜられ，同40年同教室助手，同44年退職後群馬県農事試験場技手，後に神奈川県農事試験場技師を経て大正2年植物検査官補，同3年長崎植物検査所支所長（初代）。

大正3年12月歿 享年36才。

② 明治41年3月より日本昆虫学会々報（第1次）の会計事務を同44年まで教室助手の傍ら執務す。

③ 江崎悌三：日本の現代昆虫学略史，昆虫 25(4) : 151~196（特に p. 176），佐々木忠次郎博士（伝記） : 70~71(1940)。

## 浜 次 雄 (1907~1939)

① 明治40年4月8日長野県諏訪郡湊村に松衛2男として生る。大正14年3月県立諏訪中学卒，昭和4年3月第1高等学校理科甲類卒，昭和9年3月東京帝国大学農学部農学科卒，同4月同大学副手，同11年6月農林省農事試験場技手昆虫部勤務。

昭和14年10月7日急性肺カタルで歿 享年32才。

② 家蚕卵の水素イオン濃度，応用動物学雑誌 8:318~327(1936)，絶食蚕児の生理作用と温度並に湿度との関係，同上 8:9~19, 72~86(1936)(本論文に依り昭和12年4月応用動物学会賞を受く) 苗代期に於ける二化螟虫卵寄生蜂ズキムシアカタマゴバチの寄生率に就いて(5報~6報)(弥富喜三と共著)，同上，9:166~168(1937)，10:110~112(1938)，コナマダラメイガ卵及びズキムシアカタマゴバチの冷蔵に就て(予報~2報)，同上 9:169~172(1937)，同 10:112~114(1938)，本会幹事として20周年記念大会並びに行事に活躍された。

③ ——：浜次雄氏を憶ふ，昆虫 13(5/6):272(1939) 計報：応用昆虫 2(6):266(1939) 略歴は農業技術研究所職歴による。

林 <sup>ケイ</sup> 慶 (1914~1962)

① 大正3年11月26日宇右衛門2男として東京に生る(生家は代々下谷黒門町で生花・盆石・茶道具商を営む)。昭和2年3月東京高等師範学校附属小学校卒，同附属中学校を経て，同14年3月東京帝国大学農学部農芸化学科卒，戦時中熊本県八代市の工場に勤務するも病を得て退職，富山県鳳至郡宇出津に疎開，20年11月帰京爾來闘病生活を続けつつ昆虫飼育研究に没頭す。別名慶二郎の名で発表された報文も多い。

昭和37年10月21日歿 享年47才。

② 沖縄本島の蝶類，虫の世界 3(11/12):203~204(1940)，ミドリヘウモンの産卵習性(新村太朗と共著)，Zephyrus 9(4):294~(1947)，四国よりシルヴィアアシジミの記録，昆虫学評論 5(1):19(1950)，蝶界憂感，新昆虫 7(13):1(1954)，Ona new subspecies of *Spindasis takanonis* Matsumura from Northern Honshu, Japan, 蝶と蛾 4(4):30(1955)，ゼフィルス写真集解説，新昆虫 9(8):1~12(1956)，日本蝶類解説(日新書院，1951)，学生版幼虫図鑑(1951)，日本幼虫図鑑(1959)(共に蝶幼虫を分担執筆)，日本産蝶類にあらわれた *Homoesis* の数例，蝶と蛾 12(4):90~107(1961)。

③ 林慶先生追悼特集：Insect Magazine 57:1~38(1962) 口絵写真多数，御挨拶(林つる(母堂)，林八郎(令弟)，林八郎：宇出津のことなど(2~3)，磐瀬太郎：林慶氏の思い出(3~6)，朝比奈正二郎：林慶氏を悼む(7~8)，磐瀬太郎：志賀高原のゼフィルス(9)，黒沢良彦：林さんの思い出(10~12)，林先生をしのんで(座談会)五十嵐邁他7氏(15~24)，五十嵐邁・藤岡知夫：林先生なき後の京浜の虫屋に残された課題(25~31)，磐瀬太郎・築山洋：林慶氏の書かれたもの(32~38)。

林 <sup>ジュン</sup> 純之助(旧姓熊沢)(1898~1966)

① 明治 31 年 8 月 31 日九衛門 3 男として三重県四日市に生る。大正 5 年 3 月三重県富田中学校卒，同 13 年 3 月慶応義塾大学経済学部卒，同年東洋鋼管株式会社を設立，日本ステンレス株式会社取締役，などを経て，油脂製造業会専務理事，熊沢製油株式会社社長を歴任，かたわら東海地区植物検疫協会副会長，中部植物検疫協会連合会理事を兼務。昭和 34 年製油業界での功勞により黄綬褒賞を受く。

昭和 41 年 5 月 26 日歿 享年 67 才。

② 大正 2 年四日市昆虫研究会に入会，山内基太郎（別項）氏に昆虫の指導を受け，爾後，三輪勇四郎博士（現鈴鹿短大教授）等と昆虫採集に熱中す。大正 9 年頃名和靖（別項）の紹介で三宅恒方（別項），丸毛信勝両博士の指導を受け，主に鱗翅類を研究す。当時「高山蝶に」ついて及び「浅間八ヶ岳登山紀行」（山内・三輪両氏との採集旅行記）を慶大山岳年報に発表。

③ 三輪勇四郎：研究の動機，新昆虫 11(13)：20~21(1958)，中條道夫・水戸野武夫編：徹魂録（三輪博士還暦記念随筆集：7(1963)。本経歴は令息林長閑博士の提供資料による。なお，熊沢誠義・隆義の御兄弟は親戚に当り，両氏が虫好きになられたのも純之助氏の影響があつたという。

原 <sup>カネ スケ</sup> 撰 祐 (1885~1962)

① 明治 18 年 1 月 9 日岐阜県恵那郡川上村で吉太郎長男として生る。明治 33 年同村小学校卒，同年岐阜県農学校入学，同 34 年退学，同 37 年 11 月名和昆虫研究所害虫駆除講習会修業後同所に入入りして昆虫学を学ぶ，同 40 年 4 月名和昆虫研究所付属農学校入学同 10 月退学，上京し東京帝国大学農科大学無給介補，同 43 年 6 月同助手，大正 7 年 9 月静岡県農会技師兼静岡県農業教員養成所教授嘱託，昭和 5 年岐阜に帰り伴野農薬製造所技師，日本菌類学会を創立「菌類」を発行，同 30 年本邦菌類に対する貢献で日本植物病理学会賞を受く  
昭和 37 年 8 月 5 日歿 享年 77 才。

② 蝗を斃す菌，昆虫世界 8(86)：437(1904)，諸種の昆虫に寄生する冬虫夏草に就て，同上 11(113)：23~24(1907)，虫生菌に就て，同上 15(172)：510(1961)—17(193)：381~383(1913)，蟬茸の話，同上 25(286)：18(1921)，キンケムシの疾病に就て，蚕業所報 32(374)：297~301(1924)，病害発生史，病虫害雑誌 19(7)：503~509(1932)，冬虫夏草ケラタケに就て（大隅敏夫と共著）植物及動物 5(9)：1741~1743(1932)のほか植物病理学菌学に関する多数の報文があり実験活用病虫害宝典(1926)，作物の病害と虫害(1933)，など多数の著書がある。

③ 日野巖：原撰祐翁，日本植物病理学会報 28(5) 巻頭(1963)，同：植物病理学発達史：298(1949)，伊藤一雄：日本に於ける樹病害発達の展望(3)，林業試験場報告 193：304~305(1966)（肖像写真付）。

## ヒ

平 山 修次郎(1887~1954) (写真 Pl. 4)

① 明治 20 年 7 月 18 日京都市中京区神泉苑町に生る。京都府立第 1 中学校卒，上京後神

田三省堂勤務，明治 40 年 6 月松村松年（別項）と台湾へ採集旅行，大正元年昆虫関係用具製作所を東京渋谷に開く，昭和 5 年 3 月井の頭公園隣地に平山博物館を開設，同 9 年 7, 8 月台湾に採集旅行，同 26 年より歿年まで三鷹市議員後議長となる。

昭和 29 年 11 月 7 日肝臓癌で歿 享年 69 才。

② 原色千種昆虫図譜（三省堂，1933）原色続千種昆虫図譜（同，1937），原色蝶類図譜（同，1939），原色甲虫図譜（同，1940）の著書のほか多くの報文がある。昭和 11 年平山博物館虫同好会を組織し「虫の世界」を創刊す。

③ 計報：虫界速報 33：12（1954），ヒラヤマシジシ，ヒラヤマミスジ，ヒラヤマアミメケナガミバエ，ヒラヤマミズアブなど多くの昆虫に献名されている。

経歴資料は平山君子氏（未亡人）の提供による。

## フ

### 深谷 徴（1888～1916）

① 明治 21 年 7 月茨城県真壁郡柴尾村に生る。明治 38 年 3 月茨城農学校卒，同 39 年 11 月農商務省農事試験場雇として入場，大正 3 年 9 月植物検査所創設に当り植物検査官補となり，神戸支所勤務。

大正 5 年 1 月 11 日歿 享年 33 才。

② 貝殻虫採集法，昆虫世界 10（3）：452～454（1906），介殻虫研究の一端，昆虫学雑誌 2（3）：155～158（1907），介殻虫（1～2），昆虫世界 11（119）：276～278（120）：319～321（1907），介殻虫の研究（1～2），博物之友 7（46）：317～321，（47）：360～363（1907），日本介殻虫目録（1～2），昆虫世界 14（153）：197～199，（154）：244～249（1910），実用園芸作物害虫駆除法（日本園芸研究会刊，1914），その他 1916 年にかけて多数の報告がある。

③ ト蔵梅之丞：深谷徴君を弔ふ（付肖像写真）病虫害雑誌 3（3）：1～2（1916）。

### 福田 仁郎（1911～1962）

① 明治 44 年 6 月 9 日和歌山県の人俊 2 男として生る。大正 13 年 3 月滋賀県彦根尋常高等小学校卒，昭和 8 年 3 月富山高等学校理乙卒，同 11 年 4 月農林省農事試験場助手，同 12 月同上退職，現役兵として輜重兵第 4 聯隊に入隊，同 12 年 1 月召集解除，同 15 年 4 月農林省農事試験場技手，同 18 年 2 月台湾総督府農事試験場技師，鳳山熱帯園芸試験場支所勤務，同 20 年 11 月中国政府に留用せらる，同 21 年 12 月留用解除，同 22 年 5 月「フタテンミドリヒメヨコバイの生態並に防除に関する研究」で農学博士，同 22 年 6 月農林省園芸試験場技官，同 12 月同東海支場勤務，同 25 年 4 月農林省東海近畿農業試験場園芸部勤務，同 26 年 5 月「矢ノ根介殻虫に対する硫酸亜鉛加用石灰硫黄合剤の効果」で日本農学賞受賞，同 35 年 5 月農林省振興局研究部研究企画官併任，同 36 年 4 月研究室長，同 7 月農業技術研究所園芸部果樹科果樹害虫発生予察研究室長，同 37 年 4 月農林省園芸試験場果樹第 2 部果樹害虫発生予察研究室長。

昭和 37 年 5 月 18 日東京世田ヶ谷の自宅に歿 享年 51 才。

- ② Notes on the Oxygen consumption of the developing silkworm eggs treated with various methods of artificial hatching, Proc. Imp. Acad. Tokyo 12 : 269~271 (1936), 二化螟虫発生予察の指標動物としてのフタオビコヤガ, 農林省農試報告 53 : 8~ (1942), 矢ノ根介殼虫に対する硫酸亜鉛加用石灰硫黄合剤の効果 (1~3) (吉田泉と共著), 園芸学会雑誌 17 : 43~53 (1948), 17 : 166~175 (1949), 19 : 81~91 (1950), フタテンミドリヒメヨコバイの生態並に防除に関する研究 I, 東海近畿農業試験場研究報告園芸部 1 : 159~211 (1952), ヤノネカイガラムシに対する柑橘の抵抗性に関する研究 I, 同上 1 : 128~141, 同上 II, 同上 2 : 150~159 (惟村光宣と共著) (1954), 同上 III, 同上 3 : 109~117 (惟村光宣と共著) (1956), 最新防除果樹害虫編 (養賢堂, 1961), 他論著が多数ある。
- ③ 弥富喜三: 福田仁郎博士の急逝をいたむ, 日本応用動物昆虫学会誌 6 (2) : 178 (1962), 梶浦実: 福田仁郎博士果樹害虫研究集録 (養賢堂, 1964), 巻頭肖像写真略歴, 論文著書目録, 主論文集録のほか巻末 (p. 284~295) に故福田仁郎博士を顧みてと題し浅見興七氏ら 15 氏の追悼文を附す。

藤 卷 <sup>ユキオ</sup> 雪 生 (1883~1949)

- ① 明治 16 年 1 月 30 日長野県北安曇郡常磐村で弥藤太の 7 男として生る。明治 34 年 3 月県立松本中学校卒, 同 38 年 7 月東京帝国大学農科大学農業実科卒, 同 7 月群馬県技手, 農務課勤務, 同 40 年 6 月農商務省技手, 農産課勤務, 大正 3 年 10 月兼植物検査官補, 同 4 年 7 月蚕業試験技手兼農商務技手兼植物検査官補, 同 7 年 7 月シベリアに出張, 同 10 月陸軍省御用掛, 同 8 年 4 月兼植物検査官, 同 9 年陸軍省を辞す, 同 10 年農商務技師兼植物検査官, 農産課勤務, 昭和 2 年 4 月 4 月依願兼官を免ぜらる, 同 5 年 5 月欧米各国へ出張, 同 6 年 2 月帰国, 同 13 年 11 月満洲国関東州および中華民国へ出張, 同 14 年 9 月兼農事試験場技師, 同 14 年退職, 同 14 年全国酒精原料株式会社常務取締役, 同 16 年 8 月日本甘藷馬鈴薯株式会社常務取締役, 後同社解散し, 食糧配給公団藪類局長。

昭和 24 年 5 月 14 日歿 享年 65 才。

- ② 欧米各国における園芸および病虫害防除奨励施設の概要 (1~2), 農業及園芸 8 (3) : 817~(4) : 1051~(1933), 1909 年から 1938 年にかけて病虫害行政に関する報文がある。
- ③ 石井悌: 藤卷雪生氏の逝去を悼む, 応用昆虫 5 (2) : 85 (1949), 平野伊一: 花輪に覆われた藤卷雪生氏, 大阪植物防疫所研修資料 3 (33) : 324 (1954), 経歴資料は農業技術研究所の職歴ならびに長野県勢総覧下巻 (1928) による。

古 市 与 一 郎 (1828~1898)

- ① 文政 11 年 2 月 10 日 (1828 年 3 月 25 日) 伊勢国河曲郡十宮村に生る。幼年の頃から農事を好み父に従って農業に従事, 安政 5 年十宮村年寄役を拜命, 文久元年旧神戸藩本多氏の命により同村墨正を拜命, 元治元年神戸領惣々勘定役を兼務, 明治 5 年廃藩置県に際し十宮, 高岡両村戸長, 同年 11 月県区取締を兼務, 同 7 年 8 月大小区改正により第 5 大区 2 の小区副戸長, 同 8 年 11 月前職を辞し同 9 年 1 月上京 49 才で麻布学農社入学農学を修む, 同 11 年修業, 同年 3 月神奈川県第 2 課雇, 数ヶ月後実督相続のため退職帰国, 同年三重県



第2課御用掛として害虫調査に従事，同12年準判任，同7月等外1等出仕（判任）に叙さる，同15年病のため退職帰村，同17年河西郡神戸に農談会を創設，同20年沢野淳（農事試験場初代場長）につき農事を修む（60才），同年10月河西郡農事巡回教師，同23年大日本農会特別会員。

明治31年歿 享年70才。

- ② 稲虫防除俚謳（1886，自刊，昭和10年（1935）日本昆虫学会複製），与一流稲作法，帝国農家一致協会（1899，遺稿出版）。
- ③ 村田藤七：明治年間における螟虫に関する研究および駆除予防法の変遷（古市氏肖像写真，著書表紙写真付）昆虫9（4）：188～203（1935），「稲虫防除俚謳」複製について，昆虫9（5）：260 会報欄（本会は前記村田氏論文発表を機に古市家蔵の版木を借用，村田藤七（別項）および三重県農事試験場前田孝二両氏の尽力により同書を100部手摺で複製，本会より1部10銭で希望者に頒布す）。経歴は古市氏自筆履歴書による。

## ホ

ホウザンシ  
朴 沢 三 二 (1885～1947)

① 明治18年8月19日宮城県仙台市に生る。仙台第二中学校卒，明治40年7月年第四高等学校卒，同43年7月東京帝国大学理科大学動物学科卒，引続き大学院に入り，大正3年1月同大学助手，同6年11月植物検査官，同8年石灰海綿に関する論文で理学博士，同10年5月東北大学助教授，同6月動物学研究のため英仏独米に留学，同12年3月教授，生物学第2講座担当，同10年4月理学部生物学教室主任，同12年7月財団法人朴沢女学園理事長，同9月同校長，同13年浅虫臨海実験所長，同14年1月仙台市動物園長，同16年4月学術研究会議会員。

昭和22年7月8日歿 享年62才。

- ② 蟬の特殊なる発音器，動物学雑誌21（253）：490～492（1909），蟬の発音器，同上23（277）：599～616，（278）：667～676（1911），白蟻に就て，同上23（267）：41～43（1911），台湾産白蟻性甲虫，同上26（308）：291～299（1914），日本産白蟻の種名及其分布，同上27（320）：349～351（1915），Revision of the Japanese Termites, Journ. Coll. Agr. Sci. Imp. Univ. Tokyo 35（7）（1915），蟬の塔に就て，動物学雑誌28（338）：511～512（1916）。
- ③ 加藤陸奥雄：朴沢三二先生の追憶，生物2（5）：152～159（1947），朴沢三二：「なまこの骨」（1948）。

堀井栄吉（？～1920）

① 秋田県に生る。秋田県立農学校卒，東京帝国大学農科大学動物学教室で昆虫学を研修，鹿児島県保安課技手，大正6年7～8月沖繩奄美旅行，鹿児島高等農林学校創立に際し岡島銀次教授（別項）を助け，南洋群島に昆虫および鳥類調査を行ない，大正8年長崎県技手に転任。

大正9年1月15日流感のため歿 享年不明。

- ② 堀井栄吉（末永一抄録）屋久島の蝶，博物同志会々報4（13）：74～75（1934），沖繩，

南洋方面の昆虫多数を採集，また鳥類の研究を行なう。沖縄および奄美大島の採集鳥類，鳥 7: 95~99 (1918)。

③ 高橋奨：堀井栄吉君の討，昆虫世界 24 (270) : 74 (1920)，松村松年：南洋の蝶類に就て，昆虫学雑誌 (京都) 1 (2) : 63~68 (1915) (ホリイコシジミ原記載) カゴシマアオゲラ *Picus auokera horii* Takatsukasa の発見者。

ホツタマサゾウ  
堀田雅三 (1891~1964)

① 明治 24 年 6 月 15 日静岡県志田郡青島村に生る。明治 42 年 3 月同県志田郡立農学校卒，同 43 年静岡県立農事試験場助手，大正 9 年 5 月農務省茶業試験場技手，同 13 年 12 月退職。

昭和 39 年 1 月 29 日歿 享年 72 才。

② 茶の鉄砲虫に就きて，昆虫世界 15 (171) : 456~457 (1911)，茶樹病虫篇，病虫害雑誌 4 (10) : 2~(1912)，梨虱駆除に就て，昆虫世界 16 (177) : 177~179 (1912)，茶樹の苦瓜虫，静岡農試出版 (1913)，茶樹害虫苦瓜虫に関する調査 (1~3)，茶業界 8(11) : 5, (12) : 192 (1913)，9 (3) : 14~(1914)，Red spiderの天敵，昆虫世界 20(226) : 231~232 (1916)，茶の赤壁虱の天敵，病虫害雑誌 5 (12) : 933~(1918)，茶の三角葉捲について，昆虫世界 22 (250) : 234~237 (1918)，茶の赤壁虱に関する調査 (1~3)，病虫害雑誌 5 (10) : 837~，(11) : 924~，(12) : 993~(1918)，茶の赤壁虱に関する研究，静岡県農会報 32~33 卷 (1928~1929)。

③ 経歴資料は南川仁博博士の提供による。

スグヤ  
堀健 (1871~?)

① 明治 4 年 8 月 23 日 (1871 年 9 月 27 日) 北海道樺戸に生る。明治 20 年 9 月札幌農学校予科入学，同 25 年 12 月同 5 年級半学期修業で退学，同 26 年 6 月渡米ミシガン州立農学校入学，同 28 年 9 月ニューヨーク州コーネル大学農学部入学，同 30 年 4 月同校卒，コーネル大学農学部昆虫科および同農事試験場の助手を命ぜらる。同 31 年 4 月辞して帰朝，同 32 年 4 月農商務省農事試験場技師，同 8 月昆虫部勤務，同 34 年 4 月 (20 日) 京都，大阪，兵庫，静岡，富山，岡山，愛媛，長崎，福岡，熊本，鹿児島 の 11 県下に出張 (サンノーゼカイガラムシ原産地調査のため来朝せる Marlatt, C. L. 夫妻の案内と通訳のため)，同 7 月 (12 日) 東北 5 県下に出張 (同上)，同 37 年 7 月台湾総督府農事試験場技師害虫係，同 40 年 7 月同上退職，その後消息不明なるも昭和 4 年 3 月松村松年博士はジャワで現地人と結婚せる同氏に会う。歿年不明。

② 介殼虫駆除試験，農事試験場報告 23 : 117~119 (1902)，柑橘介殼虫の駆除法，大日本農会報 259 : 5~(1903)，サンノーゼ介殼虫 (1~3)，農業雑誌 831 : 49~833 : 78~837 : 141~(1903)，煙草螟蛉，農事試験報告 23 : 43~53(1904)，サルハムシ駆除試験成績，同上 : 110~(1904)，擬蟻象鼻虫に就て，台湾農友会報 1 (1905)，柑橘重要害虫，台湾総督府農試報告 1 (1906)，稲の象鼻虫，台湾殖産局 (1906)，台湾の害虫に関する調査 (素木得一と共著) 台湾総督府農事試験場特別報告 1 : 1~228 (1910)。

③ 経歴は農業技術研究所職歴による。松村松年：松村松年自伝 (p. 194 参照), Marlatt, C. L.: *An Entomologist's Quest* (Washington, 1953) (本書はマーラットの 1901 年～1902 年の旅行日記で 90 才の誕生を記念して出版された。1901 年 3 月 22 日横浜着から 9 月 24 日長崎を出て上海に向うまで堀氏が世話をしたので本書中随所に同氏のことが出てくる (p. 23 に肖像写真付)。

#### 堀 松 次 (1897～1938)

① 明治 30 年 11 月 11 日山形県西田川郡鶴岡市，徳次郎 3 男として生る。明治 44 年 3 月鶴岡市の小学校を卒業，大正 5 年 3 月山形県立荘内中学校卒，同 10 年 3 月北海道大学農学部農学実科卒，同年 4 月北海道農事試験場病理昆虫部勤務，昭和 4 年 10 月樺太庁へ出向，樺太庁技手兼樺太庁中央試験所技手，同年 12 月兼官を免ぜられ中央試験場技師に任ぜられ農業部第 2 科長兼同所図書主任として病理昆虫に関する試験事務に従事。

昭和 13 年 5 月 21 日盲腸手術後胆嚢炎併発により歿 享年 41 才。

② アオクチブトガメ二三の習性，昆虫世界 26 (194) : 45～50 (1922)，キビクビレアブラムシに関する調査，北海道農事試験場報告 17 : 1～49 (1926)，カンタンの生態について，動物学雑誌 39 (461) : 129～147 (1927)，Some new Aphids from Hokkaido, *Ins. Mats.* 1 (4) : 188～201 (1927)，Two new species of Aphids parasitic on Poplar in Hokkaido, 札幌博物学会報 10(2) : 109～115 (1929)，北海道における主要農園芸蚜虫類，北海道農事報告 23 : 1～163 (1929)，クロウリハムシモドキに関する研究，樺太庁中央試験所報告 1(1) : 1～105 (1932)，樺太農作物害虫目録，同上 1 (2) : 1～54 (1934)，樺太昆虫誌 1，蝶類，同上 1 (8) : 1～222 (玉貫光一と共著) 他多数の報文あり。

③ 桑山覚・玉貫光一：堀松次氏小伝，昆虫 12 (5) : 155～156 (1938) (肖像写真，著作論文目録付)，桑山覚：堀松次君を憶う，応用昆虫 1 (2) : 98 (1938)，なお，肖像写真は昆虫世界 46 巻全巻の表紙に使用。

## マ

#### 牧 茂 市 郎 (旧名茂一郎) (1886～1959)

① 明治 19 年 2 月 20 日愛媛県松山市郊外に生る。松山中学校卒，明治 42 年 3 月広島高等師範学校卒，同 44 年 4 月同研究部卒，同 7 月台湾総督府農事試験場勤務害虫研究に従事，大正元年茂市郎に改む，同 4 年 8 月台湾林業試験場嘱託，同 6 年 8 月台湾総督府国語学校助教授，大正 10 年 9 月台湾総督府師範学校教授，同 15 年 3 月退職，同 5 月京都大学理学部嘱託，昭和 7 年 4 月理学博士，同 11 年 3 月京大嘱託を退職，同 2 年より同 23 年まで同志社大学講師，同 22 年 4 月臨済宗花園大学教授，同 9 月甲子園学園理事，同学園小・中学校長，後に高等学校長を兼務。

昭和 34 年 4 月 19 日気管支炎後心臓衰弱のため歿 享年 73 才。

② 愛媛県における蝶類分布上面白き事項を紹介す，昆虫世界 15 (168) : 334～335 (1911)，生態より見たる台湾の蝶，同上 16 (184) : 484～489 (1912)，介殻を造る一新泡吹虫 (マキ

アワフキ), 同上 18 (205) : 354~359 (1914), 昆虫経過の不整齊を論ず, 同上 19(217) : 355~362, (218) : 404~417 (1915), 移住飛蝗, 台湾殖産局出版 114 (1915), 同台湾農事報 108 : 9~24 (1915), 並木及観賞植物の重要害虫に関する調査, 台湾林業試験場特別報告 1 (1915), 台湾産桑樹害虫に関する調査報告 (1916), 台湾産毛深蚜虫ノ三新種, 名和靖還曆記念論文集 : 9~27 (英文) (1917), 台湾産毛深蚜虫及其一新種に就きて, 台湾農事報 138 : 9~25 (1918), ムシヤシロアリに就きて, 台湾林試報告 6 (1918), タイワンボタルに就て, 昆虫世界 31(355) : 74~78(1927), 1922年以降昆虫以外の鳥, サンショウオ, ヤモリなどの研究に移り, 京都大学では蛇類の研究に専念, 大著日本蛇類図説 (1931 (英文), 1933 (和文)) を発表するほかサンショウオ, ヤモリ等に関する多くの論文を発表す.

③ 深田祝 : 牧茂一郎先生を偲ぶ, 爬虫類学雑誌 1 (1) : 5~7 (1964) (肖像写真, 略歴, 昆虫以外の論著目録付).

#### 増井 林太郎 (1870~1963) (写真 Pl. 3)

① 明治3年10月12日 (閏年なので甲午10月なら1870年11月5日, 癸亥10月なら12月4日) 静岡県志太郡豊田村に新兵衛長男として生る. 生来病弱のため小学校入学後2回落第5年目に退学, 同明治35年名和昆虫研究所第14回全国害虫駆除講習会修業, 同37年志太郡農事督励委員, 同42年豊田村農事監督, 同村興農会長, 大正2月豊田村第1区長兼部農会長, 同3年同村農会長 (その後4回就任), 村会議員 (その後7年, 10年, 13年に選出される), 昭和3年全国稲作害虫展覧会長より感謝状を受く, 同17年農林大臣より食糧増産による表彰状を受く, 同23年農林省農政局長より感謝状を受く, 同23年農林省農政局長より感謝状を受く, 同24年静岡県知事より昆虫および農作物研究により表彰状を受く, 同25年藍綬褒章を受く.

昭和38年9月22日歿 享年92才.

② 静岡県志太郡産の蝶類, 昆虫世界 8(78) : 75(1904), 静岡県榛原郡産の蠶螂二種, 同上 8 (80) : 162~163 (1904) (ヒナカマキリを発見後に素木博士により新種として命名さる), 藁の積み方および螟虫駆除に就て, 同上 13 (144) : 324~327 (1909), 明治33年頃より昆虫採集をはじめ, 害虫を飼育して経過習性を研究, 明治37年頃より昭和30年頃まで志太郡, 庵原郡下の小学校をまわり螟虫等に関する講演や害虫駆除普及指導に努む. 明治41年頃水稻品種改良に努力し, 志太糯通称「増井モチ」外数種の優良品種育成に成功, 明治43年頃より柑橘病害虫防除普及指導を行なう.

③ 田中彰一 : 誘蛾燈の光のかげに, 一忘れ得ぬ農民 (8) — 農業朝日 4 (8) : 25 (1949), 笹本馨 : 昆虫研究家増井林太郎翁を訪う (湯浅啓温追記), 新昆虫 3 (11) : 22~23 (1950), 故増井林太郎略歴 (1963, 増井家, 一枚刷印刷物), 本経歴資料は山梨大学学芸学部笹本馨教授の厚意による.

#### 益田 素平 (1843~1903)

① 天保14年7月25日 (1843年8月20日) 筑後八女郡二川村 (庄屋) 重蔵長男 (?) として生る. 幼名常太郎後素平に改む, 諱は重信. 同郷の儒牛島益三の門に入り漢学を修む, 安政のはじめ上妻郡江口組惣代となり, 元治元年江口村庄屋となる, 明治5年戸長, 明治

10年農業雑誌 32:4(1877)で枯穂が害虫の所為なることを知り、自らそれを確かめ、その後該地のものが3化性なることを実証す、また防除の急務なることを説き、同13年近隣の3郡の町村連合会を開き稲株掘取焼却案を議し可決せられ実行に移したが反対者続出し、所謂稲株騒動となり、佐野貞蔵(別項)とその宅を暴民に襲われたが毅然として所信を曲げなかつた、明治22年より同28年まで村長をつとめ、また晩年県会議員となつた。

明治36年10月17日歿 享年60才。

② 益田素平の発言から明治13年6月筑後三瀬上下妻3郡の協議会により試験場を設け螟虫飼育経過を実験せしめ、その結果を郡長を通じ勸農局に報告、局は臨時報35回を以て、各郡の試験結果を全国に布達参考にせしめた(農務顛末5:33~35(1957))。螟虫実験録(1895)。なお明治29年(1896)螟虫実験説を著すも版行されず、大正15年(1926)福岡県内務部によつて初めて公刊された。

③ 福岡県内務部:福岡県における螟虫駆除予防の沿革附益田素平翁遺稿螟虫実験説、病虫害駆除予防資料15(1926)、同:螟虫駆除予防の先覚益田素平翁、附遺稿螟虫実験説、病虫害駆除予防資料15の2(1926)。

町田次郎(1885~1964)

① 明治18年1月5日埼玉県比企郡玉川村に生る。明治44年7月東京帝国大学農科大学農学科卒、同年9月農科大学実科講師、大正8年9月東京帝国大学農学部講師、同9年4月農林省蚕業試験場嘱託、同11年東京高等蚕糸学校講師、同9月農学博士、同13年5月東京帝国大学農学部助教授、昭和3年9月東京農業大学講師、同20年3月東京帝国大学教授、同10月退官、同39年7月埼玉県比企郡玉川村名誉村民。

昭和39年7月15日急性肺炎のため歿 享年81才。

② 蚕ノ卵巢ノ研究、蚕業試験場報告4(2):35~80(1922)、蚕児ノ口臭ニ就テ、佐久良会雑誌13:1~5(1923)、マヒマヒガに於ける雑種試験、東京帝国大学農科大学紀要8(3)(1924)、家蚕ノ絹糸物ノ分泌ニ就テ、蚕業試験場報告7(5):124~262(1926)、家蚕ノ精虫ノ数、応用動物学雑誌1(1):9~13(1929)、蠶蛆ノ成育ニ就テ、同上7(1):17~26(1935)、家蚕ノ精虫発達史、動物学雑誌47(562/563):521~534(1935)、家蚕卵の生成特に卵黄の形成について、動物学雑誌50(4):206~207(1938)このほか1917年より1941年にかけて多数の報文がある。

③ 小野正武:恩師町田先生、日本応用動物昆虫学会誌8(3):259~260(1964)(肖像写真略歴付)。

松下<sup>マサキ</sup>真幸(旧姓原田)(1899~1944)

① 明治32年12月26日札幌市に生る。大正12年3月北海道帝国大学農学部林学実科卒、同15年7月学士試験合格、北海道庁技手に任ぜられ拓殖部林務課勤務、昭和4年退職、同年松下に改姓、ドイツに私費留学、同7年北海道大学農学部林学教室副手、昭和9年林学博士、後年病を得て伊達町に療養生活を送る。

昭和19年10月10日伊達紋別町に歿 享年44才。

② Beitrag zur Kenntnis der Cerambyciden des japanische Reiches (学位論文)。

北大農学部紀要 34 (2) : 157~445(1933), Zur Kenntnis der japanischen Cerambyciden (I~VII), 昆虫 10 (3) : 146~149, 同 11 (1/2) : 102~106, 同 12 (3) : 93~96, Ins. Mats. 13 (2/3) : 56~60, 同 14 (2/3) : 52~55, 同 15 (4) : 151~158, 台湾博物学会報 33 (242/243) : 573~(1936~1943), 森林病虫害防除綱要 (北海道庁, 1927), 蟻と人生 (楽園書房, 1934), 森林害虫学 (富山房, 1943) のほか多数の論著がある.

③ 森林害虫学 (再版, 1948) 卷末に肖像写真, 略歴, 論文目録があり, また内田登一博士の序文および実兄原田泰博士 (当時北海道林業試験場長) の故人を偲ぶあとがきが附されている. 略歴資料は桑山覚博士の提供による.

#### 松 永 伍 作 (1853~1908)

① 嘉永 6 年 5 月 8 日越前国今立郡片上村仁右衛門長男として生る. 幼時藩の小姓として江戸に來り維新後同藩の佐々木長淳 (別項) の推挙により明治 9 年内務省勸農寮に出任, 蚕業事務に従事, 同 19 年 3 月農商務省 8 等属兼技手, 同 24 年蚕業講習所の新設に伴い技師に任ぜらる, 同 28 年 4 月清国に派遣せられ蚕業を視察, 同 32 年 8 月京都蚕業講習所々長, 同 36 年 12 月内国博覧会審査等の功により藍綬褒章を授与される.

明治 41 年 4 月 1 日歿 享年 54 才.

② 虫類名彙 (勸農局, 1879), 養蚕術講義 (1887), 蚕桑実験説 (1896), 蚕教 (1901).

③ 石田孫太郎: 松永伍作先生逝去, 蚕業新報 16 (181) : 40~45 (1908), 松永氏紀功碑, 京都市北野平野神社境内, 1910 年 (明治 43 年) 建設, 肖像写真: 蚕糸会報 49 (579) : 口絵 (1940).

#### 松 原 新之助 (1853~1916) (写真 Pl. 1)

① 嘉永 6 年出雲松江藩家臣友益の子として生る. 名は友撰, 字は儀卿, 瑜州と号す. 幼少にして藩医山本泰庵に本草を学び, 生物学に興味をいだく. 後藩校明教館に入り, 次いで修道館で雨森精齋 (1822~1882, 儒者) に従い学をばげみ武術を磨く, 後洋式兵術および英語を学ぶ, 明治 4 年藩費生として上京, 司馬盈之 (1839~1879, 医学者), 松本順 (1832~1907, 医学者) につき独乙語を修む. 後東京医学校に入り動物学教師 Hilgendorf, F. M. (1839~1904) の講義の通訳をしつつ動物学を学ぶ. 次いで教場補助となり水産生物学関係の多くの訳語を創定す. 明治 9 年医学部助教授博物館兼務, 同 10 年駒場農学校動物学・植物学教授, 同年ドイツ万国漁業博覧会に出張を兼ねてベルリン大学に学び後, 欧州各国を視察, 同 14 年帰国, 大学助教授となる. 同 20 年農商務省技師となり第一高等学校教授兼任, 同 23 年水産講習所監事, 同年同所長, 同 44 年 3 月退官.

大正 5 年 12 月 14 日歿 享年 63 才.

② 飛蝗の説, 米國博覧会出品害虫解説 (駒場農学校) 明治 12 年 (1879) 在独中ベルリン大学および同農学協会より日本昆虫交換の依頼を受け, 明治 13 年駒場農学校から昆虫 480 点を送付す.

③ 妹尾秀実: 故松原翁の事ども, 動物学雑誌 20 (330) : 1~3 (口絵, 肖像写真付) (1916), 永沢六郎: 故松原新之助先生, 同上: 3~4 (1916), 日野巖: 植物病理発達史: 144 (1949), 大日本人名辞書 4 : 2497 (昭和 12 年版), 安藤円秀: 駒場農学校等史料 (1966).

## 松村源蔵 (1874~1918)

① 明治7年1月群馬県勢多郡粕川村に生る。群馬県師範学校卒，明治40年第20回名和昆虫研究所全国害虫駆除講習会修業，中学校教諭を歴任。

大正7年9月16日歿 享年44才。

② 蜜蜂一種の習性，昆虫世界 21(241) : 388~389(1917)，クロボシハムシの斑紋の変異，同上 21(242) : 425~427(1917)，昆虫見聞雑記 (1~16)，同上 21(243) : 477~478(1917) 一同 23(263) : 269~271(1919)。

③ 訃報：昆虫世界 22(257) : 468(1918)。

松村<sup>シヨウネン</sup>松年 (1872~1960)

① 明治5年3月5日(1872年4月12日)如屏3男として兵庫県明石町に生る。明治17年川口英学舎入学，同18年6月退学し同9月京都同志社英和学校入学，後退学し上京，同19年8月明治学院予備校入学，同20年6月札幌農学校予科第3級に入学，同28年7月同校卒(第13期)，同校研究生となり同29年助教授，同32年10月ドイツ外欧米各国に留学，同35年5月帰国，同36年12月理学博士，同38年8月千葉館山，八丈島，鳥島を経て小笠原島へ採集旅行，同39年7月甘蔗害虫調査のため台湾へ出張，同40年4月第2回台湾採集旅行，同9月東北帝国大学農科大学教授，同45年5月沖縄旅行，大正8年4月北海道帝国大学教授，同5月欧米各国へ出張，同7月農学博士，同14年国際昆虫学会議名誉会員に推挙さる。同7月ソビエト連邦に出張，同15年 *Insecta Matsumurana* 創刊，昭和4年3月太平洋学術会議出席のためジャワに出張，同6年12月欧米各国へ出張，同7年第5回国際昆虫学会議出席，同9年4月退官，同5月名誉教授，同10年1月日本昆虫学会長，同13年応用昆虫学会名誉会員となり，同年より同15年8月満洲国へ旅行，同16年11月満洲国に旅行，同17年8月満洲国に出張，同18年1月三たび本会々長，同25年10月日本学士会々員，同29年10月文化功労者に選ばる，同29年明石市名誉市民。(初めマツトシの名を用いたが後自らシヨウネンを用う)。

昭和35年11月7日歿 享年88才。

② 札幌に産する蝶類 (M. M. 生)，動物学雑誌 4(42) : 157~161(1892)，北海道昆虫の概数に付き併新種の蝶 (M 生)，同上 5(54) : 147~150(1893)，北海道産鱗翅類，同上 6(64) : 61~66(1894) のほか 1945年にかけて全昆虫目にわたるきわめて多数の報文があるほか，害虫駆除全書(1897)，日本昆虫学(1898)，大日本害虫全書前後篇(1910, 1915)，昆虫分類学(1907, 1915)，応用昆虫学(1917)，日本千虫図解(1~4)(1904~1907)，続日本千虫図解(1~4)(1909~1912)，新日本千虫図解(1~4)(1913~1921)，増訂日本千虫図解(1~2)(1930)，日本通俗昆虫図説(1~5)(1929~1933)，日本昆虫大図鑑(1931) のほかきわめて多くの著書がある(後掲文献目録参照)。

③ 松村松年自伝(写真略歴論文目録付)(1960)，日本昆虫学会と私，昆虫 25 : 135~136(1957)，昆虫学に関係ある大家の略歴(6~7)松村松年氏，昆虫世界 14(156) : 430~432, (157) : 474~476(1910)，一色周知：松村松年先生追悼の詞，昆虫 29(1) : 1~3(1961)(巻

頭写真付), 素木得一: 松村松年先生のことども, 日本応用動物昆虫学会報 4(4): 261 (1960), 松蟲 3(3), 松村松年先生喜寿記念号 (I) (内田登一: 松村松年先生の喜寿を祝して (65~66), 松村松年博士昆虫学文献目録 (1) 94~96 (1949)), 同 (II) 3(4): (小熊捍: 松村先生と日本昆虫学会 (97~98), 文献目録 (2) 125~128), 座談会松村先生を囲んで, 北海道の今昔を語る, 新昆虫 8(6): 14~18 (1955).

長兄竹夫 (~1909) は千虫図解 (1~4) の図を描く, 次兄介石 (1859~1939) はキリスト教先駆者の一人で, 宗教家として名高い.

#### 松本 鹿蔵 (1889~1950)

① 明治 20 年岡山県和気郡伊部町に生る. 明治 38 年 3 月岡山県立農学校卒, 同 38 年 12 月岡山県農事試験場技手として入場, 大正 9 年技師, 昭和 12 年 11 月退職, 同県和気郡伊部町々長に選任され 1 期 4 ヶ年在職, 同 17 年 4 月~10 月同農事試験場嘱託, 同 17 年大日本除虫菊株式会社勤務, 同 20 年戦災により研究室, 工場焼失のため退職, 同 20 年三井農薬研究所 (後の東京農薬株式会社) 嘱託, 同 21 年京都大学化学研究所員として殺虫剤研究に従事, 同 24 年東京農薬株式会社解散により退職, 同 25 年日本農薬株式会社嘱託兼務.

昭和 25 年 11 月 8 日腸閉塞のため歿 享年 64 才.

② 梨果蠹虫の研究, 岡山農試臨時報告 3 (1910), 梨心喰虫に関する研究, 同上 19(1918), 桃葉蜂について, 岡山果物月報 79, 80 (1918, 1919), 葡萄害虫に関する研究, 岡山農試臨時報告 21 (1920), 桃姫心喰に関する研究, 同上 26 (1924), 麦の発芽を害する擬跳虫に関する研究 (齊藤太一と共著), 同上 35 (1930), 桑萎縮病の病源について (鑄方末彦と共著), 蚕糸学報 13 (5) (1929), 稲黄色潜蠅の生活史特に越冬に就て, 農事改良資料 109 (1934), 大豆・栗樹及薄荷害虫に関する研究, 岡山農試臨時報告 43 (1943), 果樹害虫講話 (1950).

③ 木下周太: 松本鹿蔵氏逝く, 農薬と病虫 5 (11): 40 (1950) (写真および主著目録付), 湯浅啓温: 松本鹿蔵氏の死を悼む, 応用昆虫 6 (3): 160~161 (1951), 松本鹿蔵氏逝く, 新昆虫 3 (12): 378 (1950), 鑄方末彦: 松本鹿蔵氏の逝去を惜む, 農薬ニュース 8 (1951), 松本鹿蔵氏追悼号, 果樹 4 (12) (1950), 山田濟: 害虫に関する試験研究史, 岡山農試臨時報告 45: 229~242 (1951).

#### マナセ 曲直瀬 愛 (1851~1888)

① 嘉永 4 年 10 月正貞 (曲直瀬養安院) 4 男として江戸に生る. 幼少より儒を修め本草・英語を学ぶ, 明治 10 年内国勸業博覧会事務局に奉職, 同 11 年内務省勸農局御用掛, 同 13 年三田育種場勤務, 同 14 年官制変更により農商務省農務局御用掛, 同 16 年 2 月小笠原へ農産物調査のため出張, 同 19 年農商務省属 (5 等), その他大日本農会創立委員の 1 人で発会后録事, 農芸委員を勤む.

明治 21 年 9 月 1 日歿 享年 37 才.

② 革翅類 (Dermaptera) (英国昆虫書の翻訳), 錦窠翁米賀誌: 68~75 (1891), 採虫指南 (有隣堂, 1883) [本書は田中芳男 (別項) の著書なりとの説あり, 名和昆虫研究所編: 昆虫標本製作全書 (編者は永沢小兵衛, 別項) p. 34 (1903)], 蝗蝻字考, 昆虫世界 6 (60):



308~309(1902) (田中芳男「物産宝庫」乙集(稿本)より転載せるもの)。

③ ——: 曲直瀬愛小伝, 大日本農会々報 87: 62~63 (1888), 江崎悌三: 明治・大正に於ける昆虫採集・標本製作法に関する単行書, むし 5: 48~56 (1932)。



### 三 島 彌太郎 (1867~1919)

① 慶応3年鹿兒島に通庸長男として生る(父通庸(1835~1888)は警視總監, 子爵)。山形県立師範学校に学び後, 駒場農学校に学ぶ, 暫らく小学校に教鞭をとり後米国に留学, 明治21年アムハースト農学校卒, 帰朝後家督を相続し, 北海道技師補となる。同22年再び渡米, コーネル大学入学, Comstock に師事して昆虫学を専攻, マスターオブサイエンスの学位を受く, 同25年北海道庁技師, 同30年貴族院議員, 同39年横浜正金銀行に入り取締役, 同44年頭取, 大正2年日本銀行総裁。

大正8年3月7日歿 享年52才。

② 昆虫学上の論文は見当らぬが昆虫学理解者として知られ, 米国留学中に採集せる昆虫標本多数を戦前東京農業大学に寄贈, 同図書館に蔵せられしも戦災により焼滅す。

③ 大人名事典 5・6: 121 (平凡社), 大日本人名辞書 4: 2548 (同刊行会, 1937) 他に子爵三島弥太郎伝あり。

### 三 橋 信 治 (1878~1953)

① 明治12年1月25日信方長男として東京に生る(父信方(1856~1910)は旧幕臣でオランダ, デンマーク公使, 横浜市長などを歴任す)。明治31年3月東京正則尋常中学校卒, 同32年6月札幌農学校入学, 同35年7月退学, 同年11月より聴講生となり, 同38年4月同校雇, 同40年4月青森県農事試験場技手, 同41年7月退職, 大正元年11月東京帝国大学農科大学介補, 同8年6月農商務省農事試験場雇, 同6月退職, 同9年東京帝国大学農学部介補, 同13年6月より同15年9月まで同上雇, 同9月より昭和2年まで農事試験場雇, 昭和2年7月より昭和24年1月まで東京帝国大学農学部雇として動物学教室に勤務, 昭和24年日本昆虫学会名誉会員に推薦さる。

昭和28年12月30日歿 享年75才。

② 余が所蔵する天牛科標本について, 博物之友 6(32): 149~150 (1906), 余が所蔵の蝶類標本目録, 昆虫世界 11(115): 112~114 (1907), 予が所蔵蛾類標本目録, 同上 11(117): 204~205, (120): 331~332, (121): 422~423, 12(126): 71~73 (1907~1908), 予が所蔵の有吻類目録, 同上 13(114): 336~338, (116): 424~426 (1909), 日本産椿象科目録(1~2), 同上 19(219): 484~487 (220): 528~533 (1915), 本邦産鹿子蛾科目録(1~2), 同上 21(239): 280~284, (240): 318~321 (1917), 本邦産ベニカミキリ属の天牛に就きて, 名和靖還暦記念論文集: 123~130 (1917), 日本産吉丁虫目録, 病虫害雑誌 6(4): 272 (1919), このほか1906年より1949年にかけての報文がある。また, 札幌時代から約50年間に亘つて執筆された日本昆虫全種の分類学的文献目録(約500冊)は昆虫研究者にとりまたと得がたい貴重な文献目録で一般に「三橋ノート」として知られ, 多くの研究者に利用

されたが出版には至らなかった。

③ 石井悌：三橋信治氏を憶う，新昆虫 6(6)：4~5(1953)，河田党：三橋信治先生を憶う，応用昆虫 8(4)：105(1953)，訃報：虫界速報 28：6(1953)，三橋信治翁，採集と飼育 15(5)：150(1950)，三橋信治先生の御宅を御たずねして，新昆虫 1(7)：28(1924)。ミツハシテングスケバ等数種の昆虫に献名されている。なお歿後「三橋ノート」は農業技術研究所昆虫科に寄贈され，また蔵書は宮城県農業短期大学図書館に収納されている。養嗣子淳博士(農業技術研究所昆虫科勤務)が昆虫学者として遺鉢をつがれている。

三宅<sup>ツネ</sup>恒<sup>タカ</sup>方(1880~1921) (写真 Pl. 3)

① 明治13年5月14日恒徳長男として金沢市水溜町に生る(父恒徳は雄二郎(雪嶺, 1860~1945)の兄で法学士, 台湾に歿す)。父の転任に従つて上京, 明治27年東京府立尋常中学(府立一中)に入学2年級で退学, 同31年4月尋常中学郁文館卒, 同35年7月第一高等学校二部学科卒, 同38年7月東京帝国大学理科大学動物学科卒, 引続き大学院で昆虫学専攻, 同11月農商務省農事試験場嘱託, 同39年5月第1臨時教員養成所博物科講師嘱託, 同40年9月東京帝国大学農科大学助手, 大正3年4月理学博士, 同5年4月農事試験場技師昆虫部主任, 同年農科大学実科講師嘱託, 同6年5月朝鮮勸業模範場害虫害査を嘱託せられ朝鮮に出張, 同8年9月実科講師を解き, 農学部講師嘱託。

大正10年2月2日腸チフスのため歿 享年41才。

② 台湾のトコジラミに就き, 昆虫雑誌 3：12~13(1895), マルウンカとナナホシテントウに就て, 動物学雑誌 10(116)：179~183(1898)(動物学雑誌懸賞2等当選論文), 初学昆虫採集法(東洋社, 1901), 日本産蛾類図説(1~9), 動物学雑誌 15(179)~18(208)(1903~1906), A list of Panorpidae of Japan, with descriptions of the ten new species, 農科大学学術報告 8(1)：1~2(1908), A revision of the Arctinae of Japan, 同上 8(2)：153~174(1909), Some notes on the Arctinae of Japan, 農科大学紀要 2(3)：212(1910), The Mantispidae of Japan, 同上：213~221(1910), A further contribution towards the knowledge of the Panorpidae of Japan, 同上：183~205(1910), A systematic list of the Panorpidae of Japan, with corrections to my former paper of a new species, Entomologist 55(574)：90~94(1911), The life history of *Panorpa klugi* MacLachlan, 農科大学紀要 4(2)：117~139(1912), Studies on the Mecoptera of Japan, 同上 4(6)：265~400(1913), Studies on the fruit-flies of Japan, contribution 1. Japanese orange-fly, 農事試験場特別報告 2(2)：85~165(1919), その他1922年にかけて多数の報文があり, また, ふおるそむ氏昆虫学(内田清之助と共訳)(警醒社, 1910), 昆虫学汎論(上・下)(裳華房, 1917~1918), および, 第六感を交えて(実業之日本社, 1921), 旅と私(実業之日本社, 1922)などの随筆集多数がある。

③ 矢野宗幹：理学博士三宅恒方氏伝, 動物学雑誌 33(388)：100~105(1921), 八木誠政：故理学博士三宅恒方氏, 病虫害雑誌 8(4)：巻頭写真および略歴主著目録(1921), 訃報：昆虫世界 25(282)：69(1921), 神東淳：三宅恒方氏の少年時代, 昆虫 2(3)：189~190(1927), 昆虫学に関係ある大家の略歴(8), 三宅恒方氏, 昆虫世界 14(159)：562~566

(1910), 高千穂宣麿: 鶯嶺仙話: 106~116 (1946), 故三宅恒方博士の三十五年忌, 新昆虫 8 (8): 9 (1955), 大島広: 三宅恒方さんの思い出, 陸水通信 4: 15~16 (1958). なお, 夫人やす子 (旧姓河本, 1890~1932) は雪嶺夫人花圃 (1860~1945) と共に閨秀作家として令名があり, それぞれ故博士のことを書かれている. また長女艶子 (旧姓阿部) も随筆家として知られる.

宮 嶋 <sup>ミキ</sup> 幹之助 (1872~1944)

① 明治 5 年 8 月 12 日 (1872 年 9 月 14 日) 山形県米沢で家久長男として生る. 明治 20 年上京, 第一高等中学入学 (同校動物学教師 Fritze, A. (1860~1927) に蝶学を学ぶ), 同 31 年 7 月東京帝国大学理科大学動物学科卒, 引続き大学院に入る. 同 33 年京都帝国大学大学院でマラリアの研究に従事, 同 34 年京都帝国大学講師, 同 35 年痘苗製造所 (後に伝染病研究所と合併) 入所, 同 36 年同上技師, 同 40 年医学博士 (本邦産アノフェレスについて外 8 篇), 大正 3 年北里研究所創設に参画し寄生虫部長, 同 6 年慶応義塾大学教授兼任, 7 年ブラジルへ出張, 同 13 年衆議院議員に選出, 昭和 4 年以降国際連盟保健機構の日本代表として欧米にしばしば出張, 同 13 年北里研究所副所長.

昭和 19 年 12 月 11 日自動車事故により歿 享年 72 才.

② 泡出し虫に就て, 動物学雑誌 8 (90): 111~115 (1896), 日本産蝶類学名変更, 同上 8 (90): 130~132 (1896), 蝶類に於ける雌雄上異形及び其の原因, 同上 9 (102): 141~146, 琉球のツマベニ蝶, 同上 10 (117): 230~234 (1898), 日本産蝶類図説 (1~12), 同上 11 (123): 15~26—12 (144): 361~362 (1899~1900), 日本産蝶類総目録, 同上 12 (144): 1~21 (1900), 日本産蛾類図説 (1~9), 同上 15 (179): 311~316—18 (208): 41~49 (1903~1906), 台湾産蝶類図説 (1~3), 同上 18 (209): 75~89—18 (211): 141~153. このほか 1942 年にかけて衛生昆虫に関する多くの報文がある. また著書に普通動物学 (1902), 女子教科博物学動物篇 (1902), 日本蝶類図説 (成美堂, 1904), 動物と人生, 北里柴三郎伝などがある.

③ 北里研究所 50 年誌 (同所発行, 1966), 大人名事典 5, 6 (平凡社).

### △

ムカイ ガワ ヌウ サク  
向 川 勇 作 (1883\*~1927)

① 明治 16 年\*三重県一志郡波瀬村に生る. 久居農学校卒, 明治 36 年徴兵検査の折, 沼津病院に入院, その節名和氏の昆虫研究のことを聞き昆虫に興味を持ち始める, 農業を営み後永く三重県波瀬村の村長を勤む.

昭和 2 年 3 月 29 日歿 享年 44 才.

② ツマキンウハバの幼虫とその寄生蜂, 昆虫世界 11 (123): 520~521 (1907), シロシタヨトウに就て, 昆虫世界 16 (173): 15~17 (1912), 柳癭葉蜂, 昆虫世界 22 (255): 456 (1918), シイクダアザミウマに就て, 昆虫世界 16 (184): 481~484 (*Leeuwenia pasanii* Mukaigawa の原記載), タケトラカミキリの研究, 昆虫世界 26 (294): 51~53 (1922), 三

重県産没食子蜂 *Cynipidae* の研究 (ムカイガワフシバチ等を記す), 動物学雑誌 34 (401) : 203~208 (1922), 螟蛾の羽化と温度と誘蛾灯との三角関係, 昆虫世界 28 (322) : 187~ (1924), 竹林害虫防除研究, 三重県山林会報 8 : 1~(1924), 1907年より1928年にかけてきわて多くの昆虫研究観察記を発表する. \* 生年は年令による推定.

③ 訃報: 昆虫世界 31 (356) : 142(1927), 名和靖白蟻翁雑話 (6), 42章向川氏昆虫研究の動機, 昆虫世界 27 (310) : 198~199 (1923).

ムナカガ  
棟方哲三 (1886~1913)

① 明治19年3月25日青森県南津軽郡藤崎村に定次郎長男として生る. 明治34年3月藤崎小学校卒, 明治38年3月青森県立第一中学校卒, 同39年10月南津軽郡藤崎村藤崎尋常高等小学校代用教員, 同42年3月岐阜市名和昆虫研究所附属農学校別科卒, 同年4月青森県立農事試験場技手, 明治44年(?)退職, 健康に恵まれず,

大正2年8月11日歿 享年27才.

② 苹果黒鬚細椿象に就て, 昆虫世界 13 (145) : 363~365 (1909), 稲の新害虫稲葉潜蝨, 昆虫世界 14 (157) : 459~463 (1910), (イネカラバエ *Chlorops orizae* Munakata の原記載), 青森県産二化螟虫の二化率に就きて, 昆虫世界 16 (175) : 92~97 (1912), サクラヒラタハバチに就て, 昆虫世界 16 (183) : 433~436 (1912), 二化螟虫の寄生蜂に就て, 病虫害雑誌 5 (4) : 2~4 (1924).

③ 訃報: 昆虫世界 17 (194) : 434 (略歴付短報) (1913) (本訃報に歿日9月11日とあるは誤りと思われる), 青森県りんご発達史 4 : 147 (1963), イネカラバエ, ムナカタコムバチは氏の発見に関わる. 本経歴資料は青森県農業試験場病科昆虫科香川寛技師の提供による.

村井貞固 (1885~1963)

① 明治18年6月山形県鶴岡市賀島町に生る. 山形県庄内中学卒 (在学中昆虫につき松村松年・名和靖の指導を受く). 東京帝国大学農学部実科卒, 京都府立農学校教授, 徳島県立徳島農学校教諭, 徳島県立板西農蚕学校教諭などを歴任, 板西実業女学校々長を兼務, 後退職帰郷, 山形県立鶴岡高等女学校講師を経て戦後県立鶴岡北高等女学校, 県立南高等学校講師を歴任し, 昭和35年退職.

昭和38年12月出生地で歿 享年77才.

② 山形県西田川郡産蝶類, 昆虫世界 10 (6) : 294~295 (1906), 温室の介殻虫, 日本園芸雑誌 26 (1) (1914).

③ 略歴資料は子息山形大学農学部村井貞彰氏による.

村田藤七 (1879~1945)

① 明治12年7月11日藤兵衛3男として三重県多気郡津田村に生る. 明治22年3月修道尋常小学校卒, 同27年3月多気郡高等小学校卒, 同29年8月三重県高等養蚕伝習所卒, 同31年2月蚕種検査員の資格を得, 同9月名和昆虫研究所で1ヶ月昆虫学を研修, 同10月三重県蚕種検査員拜命, 同12月同上解除, 同35年5月三重県農事試験場技手, 同33年10

月同県害虫駆除委員，同 34 年 10 月退職し 11 月農商務省農事試験場に見習生として入場，同 35 年同雇，昆虫部勤務，同 39 年 12 月同技手，大正 3 年 9 月植物検査官補，同 10 月植物検査所四日市支所長，同 11 年 12 月～12 年 2 月台湾へ出張，同 12 年 5 月農商務技師兼任，同 13 年 12 月名古屋税関支署勤務，同 15 年 2 月大阪税関植物検査課長，昭和 2 年植物検査官，同 6 年 12 月退官，昭和 10 年（夏～秋）朝鮮旅行。

昭和 20 年 3 月 26 日脳溢血で歿 享年 67 才。

② 麦を害する横這，三重農事報（1900），蚊，昆虫学雑誌 1(1)～1(4)（1950），益虫飼育成績，農事試験場報告 36（1909），黄条蚤虫に関する調査，同上 38（1911），益虫飼育成績，同上 40（1913），二化螟虫とその防除法，病虫害駆除予防奨励資料 9（1928），浮塵子に関する調査，農事改良資料 10：37～38，52～54（1930），稲作の大害虫浮塵子講座，大日本農会報 593～614（1930～1932），害虫懐旧座談会，昆虫 8（4/6）：266～284（1943），明治年間における螟虫に関する研究および駆除予防法の変遷，昆虫 9（4）：181～203（1935），このほか 1942 年にかけて 70 余篇の報文があるほか害虫防除便覧（1910），米麦の害虫の予防駆除（1915），米麦作の害虫と予防駆除（1927）の著書がある。

③ 狩谷精之：村田藤七君の思い出，大阪植物防疫研修資料 3（34）：325～327（1955），平野伊一：村田藤七先生のことども（1）～（2），同上 328～342，3（35）：367～375（1955），前田孝二：村田藤七先生の思い出，日本昆虫学会東海支部ニュース 3：2～3（1955），平野伊一：諸先輩の略歴など，大阪植物防疫 7（3/4）：568～571（1959）。

## 七

森 <sup>タメ</sup> <sup>ゾウ</sup>  
為 三（1884～1962）

① 明治 17 年 6 月 1 日姫路市において久之助 4 男に生る。明治 28 年 3 月兵庫県飾磨郡荒川尋常小学校卒，同 30 年 3 月飾磨郡霊龜高等小学校卒，同 35 年 3 月姫路中学校卒，同 37 年 3 月東京帝国大学附設第一臨時教員養成所博物科卒，同年師範学校中学校博物科高等女学校，動植物・生理・鉱物科教員免許を受く，同 37 年 4 月東京帝国大学理科大学動物学教室において研究，同 38 年 2 月佐賀県立鹿島中学校教諭，同年 4 月応召，9 月応召解除，同 40 年 12 月より福井県立福井中学校教諭，同 42 年 4 月朝鮮漢城高等学校教授，京城高等普通学校教諭を歴任，大正 10 年 11 月欧米各国へ出張，帰国後大正 14 年 4 月京城帝国大学予科教授，同 11 年 6 月京都大学より理学博士の学位を受く。昭和 17 年 11 月朝鮮文化功労賞を受く，同年 11 月本籍地に帰還，同 21 年 4 月兵庫県立医科大学予科講師を嘱託，同年 6 月同校予科長同年 9 月兼教授，同 24 年 3 月兵庫県立農科大学長事務取扱，同年 5 月同校教授兼兵庫県立医科大学予科長兼同校予科教授，昭和 26 年 7 月県立農科大学副学長，同 26 年 11 月 3 日教育功労賞授賞，同 31 年 7 月富山大学文理学部講師兼任，同 32 年 3 月兵庫県立農科大学副学長退職，武庫川女子大教授，同 32 年 6 月兵庫県立農科大学名誉教授，同 33 年 11 月兵庫県文化賞授賞。

昭和 37 年 7 月 18 日歿 享年 78 才。

② 朝鮮産アカボシウスバシロテフの翅の変異に就て，朝鮮博物学会雑誌 11（1930），朝鮮

の蟬, 同上 12 : (1931), 朝鮮産ゲンゴロウ科目録, 同上 41 : (1932), 朝鮮産ゲンゴロウ科一新種, 同上 14 (1932), 朝鮮産キリギリス科, 同上 16 : (1933), 満洲国の蝶類, 大陸科学院研究報告 2 (1) (1938), 蒙古の昆虫類 1~2, 朝鮮博物学雑誌 27 (1939), 32 (1941), 他多数. また1913年より1959年までに哺乳動物, 鳥類魚類その他の極めて多くの論著がある. 詳細は森為三業績目録, 兵庫生物 3 (5) : 1~4 (1959) 参照.

③ 紅谷進二: 弔辞および会長森為三先生のせい去を悼む (略歴付) 兵庫生物 4 (3/4) : 137~138 (1962), 室井綽: 森博士への感謝と生物研究奨励会, 同上 : 138 (1962), 山本茂信: 森為三先生の思い出, 同上 : 139 (1962), 室井綽: 森会長学界貢献の一断面, 兵庫生物 3 (5) : 1~2 (1959), 本略歴資料は兵庫農科大学奥谷禎一博士の提供による.

#### 森野伊作 (1897~1962)

① 明治30年1月2日三重県阿山郡三田村 (現上野市) に生る. 大正4年三重県立農林学校を卒, 同5年6月三重県立農事試験場助手, 同6年11月農商務省植物検査所雇四日市支所勤務, 同10年4月横浜本所勤務, 同11年4月三重県産業技手, 三重県農事試験場勤務, 同13年4月福井県産業技手兼農事試験場技手, 昭和12年5月地方農林技師兼福井県農林技師, 同20年5月福井県経済部農務課兼食糧増産審議室勤務, 同21年3月退職, 同22年4月農林省福井資材調整事務所食糧資材係長, 同25年同所廃止により退職, 同年5月神戸植物防疫所舞鶴出張所長, 同27年4月神戸植物防疫所敦賀出張所長兼務, 同30年4月敦賀出張所長退職, 同34年3月舞鶴出張所長退職, 同年4月舞鶴植物防疫協会嘱託.

昭和37年10月20日胃ガンにて歿 享年65才.

② 大正13年度・大正14年度黒椿象二化螟虫調査試験報告, 福井県農事試験場試験調査報告 7(1926), 福井県下における黒椿象 (古賀信義と共著) 農業及園芸 1(8) : 11(1926), 稲の根喰葉虫に関する調査試験成績, 福井農事試験調査報告 20 (1935), 蚜虫に就て (1~3), 滋賀農報 264 : 14, 265 : 57, 266 : 28 (1936), 水稻主要害虫防除に就て (1~5), 福井農会報 368~372(1939).

③ 由利正之: 森野伊作氏勇退さる, 神戸植物防疫情報 177 (1959), 平野伊一: 森野伊作氏の霊にたむける, 同上 304 (1962), 森野氏肖像写真は大阪植物防疫 7 (81/82) : 396 (1960) にある. 本資料は福井県農業試験場長友永富博士の提供による.

#### 門前弘多 (1883~1960)

① 明治16年3月13日福井県に生る. 明治35年3月福井県立福井農学校卒, 同39年4月盛岡高等農林学校農学科卒 (第1回生), 同41年3月同研究科修了, 同4月同校助教授, 同7年10月同教授, 同12年10月~15年1月まで欧米に留学, 同14年7月 Zürich の第3回国際昆虫学会議に出席, 昭和5年農学博士, 同18年5月停年退職後も講師として同校に勤務, 昭和24年6月岩手大学学芸学部教授, 国33年3月退職後同大学名誉教授.

昭和35年12月27日歿 享年77才.

② ナシガメムシに就て, 昆虫世界 12 (136) : 504~507 (1908), クジャクテフに就て, 日本昆虫学会々報 2 (9) : 215~216 (1908), 植物虫瘻の研究, 齊藤報恩会事業年報 6 (1930),

On the Japanese insect galls, 日本学術協会報告 5: 202~216 (1930), 虫癭生成野虫に関する2・3の知見, 昆虫 4(4): 225~230 (1930), Revision of the Japanese Gallwasp, with the descriptions of new genus, subgenus, species and subspecies, Ann. Rep. Gakugei Facul. Iwate Univ. 5: 15~21 (1953). その他1957年にかけてアブラムシ類, 虫癭昆虫その他多数の報文がある.

③ 牧高治: 門前博士を悼む, 昆虫 29(2): 146 (肖像写真付) (1961). 略歴資料は岩手大学農学部宮慶一郎博士提供による.

## ヤ

八木 誠 政<sup>ノブ マサ</sup> (1894~1967)

① 明治27年5月17日長野市松代に生る。明治45年3月県立上田中学校卒, 大正5年3月上田蚕糸専門学校養蚕科卒, 同4月財団法人大原奨農会農業研究所昆虫部入所, 同6年8月退職, 同9月東京帝国大学理科大学動物学選科入学, 同9年7月同修了, 同9月農商務省農事試験場昆虫部嘱託, 同10年7月大原農業研究所研究員, 同12年5月退職, 上田蚕糸専門学校講師兼農事試験場嘱託, 同13年12月京都帝国大学助教授, 農学部勤務, 同15年7月理学博士, 同6月欧米各国へ出張, 昭和3年1月帰国, 同4年4月退職, 同5年4月より同23年3月まで農林省農事試験場昆虫部嘱託, 同6年3月より同25年4月まで東京文理科大学講師兼任, 同9年10月同大学菅平高原生物研究所主任, 同24年6月文部教官信州大学上田繊維専門学校教授兼信州大学教授, 同26年3月国際昆虫学会議出席を兼ねて欧州各国へ出張, 同9月帰国, 同8月農学博士, 同34年日本昆虫学会長, 同35年1月第5期日本学術会議会員, 同年4月停年退職, 同8月国際昆虫会議・国際生物, 気象学会議出席を兼ね欧州諸国へ出張, 同36年4月東京農業大学教授, 同31年5月停年退職後引き続き同大学院教授嘱託, 同42年2月本会名誉会員.

昭和42年2月18日すい臓しゆようのため歿 享年72才.

② *Lycaena argus montanus* n. var. 並に同蝶の気候的2型, 昆虫学雑誌 (京都) 1(4): 139~(1915), Preliminary note on the life-period of the bulb mite *Rhizoglyphus echinops*, Berich. Ohara Inst. land. Forsch. 1(3): (1918), 本島産未記録の小灰蝶に就て (仁礼景雄と共著), 昆虫世界 23 (268): 443~445 (1919), Analysis of the growth of the insect larvae, Mem. Coll. Agr. Kyoto Imp. Univ. 1(1926), 函数生物学 (小泉清明と共著, 裳華房, 1929), 三化螟虫分布の北限に就て, 日本学術協会報告 6 (1930), 家蚕寄生蠶蛆の物理的駆除法 (1939), 二化螟虫の紫外線波長範囲に就て, 応用動物学雑誌 12 (3/4) (1940), Note of electron microscopic research on pterin pigments in the scale of Pierid butterflies, Annot. Zool. Jap. 27(3) (1954), 昆虫学本論 (養賢堂, 1957), The compound eye of Lepidoptera (小山長雄と共著, 1963), その他多数の論著がある.

③ 八木誠政: 研究の思い出 (1~2), 植物防疫 9 (11): 472, (12): 515 (1955), 同: 研究の動機, 新昆虫 11 (3): 10~11 (1958), 同: 蝶を追つて50年, 同上 12 (4): 25~27 (1959),

同：私と俳画，植物防疫 18 (3) : 121 (1964)，同：八木誠政論文・著書・特許目録（自刊，1959）（1959年2月までの論著126篇と特許5件の目録），訃報：八木誠政博士逝去（同写真および略歴付），深谷昌次：八木誠政博士をいたむ，日本応用動物昆虫学会誌 11(1) : 32~33 (1967)，昆虫と自然 2 (3) : 2~4 (1967) 所載，八木誠政先生をしのんで一ありし日の先生—(写真集口絵グラフ)，深谷昌次：八木誠政先生のことども：2，八木繁実：父の思い出：2~3，後閑暢夫：先生の研究業績を顧みて，3~4（同略歴付），小山長雄：八木誠政先生のご逝去を悼む，昆虫 35 (2) : 81~82 (1967)，ニュー・エントモロジスト八木誠政博士追悼号 16 (2) (1967) 所載，ヤギシロトビムシ（ヤギトビムシモドキ）は氏に献名された著名害虫である。

マサトシ  
矢 後 正 俊 (旧姓数井) (1887~1963)

① 明治20年7月11日富山県に生る。大正8年3月東京農業大学卒，同4月農事試験場見習生として入場同9年6月修了，同7月静岡県農事試験場技手，同県梨姫心喰虫試験地勤務，(大正13年矢後に改姓)，昭和13年静岡県農会技師に転出，同18年12月退職，同19年1月三井物産株式会社農薬研究所入所，同10月頃退職，同24年富山県婦負郡四方町収入役，29年3月同町は和合町へ合併，和合町四方支所勤務，同32年退職，同33年四方農協参事，同36年同組合廃止により退職（和合町富山市に合併のため）。

昭和38年7月23日富山市に歿 享年76才。

② ノシメコクガにつきて，昆虫世界 23 (268) : 446~449 (1919)，梨姫心喰虫の分布，病虫害雑誌 9 (6) : 340~343 (1922)，梨を害する果蠹虫類について (1~5)，同上 10 (3) : 145~151，(4) : 182~185，(5) : 259~271，(6) : 325~334，(7) : 379~384 (1923)，梨姫心喰虫に関する試験並に調査，静岡県農試臨時報告 24 (1932)，桃姫心喰に関する試験並びに調査，同 24 (1932)，同 28 (1933)，蟬駆除試験，同上 24 (1932)，梨姫心喰虫防除試験，静岡県農試梨害虫に関する調査報告 11 (1936)，梨園における蟬 (1~2)，静岡農試臨時報告 38 (1936)，同 41 (1937)，モモンクヒガの生態並びにその防除法，同上 39 (1936)，ほかに1919~1924年は数井姓で，1943年にかけては矢後姓で極めて多くの報文を発表，著書に実験害虫防除法（養賢堂，1959），原色果樹害虫図説（岡崎慶郎と共著）（修教社，1937），最新農用薬剤（岡崎慶郎と共著）（修教社，1937）等がある。また昭和10年2月嶽陽虫草採集会を創会，会報を発行富士山を中心とした Fauna, Flora の調査を行なった。

③ 経歴資料前半は静岡県山下俊平氏後半は富山県農業試験場常楽武男技師の提供による。

矢 崎 亥 八 (1868~1931)

① 明治元年8月長野県諏訪郡上諏訪町生。明治25年7月東京帝国大学農科大学第1部卒，同12月鹿児島県尋常師範学校教諭，同26年8月同上退職，農商務省農務局勤務，同28年3月農事試験場技師補，同10月任農林技手，同29年4月神奈川県技師，同農事試験場々長（第1代），同33年9月同上退職，同41年岐阜県農会技師，同44年2月退職し上京。

昭和6年歿 享年63才。

② 蝨虫及浮塵子 (1)~(2)，農事雑報 16~19 (1897~1900)，浮塵子駆除予防法，大日本



農会報 192 : 40~(1897), 農事報徳記 (岐阜県農会, 1909) また, 岐阜県農会報 23 巻前後に「神木山人」の名で多数害虫記事を執筆している。後年は主として報徳事業に熱中す。

③ 略歴の一部は農業技術研究所職歴による。

#### 矢 沢 米三郎 (1868~1942)

① 明治元年 5 月長野県諏訪郡中州村に生る。長野師範学校卒, 東京高等師範学校卒, 長野師範学校教諭, 松本高等女学校長, 松本高等学校講師, 長野師範学校校長などを歴任す。

昭和 17 年歿 享年 74 才。

② ダンダラ蝶の一産地, 動物学雑誌 7 (79) : 167~168 (1895), 此日またツマキテフ, 同上 : 167 (1895), 昆虫研究の一例, 信濃博物学雑誌 1 : 40~46 (1904), 昆虫研究のまた一例, 同上 3 : 18~20 (1904), 昆虫生態学 (沢田鉄義と共著) (光風館, 1903), 鳥獣蟲魚 (1927, 1941) 明治 35 年信濃博物学会を創立, 後会長となる。また信濃山岳会長で「日本アルプス案内」「上高地」「白馬岳」「雷鳥」の著者があり, 永らく長野県天然記念物調査委員を勤む。

③ 経歴資料は長野県農業試験場田中悌技師の提供による。

#### ヤ シロ ヒロ タカ 屋 代 弘 孝 (1896~1961)

① 明治 29 年栃木県に生る。大正 8 年 3 月鹿児島高等農林学校第 3 部卒, 同 11 年沖縄県庁技師として沖縄に渡る, 同 12 年沖縄県立糖業試験場技師, 同 6 年沖縄県農事試験場昆虫部主任, 同 19 年兵庫県に帰国, 同 23 年兵庫県立農事試験場技師, 同 25 年病理昆虫科長, 同 26 年専門技術員として兵庫県庁農業改良課に兼務, 停年退職後兵庫県経済連に勤務。

昭和 36 年 12 月 30 日交通事故にて歿 享年 67 才。

② 沖縄県昆虫目録 (1), 沖縄県糖業試験場 (1927), 宮古島の蝶類, Zephyrus 2 (4) : 247~(1930), 南大鳥島の蝶類, Zephyrus 3 (2) : 145, 3 (3/4) : 237 (1931), 沖縄県石垣島における瓜実蠅天敵放飼事業概要, 昆虫 8 (4/6) : 300~301 (1934), 甘蔗害虫ナカジロシタバ (1~3), 応用昆虫 1 (5) : 202~215, 2 (6) : 231~239, 3 (3) : 142~143 (1939~41), ヨナグニサンの生活史, 昆虫 13 (3) : 97~111 (1939), 沖縄地方における重要害虫概説, 農業及園芸 15 (12) (1940)。

③ 東平地清二 : 故屋代弘孝氏と沖縄の昆虫, 沖縄農業 1 (2) : 54 (1962)。

#### 矢 野 延 能 (1859~1928) (写真 Pl. 2)

① 安政 5 年 12 月 29 日 (1859 年 2 月 1 日) 愛媛県越智郡宮窪村に生る。明治 9 年 11 月より 16 小区友浦村組頭, 用係, 庶務係衛生専掌備, 地押事務整理, 宮窪村助役, 有給村々長, 越智郡農会委員, 今治米穀取引所支配人, 伊予紡績株式会社々員等を歴任, 明治 34 年 3 月第 7 回全国害虫駆除講習会修了, 同年 4 月愛媛県農事試験場技手, 東予分場勤務, 明治 35 年 3 月害虫調査のため広島・山口・福岡・熊本・佐賀・長崎 6 県へ出張 4 月 9 日帰省, 同 37 年農事試験場東予分場長事務取扱, 同年 10 月解職, 明治 38 年 6 月農事試験場勤務, 同 41 年 9 月農林省病虫害駆除予防短期講習を修得, 明治 43 年害虫駆除予防委員, 大正 4 年愛媛県農業技術員養成所助手, 同 5 年 4 月同所講師, 同 8 年 4 月愛媛県農事試験場技師,

同 10 年愛媛県産業調査委員, 同 12 年 3 月病のため退職, 同年より大正 14 年 4 月まで伊予果物同業組合技師.

昭和 3 年 6 月 8 日病歿 享年 69 才.

② セジロウンカの発生と其の出現時期の早晚との関係, 昆虫世界 9 (95) : 304 (1905), 愛媛県下における麦の害虫ヤノハモグリバエ (*Agromyza yanonis* (Matsumura)) に就いて, 病虫害雑誌 3 (12) : 942~944 (1916), このほか 1900 年から 1933 年に亘り多くの応用昆虫学上重要な報告がある.

③ 故矢野延能先生, 農芸研究 (愛媛県農試) 4 (7) (1928) (口絵肖像および裏面略歴付). 略歴資料は愛媛県農業試験場清家義明技師による. ヤノハモグリバエは氏に献名された著名害虫である.

山 川 <sup>シズカ</sup> 黙 (旧姓河田) (1886~1966)

① 明治 19 年 7 月 河田休<sup>ヨシ</sup> 2 男として東京に生る (父休 ( ~1900) は通信大臣秘書官, 東京市助役などを歴任). 府立第一中学校卒, 大正 2 年 7 月東京帝国大学理学部植物学科卒, 京北中学校教諭, 慶応義塾大学講師を経て, 同 7 年武蔵高等学校教授, 昭和 17 年同校長, 同 22 年停年退職.

昭和 41 年 2 月 11 日歿 享年 79 才.

② 八ヶ岳採集記, 博物之友 4 (21) : 59~64, (22) : 123~127, (23) : 163~168 (1904), 春ノ高尾, 同上 4 (21) : 73~77 (1904), 原色蝶類図 (三省堂, 1929), 原色新蝶類図 (三省堂, 1935), 日本博物学同志会の古い会員で同誌上では河田姓で活躍, 山岳会 (後の日本山岳会) 創立発起人の一人, 高山植物図譜の著もある.

③ 河田黨: わが 10 代を語る, 新昆虫 10 (12) : 11~12 (1957). 長兄烈<sup>イサオ</sup> (1883~1963) は貴族院議員, 大蔵大臣, 弟黨<sup>アツシ</sup> (1889~1955) は農学博士, 森林生態学者で林業試験場技師, 青森営林局長, 弟照<sup>アキラ</sup> (染木家を嗣ぐ) は洋画家で民具研究家, 北隆館昆虫図鑑の蛾の図を執筆, 末弟黨 (1904~ ) は農学博士, 元農業技術研究所長で昆虫学者である.

山 口 捨 雄 (旧姓田畑) (1908~1939)

① 明治 41 年 6 月 1 日東京赤坂田畑孫太郎 3 男に生れ叔父山口治作の養嗣子となる. 金沢市より小樽に転居し小樽小学校卒, 大正 15 年小樽中学校卒, 昭和 7 年 3 月北海道帝国大学農学部農業生物学科動物学分科卒, 同年 4 月農林省農事試験場見習生として昆虫部勤務, 同 10 年 4 月助手, 13 年 5 月技手.

昭和 14 年 3 月 14 日脳脊髄膜炎のため歿 享年 30 才.

② アカエゾマツ及びクロエゾマツの苗樹に寄生する線虫に就て, 北大農学部演習林研究報告 7 : 209~215 (1932), 根瘤線虫 *Heterodera vadicolola* に就て, 農業及園芸 8 (5) : 1186~1190 (1933), 針金虫の防除法総覧 (訳), 応用昆虫 1 (1) : 33~34 (1938), 昭和 9 年より歿年まで本会幹事として会務につくされ, 殊に 20 周年記念大会で活躍, 本会中興の名幹事と謳われた.

③ — : 山口捨雄君を憶ふ, 昆虫 13 (3) : 138 (1939) (肖像写真付), 訃報: 応用昆虫 2

(3) : 128 (1939), 磐瀬太郎 : 古き佳き日, 1. 山口捨雄さんのこと, 日本昆虫学会大会新聞 1 : 1 (1957). 蔵書は農業技術研究所に寄贈され山口文庫となつている.

山田 信一郎 (旧姓阿部) (1883~1937)

① 明治 16 年 4 月 28 日新潟県中蒲原郡横越村阿部敬止の 2 男に生る. 明治 36 年 3 月新潟県師範学校卒, 同 40 年 3 月広島高等師範学校卒, 同 4 月石川県師範学校教諭, 大正 2 年 7 月東京帝国大学理科大学選科生を修了し引続き教室で研究, 同 4 年 6 月伝染病研究所技手, 同 8 年 10 月技師, 同 10 年 8 月衛生昆虫研究のため欧米各国へ留学, 同 12 年 10 月帰国, 昭和 3 年 4 月理学博士の学位を受く, 同 5 年 11 月シヤムへ出張, 同 12 年 4 月中華民国へ出張.

昭和 12 年 5 月 30 日中華民国済南にて研究中肺炎にて歿 享年 54 才.

② 日本産蚊科の 2 新種, 動物学雑誌 29 (341) (1917), 「ステゴニーア・ファスシアータ」ノ本邦ニ於ケル分布, 衛生学伝染病学雑誌 12 (5) 及同追加 13 (2) (1917), 晩秋近江彦根ニ於ケル「アノフェレス」ノ観察 (1~2), 動雑 30 (351)~(352) (1918), 北海道産「アノフェレス」ノ一新種, 衛生学伝染病学雑誌 13 (6) (1918), Description of ten new species of *Aedes* found in Japan, with notes on relation between some of these mosquitoes and the larva of *Filaria bancrofti* Cobold, Annot. Zool. Jap. 10 (6) (1921), A revision of the adult Anophelinae mosquitoes of Japan, Sci. Rept. Rept. Inst. Infec. Dis. 3 (1924), 流行性脳炎ト蚊トノ関係, 東京医学会雑誌 48 (12) (1934), その他 1937 年にかけて多数の報告がある.

③ 山田家 : 故山田信一郎追憶 (肖像・業績目録付, 医学雑誌の別刷? pp 1~11) (1937), 訃報 : 山田信一郎氏の訃, 応用動物学雑誌 9 (3/4) : 194 (1937), 阿部康男 : 山田信一郎博士を想う (付, 業績目録), 新昆虫 1 (3) : 42~43 (1945).

山田 種三郎 (1895~1927)

① 明治 28 年 5 月 1 日大阪市に市三郎 2 男として生る. 大正 2 年 3 月大阪府立堺中学校卒, 同 6 年 3 月第 3 高等学校 二部乙類卒, 同 9 年~10 年京都帝国大学理学部助手となり動植物学教室開講準備に当る, 同 10 年 3 月京都帝国大学理学部動物学科入学, 同 13 年 3 月同科卒, 引続き大学院に入学.

昭和 2 年 3 月 19 日歿 享年 32 才.

② フクラスズメ幼虫に見らるる反射運動の一型, 動物学雑誌 38 (456) : 333~(1926), 機械的刺戟に依るキリギリス第 3 歩脚の振顫反射に就て, 同上 45 (534) : 174~(1933), チャミノムシの冬眠に就ての一観察, 同上 45 (535) : 219~(1933), オビカレハ幼虫の諸種試薬に対する反応, 同上 45 (535) : 227~(1933), Studies on a peculiar ascillatory movement of the larvae of the Ramie Moth, *Arcte coerulea* Guen. et Grey., Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ. Ser. B 9 (9) : 1~45 (1933).

③ 川村多実二 : Obituary 山田種三郎略歴 (英文), Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ. Ser. B 9 (1) : 1 (1933).

山西清平<sup>セイヘイ</sup> (旧姓 岡) (1891~1966)

① 明治24年3月2日香川県木田郡林村に生る。香川県立木田農林学校卒，明治41年11月農商務省農事試験場昆虫部に見習生として入場，同44年12月より大正元年11月まで兵役に服す，大正元年11月同上退場，同2年香川県農事試験場病虫部勤務，農林技師，昭和19年退官。昭和19年より32年まで香川県農業共済組合連合会勤務，同32年より香川県植物防疫協会勤務，同36年同会副会長。

昭和41年6月30日歿 享年75才。

② オリーブ象虫調査概要，香川県農事試験場(1926)，蜜柑粉蝨駆除試験成績，病虫害雑誌22(1)：46~(1935)，蚕豆象虫と之が防除の一考察，農業750：44~(1943) その他多数。

③ 田村市太郎：山西清平翁の語る研究者とその時代(1~2)，植物防疫7(10)：386~389，7(11)：29~31(1953)，資料の一部は香川県農試尾崎幸三郎技師による。

山内甚太郎 (1886~1945)

① 明治19年1月29日四日市市蔵町甚三郎長男に生る。同37年3月県立第2中学校卒(第1回生)，同年9~12月名和昆虫研究所研究生として入所，同40年1年志願兵として守山聯隊に入隊，同43年3月名和昆虫研究所主催記念展覧会に教育標本を出品2等賞を受く，大正2年泗水昆虫研究会(後に四日市昆虫研究会)を創立，8月四日市市第六尋常小学校に於て昆虫展覧会を開催，名和靖を聘し講演会を開く，又自宅に山内昆虫研究所を創設す，其後家業の酒店を嗣ぐ。

昭和20年10月8日疎開地の羽津に歿 享年59才。

② 姫葉虫の形態，昆虫世界8(88)：505(1904)，昆虫分布の一片，同上9(100)：515(1907)，三重県産天蛾科に就て，博物研究会々誌(三重師範)1(2)，(1906)，葉虫2種の形態，同上1(3)，(1906)，八丁蜻蛉の新分布，昆虫学雑誌2(6)：46(1907)，伊勢菰野山蝶類目録(1915，四日市昆虫研究所刊)。山内氏研究啓蒙活動の影響を受けた人に同市の三輪勇四郎博士や林純之助氏(別項)などがある。

③ 三輪勇四郎：研究の動機，新昆虫11(13)：20~21(1958)，本項の資料は三重郡菰野町重盛志津氏(令妹)及び三重県鈴鹿短大教授三輪勇四郎博士による。

山村塙三郎<sup>ショウ</sup> (旧名 正三郎) (1894~1915)

① 明治27年6月17日滋賀県甲賀郡水口市生。明治45年3月県立水口農学校卒，同年4月名和昆虫研究所助手として入所，大正3年正三郎を塙三郎と改名，同4年退職，同年朝鮮京畿道植林苗圃に奉職，林業害虫研究に従事す。

大正4年12月5日病歿 享年29才。

② 明治43年4月水口市杉本菊四郎と共に水口少年昆虫学会を創立し「昆虫月報」なる回覧雑誌を発行す。報文に次のものがある，ヒオドシテフの生涯，昆虫世界14(159)：583~584(1910)，ツマアカシャチホコ飼育記，同上16(176)：113~(1912)，ヒメホシキコケガに就きて，同上17(188)：144~145(1913)，朝鮮樹木害虫の研究(1~3)，同上20(224)：145~148，(225)：193~199，(226)：227~230(1916)(遺稿)。

③ 訃報：昆虫学雑誌(京都)2：64(1916), 江崎悌三：少年は語る, 関西昆虫学雑誌 3(3)：15~28(1935), 矢野宗幹：遺稿の附記, 昆虫世界 20(224)：145~148(1916).

ナ <sup>ワダ</sup> <sup>ヒデ</sup> <sup>オ</sup>  
八 幡 英 夫 (旧姓 近藤) (1921~1945)

① 大正 10 年 12 月 15 日東京に生る。東京の商業学校を卒業し昭和 17 年 3 月東京高等農林学校農学科卒, 応召。

昭和 20 年 7 月 8 日戦病死 享年 24 才。

② Notes on the Glaphirinae of Japan, with description of a new genus and two new species, 関西昆虫学会報 12(1)：33~37(1942), Descriptions of two new *Paratrichius* species from Formosa, 同上 13(1)：6~8(1943), Description d'une espèce nouvelle appartenant au Genre *Anthicus* du Japon, 同上 14(1)：1~2(1944) このほか各種の雑誌に報告せしもの 45 編がある。昭和 13 年 6 月東京虫友会を創立 機関誌「虫友」を編集発行す。

③ 町田徳治・松下伝吾：近藤(八幡)英夫君を悼む, 付 論文目録, 生態昆虫 1(2/3)：105~109(1946).

## ユ

湯 浅 <sup>ヒロ</sup> <sup>ヘル</sup> 啓 温 (1900~1953)

① 明治 33 年 2 月 1 日 島根県那賀郡和田村に生る。大正 12 年 3 月第 6 高等学校理科甲類卒, 同 15 年 3 月東京帝国大学農学部農学科卒, 同年 4 月農林省農事試験場技手, 昆虫部勤務 昭和 5 年 9 月技師, 同 11 年日本昆虫学会及び日本応用昆虫学会評議員, 同 18 年 8 月中華民国へ出張, 同 22 年 4 月害虫部主任兼総務部主任兼図書課長, 同 23 年 1 月農薬検査所兼務, 同 5 月害虫部長, 同 24 年 1 月日本学術会議会員, 同年 12 月米国へ農業昆虫学界視察のため出張, 同 25 年 4 月農業技術研究所に統合と共に総務部図書課長, 兼総務部長, 昆虫科害虫防除第 2 研究室長, 同 26 年 7 月アムステルダムに於ける国際昆虫会議に出席のためオランダ, イギリスに出張, 同 27 年 1 月東京大学農学部講師, 同年 2 月農学博士, 同 28 年 9 月植物防疫協会理事。

昭和 28 年 10 月 21 日千葉市に出張中心筋閉塞のため歿 享年 53 才。

② 本邦産ハムシ科覚書 (1~5), 昆虫 2(2)：130~132, ~昆虫 13(5/6)：199~202(1927~1939), 畳表の害虫クシヒゲンバンムシの形態生態並に防除法に就きて (尾上哲之助と共著), 農事試験場集報 1(3)：215~230(1930), Two new species of Euncolpid-beetles noxious to the mulberry-tree in the Liukiu Islands, Proc. Imp. Acad. 6(7)：293~296(1930), セモンジンガサの生活史 昆虫 4(4)：253~258(1930), 本邦産タマムシ科幼虫の構造並に其の生活史, 農事試験場集報 2(2)：263~282(1933), 日本産金龜子類幼期形態及び生態 1, ドウガネブンブン 同上 3(2)：151~182(1938), 小麦の穂を害する瘿蠅類 応用動物 8(3)：150~154(1936) 稲稈蠅に対する稲の耐虫性に関する研究, 農技研究報告 C 1：257~279(1952) その他 1926 年より 1954 年まで多数の報文がある。

③ 木下周太：湯浅啓温氏を悼む 応用昆虫 9(3)：126~127(1953), 故湯浅啓温博士記念

号(略歴・肖像写真・著作目録付)同上 10(2):1~141(1954),河田党:湯浅君のことども植物防疫 7(11):2~3(1953),湯浅啓温博士追悼号:新昆虫 6(13):16~22(1954),田村市太郎:わが旅の人々(2)湯浅啓温氏の巻 植物防疫 10(1):437~(1956),松井松太郎:日本蝶類発見者物語,湯浅啓温博士とクロミドリシジミ,採集と飼育 29(8):260~266(1967).蔵書は農業技術研究所図書課に湯浅文庫として納まる.

### 三

#### 横山 桐郎(1896~1932)

① 明治29年9月25日又次郎2男として東京に生る(父又次郎(1860~?)は地質学者理博,東大名誉教授).明治40年3月麴町富士見小学校卒,同45年3月東京中学卒,大正4年3月熊本第五高等学校卒,同7年3月東京帝国大学農学部農学科卒,同9年9月農林省蚕業試験場嘱託,同14年3月「桑の野蝗蛾の研究」で農学博士の学位を受く,同6月東京農業大学教授,同15年3月東京虫の会を設立会長となり「蟲」を発刊す,同11月東京農業大学教授を解かれ嘱託となり,昭和2年1月蚕業試験場技師.

昭和7年8月1日歿 享年36才.

② メダカハネカクシと其分布,昆虫世界 17(187):122(1913),クロセスジハネカクシの生活史,同上 18(194):224~226(1914),日本産紋黄蝶の形態とクッカケモンキチフの学名,動物学雑誌 32(386)(1920),日本産桑害虫目録,蚕業試験場集報 19(1923),桑の野蝗蛾の研究 蚕業試験場報告 7(1)(1925)日本産經節虫の研究 同上 7(2)(1925),最新農用昆虫学教科書(富山房,1927),最新日本産桑害虫全書(明文堂,1929),实用蚕業害虫篇(弘道館,1933),その他,蟲(弥生書院,1926),蟻と蜂(1926),虫の世界を探ねて(講談社,1928),日本の甲虫(上下)(1930~1931),優曇華(創元社,1932)の著書のほか多数の報文随筆がある.

③ 横山桐郎:少年時代の思い出,蟲 2(4):246~248(1930).訃報:昆虫世界 36(421):35~36(1932),故農学博士横山桐郎君,昆虫 6(5/6)口絵肖像写真付(1932),二宮栄一:追悼文 同上:304,蟲 4(3/4)横山博士追悼号 略伝,主著作業績目録 その他追悼記事多数 p.1~98(1932).

#### 吉田 昌七郎(1851~1904)

① 嘉永4年福岡県筑紫郡住吉村に生る.明治9年頃東京麻布学農社に学び勸農局試験地に於て実習,同11年帰郷し福岡県庁に奉職,同27年新設の福岡県勸業試験場(後の福岡県農事試験場)に入場,害虫の試験研究に従事,同31年福岡県農会副会頭.

明治37年11月2日歿 享年53才.

② 螟虫駆除法(本松稔と共著)(福岡博聞社,1890),稻螟虫図解(藪田留と共著)(1~2)(森岡書店,1894),福岡県下螟虫駆除,大日本農会報,164:24~(1895),稻のムクゲムシ,同上,226:25~(1900).

③ 訃報:吉田昌七郎氏逝く,農学雑誌 895:506(1904),村田藤七:明治年間に於ける螟虫に関する研究及び駆除予防法の変遷,昆虫 9(4):181~203(1935)(著書の表紙写真

付), 織田富士夫: 明治時代に於ける我邦応用昆虫学の貴重なる文献に就て (1), 病虫害雑誌 22 (1): 3~37(1935).

## ワ

## 渡瀬 庄三郎 (1862~1929)

① 文久2年11月11日 (1862年12月31日) 生. 明治9年より13年まで東京英語学校及び大学予備門に学び開拓使官費生として札幌農学校入学, 同17年7月同校第4期卒, 道庁研究生として東京大学専門科に修学, 同19年渡米ジョンホプキンス大学に留学, 同23年ドクトルオブフィロソフィーの学位を受く, 同23年~25年クラーク大学講師, 同25~32年シカゴ大学教授 後ドイツに渡りキール大学に学び再び米国にもどりウッズホール臨海実験場講師, 同32年理学博士となり帰国東京帝国大学理科大学に勤務, 同34年理科大学教授, 大正3年3月退官, 同11月名誉教授.

昭和4年3月8日歿 享年66才.

② 螢の大きさ, 動物学雑誌 5 (61): 442 (1893) 螢の話, 同上 12 (137): 83~92 (1900), 螢に就て, 東洋学芸雑誌 18 (237): 219~(1901), 螢火に就て, 動物学雑誌 13 (154): 249~272 (1901), 学芸叢書螢の話 (開成社, 1902), 秋螢に就て, 動物学雑誌 16 (183): 1~15 (1904), 源氏螢と平家螢, 理学界 3 (12)(1905), 亜非利加の蝗禍, 動物学雑誌 23 (275) 口絵 (1911).

③ 渡瀬博士記念号, 動物学雑誌 43 (508, 509, 510): 1~78 (1931) (矢津直秀: 渡瀬博士略伝 (45~46), 林要次郎: 博士の論文 講演目録 (47~50) その他多数の追悼文を集録す) 三好学: 渡瀬庄三郎君を想ふ, 史蹟名勝天然紀念物 4: 374~385 (1929), 林魁一: 渡瀬博士を憶ふ 同上 463, 英文略伝; 日本生物地理学会々報 1(2) 巻頭 (1929), 黒田長礼: 故評議員渡瀬先生略歴, 鳥 28 (1929), 高島春雄: 渡瀬博士論著目録補遺, 動物学雑誌 44 (522): 162~163(1932), 同上: 同上追補 動物学雑誌 44 (528): 399 (1922).

ワタリ

## 渡 正 監 (1897~1953)

① 明治30年9月9日正之の長男として東京に生る (父正之 (1839~?)) は普仏戦争の際邦人として一人パリに籠域し「李仏戦争日誌8冊」を編む, 明治初年仏国陸軍士官学校に入り日本陸軍制度法律の基礎を作る). 大正10年4月東京帝国大学法学部政治学科卒, 東京府属, 社会局属, 大阪府警視保安課長, 警察講習所教授, 和歌山県書記官, 県警察部長などを歴任. 昭和6年静岡県書記官学務部長, 福島県警察部長を経て昭和10年青森県総務部長, 東京都経済部長, 千葉県総務部長を経て外務省に入り大使官参事官となり上海共同租界警視總監の要職につき, 戦後復員.

昭和28年2月7日肝臓ガンで歿 享年55才.

② 日本の高山蝶, 山岳 23 (2): 192~217 (1929), 日本産蝶類の変種異常型及新産地, 動物学雑誌 41 (486): 185~189 (1929).

③ 大先輩蝶を語る, 渡正監氏談: 新昆虫 6 (1): 35~38 (1953) (写真付), 訃報: 新昆虫

6 (3) : 18 (1953), 江崎悌三 : 尾高朝雄さんと渡正監さんへの追想, 新昆虫 9 (12) : 10~12 (1956).

### あ と が き

経歴資料不備のため、本稿に集録できなかった方は数百名にのぼるが、特に将来下記の方々の資料を得たいと念じているので御教示を頂ければ幸甚である。なおこれらの方々の中には御存命の方も含まれている可能性がある点を御含み頂きたい。

青山哲四郎, 秋山蓮三, 浅倉喜代松, 粟野伝之丞, 今村猛雄, 岩本嘉兵衛, 内田太郎吉, 梅沢親光, 梅原寛重, 江口 貢, 遠藤利久, 大上宇一, 大河原邦三郎 (旧姓 竹田), 大竹義道, 大橋賢之甫, 岡山兼吉, 金井汲治, 河内忠次郎, 神村直三郎, 神田左京, 兼常弥富, 木村定次郎 (小舟), 北上四郎, 栗崎真澄 (旧姓 滝沢), 黒岩恒, 齊藤偏理, 沢良三, 沢田歙義, 柴崎虎五郎, 塩田健蔵, 新開 悟, 杉山乙次郎, 大道金松, 高階於菟次, 高椋悌吉, 竹田鉦次郎, 十時雄二郎, 永沢定一, 西沢太吉, 仁礼景雄, 林泉, 林寿祐, 平田駒太郎, 平野藤吉 (旧姓 林), 深井武司, 福田 計, 福原恭助, 細野 淳, 前沢政雄, 正木 任, 松本賢吉, 町田貞一, 丸田助継, 嶺要一郎, 三好浩太郎, 村松茂 (明治 16 年 (頃) 生れの方と明治 25 年生れで朝鮮植検勤務の方), 本松稔 (旧姓 安部), 森山忠光, 矢崎正保, 梁田斌, 吉野剛, 渡辺勳次, 渡辺福寿.

小笠原貞蔵



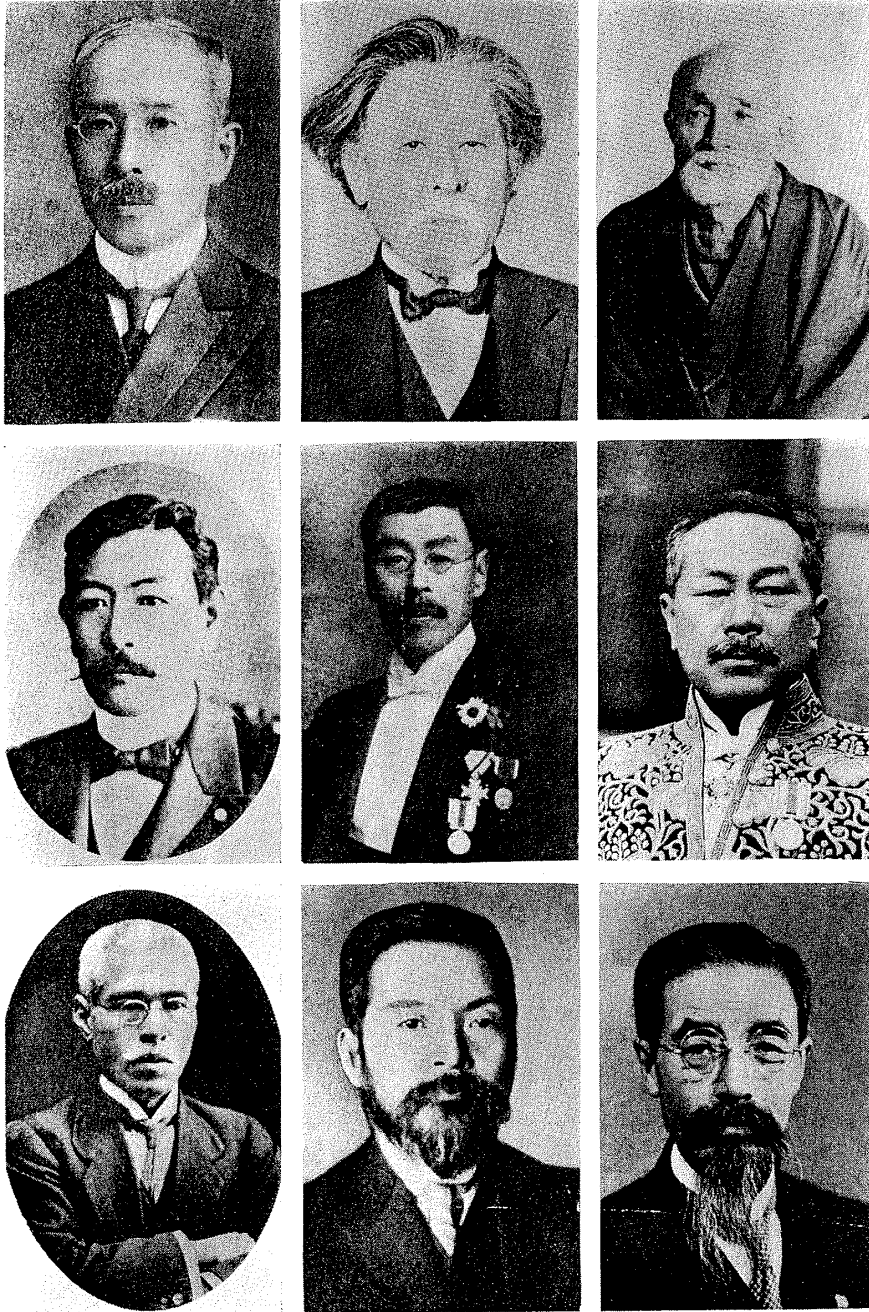
## 索引

- ア 行
- 青木 朗 …… 3  
 明石 弘 …… 3  
 秋山 元 …… 4  
 足立 元太郎 …… 4  
 荒川 保雄 …… 4  
 荒木 東次 …… 5  
 飯塚 啓 …… 5  
 生熊 与一郎 …… 6  
 池田 作次郎 …… 6  
 池田 米男 …… 6  
 石井 重美 …… 7  
 石井 悌 …… 7  
 石川 千代松 …… 8  
 石田 昌人 …… 9  
 石谷 福信 …… 9  
 石村 清 …… 10  
 石森 直人 …… 10  
 石渡 繁胤 …… 11  
 伊勢 秀夫 …… 11  
 磯村 純一 …… 11  
 伊藤 篤太郎 …… 12  
 糸賀 璋 …… 12  
 稲村 宗三 …… 13  
 猪股 修二郎 …… 13  
 今村 重元 …… 14  
 岩川 友太郎 …… 14  
 岩崎 卓爾 …… 14  
 上 忝治 …… 15  
 上原 孫市 …… 15  
 内山 繁太郎 …… 15  
 梅村 甚太郎 …… 16  
 梅谷 与七郎 …… 17  
 江崎 悌三 …… 17  
 江馬 定治郎 …… 19
- 大 国 督 …… 19  
 大 島 正 満 …… 19  
 大 塚 由 成 …… 20  
 大 林 一 夫 …… 21  
 岡 島 銀 次 …… 21  
 岡 田 十 蔵 …… 22  
 岡 田 忠 男 …… 22  
 岡 田 虎 二 郎 …… 22  
 岡 本 半 次 郎 …… 23  
 小 熊 太 郎 吉 …… 23  
 奥 村 多 忠 …… 24  
 小 島 銀 吉 …… 24  
 織 田 一 磨 …… 24  
 織 田 富 士 夫 …… 25  
 尾 高 朝 雄 …… 25  
 小 貫 信 太 郎 …… 26  
 小 野 孫 三 郎 …… 26
- 力 行
- 勝 又 要 …… 26  
 加 藤 静 夫 …… 27  
 可 児 藤 吉 …… 28  
 鹿 野 忠 雄 …… 28  
 川 上 滝 弥 …… 29  
 川 村 多 実 二 …… 29  
 神 沢 恒 夫 …… 29  
 神 田 重 夫 …… 30  
 木 下 周 太 …… 30  
 久 保 猪 之 吉 …… 32  
 黒 沢 三 樹 男 …… 32  
 桑 名 伊 之 吉 …… 32  
 桑 山 茂 …… 33  
 小 泉 丹 …… 33  
 河 野 禎 蔵 …… 34  
 河 野 廣 道 …… 34
- 小 竹 浩 …… 35  
 小 西 甚 七 …… 35  
 木 庭 康 喜 …… 36  
 小 山 海 太 郎 …… 36  
 是 石 鞏 …… 37
- サ 行
- 齊 藤 孝 蔵 …… 37  
 酒 井 久 馬 …… 38  
 坂 口 総 一 郎 …… 38  
 向 坂 幾 三 郎 …… 38  
 佐々木 忠 次 郎 …… 39  
 佐々木 長 淳 …… 39  
 佐 竹 正 一 …… 40  
 佐 藤 栄 …… 41  
 里 村 浩 …… 41  
 佐 野 貞 蔵 …… 41  
 沢 田 高 材 …… 42  
 沢 田 栄 寿 …… 42  
 芝 川 又 之 助 …… 43  
 芝 山 直 清 …… 43  
 島 田 五 郎 …… 43  
 白 岩 秀 雄 …… 44  
 進 土 織 平 …… 44  
 鈴 木 元 次 郎 …… 44  
 住 田 史 郎 …… 45  
 関 谷 英 夫 …… 45  
 莊 島 熊 六 …… 46
- 夕 行
- 高 嶋 春 雄 …… 46  
 高 千 穂 宣 磨 …… 47  
 高 野 鷹 蔵 …… 47  
 高 橋 奨 …… 48  
 高 橋 秀 雄 …… 49

高橋良一	49	野平安芸雄	66	曲直瀬愛	80
滝沢求	50	野村彦太郎	66	三島弥太郎	81
武内獲文	50			三橋信治	81
田中教義	50	八行		三宅恒方	82
田中房太郎	51	橋本左五郎	67	宮嶋幹之助	83
田中芳男	51	畠山久重	67	向川勇作	83
谷貞子	52	服部徹	68	棟方哲三	84
千野光茂	52	羽生道也	68	村井貞固	84
土田都止雄	53	土生津勘吉	68	村田藤七	84
土田兎四造	53	浜次雄	69	森為三	85
寺西暢	53	林慶	69	森野伊作	86
土居寛暢	54	林純之助	69	門前弘多	86
東条操	55	原撰祐	70		
鳥羽源藏	55	平山修次郎	70	ヤ行	
外山亀太郎	55	深谷徹	71	八木誠政	87
		福田仁郎	71	矢後正俊	88
十行		藤卷雪生	72	矢崎亥八	88
中川久知	56	古市与一郎	72	矢沢米三郎	89
永沢小兵衛	57	朴沢三二	73	屋代弘孝	89
長野菊次郎	57	堀井栄吉	73	矢野延能	89
中林馮次	58	堀田雅三	74	山川黙	90
中村正雄	58	堀健	74	山口捨雄	90
中村倭	59	堀松次	75	山田信一郎	91
波江元吉	59			山田種三郎	91
鳴門義民	60	マ行		山西清平	92
名和梅吉	60	牧茂市郎	75	山内甚太郎	92
名和靖	61	増井林太郎	76	山村壘三郎	92
新島善直	61	益田素平	76	八幡英夫	93
新村太朗	62	町田次郎	77	湯浅啓温	93
西村真次	62	松下真幸	77	横山桐郎	94
西谷順一郎	63	松永伍作	78	吉田昌七郎	94
新渡戸稻雄	63	松原新之助	78		
二宮元孝	64	松村源藏	79	ワ行	
練木喜三	64	松村松年	79	渡瀬庄三郎	95
野口徳三	65	松本鹿藏	80	渡瀬正監	95



佐々木長淳 (1830~1916) 鳴門 義民 (1833~1913) 田中 芳男 (1838~1916)  
練木 喜三 (1850~1910) 松原新之助 (1853~1916) 波江 元吉 (1854~1918)  
岩川友太郎 (1855~1933) 小野孫三郎 ( ? ~1914) 名和 靖 (1857~1926)



矢野 延能 (1859~1928) 石川千代松 (1860~1935) 池田作次郎 (1860~1938)  
大塚 由成 (1862~1925) 高千穂宜麿 (1865~1950) 橋本左五郎 (1866~1952)  
住田 史郎 (1866~ ? ) 外山亀太郎 (1867~1918) 飯塚 啓 (1868~1938)



長野菊次郎 (1868~1919) 小貫信太郎 (1869~1910) 増井林太郎 (1870~1963)  
石田 昌人 (1877~1940) 三宅 恒方 (1880~1921) 桑山 茂 (1882~1912)  
岡本半次郎 (1882~1960) 新渡戸稲雄 (1883~1915) 高野 鷹蔵 (1884~1964)



大島 正満 (1884~1965) 平山修次郎 (1887~1954) 野平安芸雄 (1892~1966)  
織田富士夫 (1895~1943) 小西 甚七 (1900~1944) 黒沢三樹男 (1903~1967)  
河野 廣道 (1905~1963) 鹿野 忠雄 (1906~1945) 滝沢 求 (1907~1936)